

平成27年度
ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉川大学FD委員会

はじめに

—FDの組織的推進をめざして—

玉川大学は、ファカルティ・ディベロップメント（FD）をマイクロ、ミドル、マクロの三層の立場から推進しています。マイクロ・レベルのFDの目的は、教員個々の授業と教授法の開発にあります。通常、多くの大学でFDの名のもとに行われるのがこうした活動です。本学でも、大学FD委員会が中心になって行うFD活動はマイクロ・レベルが中心です。一方、ミドル・レベルは教務主任等によるカリキュラム・プログラムの開発が目的です。教務委員会における全学カリキュラムの見直しや各学部の教務担当者会における専門分野のカリキュラム改善のための作業がこれに該当します。さらに、マクロ・レベルは、管理者による大学組織の教育環境および教育制度の開発が目的です。こちらもミドル・レベルと同様に、そのための具体的なFD研修会等が開催されるわけではありません。現行の大学部長会や大学院研究科長会の一環として定期的に行われる教育研究活動等点検調査委員会などの作業がFD活動に相当します。

ミドル・レベルとマクロ・レベルのFD活動は、その性格上、全学的な視点と学部的な視点が要求されますが、マイクロ・レベルのFDは、長いあいだ各教員の努力義務のように理解されてきました。したがって、ワークショップや研修会の参加についても教員の自主性に委ねられ、学部や全学が一体となって授業や教授法の開発に取り組んできたとは言い難い状況にありました。しかし、平成19年以降、本学では、複数の学部で、また教学部教育学修支援課が中心となって積極的に授業改善に取り組んでいます。その具体的な試みがピアレビューであり、大学FD委員会主催の授業方法改善のための研修会やワークショップの実施です。

今後も引き続き、個々の教員がファカルティの一員として有機的にFDにかかわれる体制を堅持していきたいと考えています。

大学FD委員会委員長
教学部長 稲葉興己

目 次

I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会	
(1) 委員会の目的	1
(2) 委員構成	1
(3) 今年度の活動計画および課題	1
(4) 活動状況	2
(5) 活動の成果	4
(6) 今後に向けて	4
2. 学部の活動.....	5
3. 教師教育リサーチセンターの活動.....	63
4. ELFセンターの活動.....	66

II 教員研修

新任教員研修会	
(1) 研修プログラム内容	76
(2) 配付資料・参考資料	77
(3) 実施の成果	78

III ユニバーシティ・スタンダード科目の「授業評価アンケート」

1. アンケート実施概要	81
2. 集計結果及び公表	81

参考資料

1. 大学 FD 委員会の議事内容	112
2. 「授業評価アンケート」用紙.....	114
3. 玉川大学 FD 委員会規程.....	118

※本文中の記載内容について

- ・本文中の文字表記については、原文のままとした。
- ・役職名称は、平成 27 年度当時の記載とした。

I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会

(1) 委員会の目的

本委員会は、本学教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的としている。また、FD 活動を行う目的を、以下のとおり明確にしている。

- ① 玉川大学の教育理念を実現するため。
- ② 21 世紀の玉川教育を支える教員を育成するため。
- ③ 大学大衆化時代に対応するため。
- ④ 競争優位性（受験生の大学選択等）を確保するため。

(2) 委員構成

委員等	所属	氏名
委員長	教学部長	稲葉興己
委員	FDer	小島佐恵子
委員	文学部	奥山望
委員	農学部	宮田徹
委員	工学部	黒田潔
委員	経営学部	伊藤良二
委員	教育学部	高平小百合
委員	芸術学部	田中敬一
委員	リベラルアーツ学部	小嶋正敏
委員	観光学部	小林直樹
委員	通信教育部	松山巖
委員	ELFセンター	ミリナー、ブレット
事務担当	教学部教育学修支援課	山崎千鶴
事務担当	教師教育リサーチセンター	高橋正彦
事務担当	教学部教務課	片野徹
事務担当	教育企画部教育企画課	金子勲
事務担当	人事部人事課	伊従記章

(3) 今年度の活動計画および課題

昨年度に引き続き、Tamagawa Vision 2020 の Action Plan 2015 に沿って取り組んだ。すなわち、

1. 各分野の学問分野に応じた教授法の研究開発の開始

大学教育再生加速プログラムの取組に伴い、ティーチング・ポートフォリオ、アクティブ・ラーニング、ルーブリック等の研修会を継続的に開催する。また、非常勤教員を対象に、授業改善、高等教育改革、本学の教育理念などをテーマとした研修会を継続して開催していく。

2. 双方向型授業、問題解決型授業（PBL）の研究会発足
発足したアクティブ・ラーニングの推進委員会を中心に、より効果的なアクティブ・ラーニングの実践、成績評価の可視化について検討していく。
3. 全授業科目の成績評価分布を公表する
ルーブリック指標による成績評価についてのワークショップを継続して開催する。
4. FDer の養成プログラムの作成と実施
アクティブ・ラーニング推進委員会を中心に、各学部から FDer 予定者を募る。また、学内における養成プログラムを検討するとともに、学外にて実施される養成プログラムに派遣をする。
5. 玉川大学教職員 Credo の草稿の作成
引き続き、本学 Credo の素案を検討する。

（４）活動状況

<平成 27 年度>

4月29日	TA 研修会「効果的に授業を支援するための TA の役割」 開催（講師：教育学部 小島佐恵子）
5月1日	第1回 大学 FD 委員会 開催
5月28日	米国 12 th The Teaching Professor Conference 教員派遣
～6月2日	
6月5日～7日	大学教育学会年次大会（長崎県 長崎大学）職員派遣
6月15日	TA 研修会「ハラスメントのない大学に」 開催（講師：本学顧問 弁護士 桑島英美）
7月3日	第2回 大学 FD 委員会 開催
8月18日	玉川学園将来計画委員会大学教員分科会 「研究倫理フォーラム 研究倫理と管理責任」 開催 基調講演「研究倫理と管理責任」（講師：東北大学 羽田貴史） 事例報告「人文・社会科学系」（報告：山口大学 木村友久） 事例報告「理工系」（報告：脳科学研究所長 木村 實）
9月10日	岡山大学主催 FD・SD 研修 「桃太郎フォーラム XVIII」教職員派遣
10月2日～4日	愛媛大学・日本高等教育開発協会主催 「ファカルティ・ディベロッパー養成講座」教員派遣
11月13日	第3回 大学 FD 委員会 開催
11月20日	首都大学東京主催 FD セミナー 「能動的学びの実践と学習成果の評価」 職員派遣
12月9日	FD 研修会 「発達障害のある学生の理解について」 開催（講師：教職大学院 安藤正紀）

12月26日～28日	大阪府立大学工業高等専門学校主催 「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ」 教員派遣
12月15日	科目担当者研修会 ワークショップ『授業を通して修得できる力』から考えるアクティブ・ラーニング」 開催（講師：教育学部 小島佐恵子）
1月8日	第4回 大学FD委員会 開催
1月15日	科目担当者研修会 ワークショップ「学生が学び合う授業づくりとアクティブ・ラーニング」 開催（講師：経営学部 伊藤良二）
2月12日	産業能率大学主催公開FD研修会 「アクティブラーニングと学習成果の可視化について」 職員派遣
2月24日	「平成27年度 大学教育力研修（FD・SD）」開催 基調講演「反転授業を組み込んだアクティブ・ラーニング」（講師：山梨大学 森澤正之） 分科会①「ルーブリック指標による評価の意義と手順」（講師：聖心女子大学 杉原真晃） 分科会②「反転授業の取り組み方① - 山口大学知財教育の実践を例に」（講師：山口大学 木村友久） 分科会③「反転授業の取り組み方② - 島根大学全学共通教育・文系科目の実践を例に」（講師：島根大学 鹿住大助） 分科会④「授業英語科のための第一歩」（講師：福岡女子大学 和栗百恵） 分科会⑤～⑧「各学部事例報告」
3月5日・6日	大学コンソーシアム京都主催 「第21回FDフォーラム」 職員派遣
3月12日	名古屋大学主催 「大学教育改革フォーラム in 東海 2016」 教員派遣
3月17日・18日	「平成28年度新任教員研修会」 開催
3月22日	RD研修会 「平成26年度共同研究成果発表会」 開催
3月28日	「非常勤教員研修会」 開催

その他、学生による授業評価アンケート、ピア・レビュー、第三者によるシラバス確認などを実施した。授業評価アンケートは、US 科目については教育学部教育学修支援課が、各学部開講科目については開講学部が実施した。

また、ピア・レビューについては32件の授業があがり、内31件が全学教職員に提供された。

第三者によるシラバス確認は平成16年度開講科目より実施しており、ある程度定着したと考えてよいであろう。シラバスを前半（履修登録に資するために公開するもの）と後半（履修登録をした学生のみ見られるもの）に分け、前半については科目開講年度の前年度1月に全科目を確認、後半については春学期科目は前年度の3月、秋学期科目は当該年度の8月に確認している。また、科目の特性により確認する点が異なることから、教育職員免許状取得に関わる科目については教師教育リサーチセンターが、また、それ以外の科目については教

育学修支援課が確認を担当した。

また、12月、1月の「科目担当者研修会」および2月の「大学教育力研修（FD・SD）」は、平成26年度に採択された「文部科学省 大学教育再生加速プログラム（AP）」の取組として実施した。「大学教育力研修」は平成23年度より開催している「大学FD・SD」をより目的を明確にするため、名称を変更した。当該研修の午後には分科会を行っているが、今年度は8件の分科会を開催した。これに対し、教員から参加したい分科会が複数あるとの意見を聞き、すべての分科会を撮影し、学内限定にて動画配信をすることとした。FD研修会の動画配信は今後も継続していく予定である。

さらに、今年度初めて、非常勤教員のみを対象とした研修会を開催した。これまで、科目担当者研修会では専任教員のみならず、非常勤講師も対象としてきた。しかし、科目担当者研修会では教育力向上を目的とした研修会が多く、本学の教育活動について説明する機会はなかった。そのため、例えば科目担当者として学生ポートフォリオへの書き込みが求められていながら学生ポートフォリオのことを知らない。また、なぜアクティブ・ラーニングの活用を求められるのか、シラバスの確認が行われているのか、説明がなされてこなかった。しかし、学生にとっては専任であろうと非常勤であろうと、同じ教員、科目担当者である。そこで、非常勤講師に限ることなく、学生と関わる非常勤の教員全員に対して、今の本学の取組について説明する機会を設けた。講師は教学部長が担当し、本学における高等教育改革について話された。さらに、学生ポートフォリオの操作方法の説明および教育学術情報図書館の見学が行なわれた。

（5）活動の成果

今年度の活動計画に基づき、活発な取組をすることができた。とくに、他機関が開催する関連研修会等には教員のみならず職員も多く参加し、教職協働を実現すると同時に、教員と職員が同じスタンスに立ってFD活動を推進することができた。

また、前項のとおり、APに沿って複数の研修会等を開催した。これらは、アクティブ・ラーニングの活用と学修成果の可視化を目的とするものであり、一定の理解は得られたものと考えている。

FDerの養成については、候補教員を他大学主催の養成講座に派遣することができた。当該教員は昨年度から学内ワークショップの講師を担当しており、今年度に養成講座に参加したことで、学内においてはFDerとして活躍する土台ができた。

ただし、ピア・レビューについては、広い範囲への公開が定着してきているものの、一方で、参観者がいない科目もあった。通常の授業時間内で行なっているため、大学教員が参観しにくい状況があることもわかった。

（6）今後に向けて

次年度においても、他機関主催の関連研究会等には積極的に参加し、関係教職員への情報提供を行いたい。また、学内で開催する研修会等についても多様な内容のものを開催していきたい。とくに、APの取組を中心に、ティーチング・ポートフォリオ導入に向けた研修会、アクティブ・ラーニングに関する研修会、ルーブリック指標による評価に関する研修会、非常勤教員対象研修会等を予定している。

詳細については、Tamagawa Vision 2020 の Action Plan 2016 に沿って進めていく。

2. 学部の活動

平成 27 年度における各学部 FD 活動の状況を一覧にする。

	各学部 FD 委員会 の構成人数	各学部 FD 委員会 の開催回数	学生による授業評価アンケートの実施			学部研修会
			実施時期	専任 対象	公表	
文学部	7 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後*1	全員	学内外 (Web)*2	学内外実施
農学部	7 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内外 (Web)	学内実施
工学部	6 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内外 (Web)*3	学内実施 学期終了後 各 2 回
経営学部	5 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内外 (Web)	学内実施
教育学部 (通信教育 部含)	8 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内	学内実施
芸術学部	7 名	5 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内	学内実施
リベラルアーツ 学部	5 名	2 回	秋学期終了後	全員	—	学内外実施
観光学部	5 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内	学内実施

*1: 対象全科目を春学期、秋学期いずれかで 1 回実施（重複実施はせず）。

*2: 文学部における学生によるアンケート結果の公表は、比較文化学科と英語教育学科で実施している。

*3: 学外向けには総括内容を大学 HP (Web) で、学内向けには全内容の詳細を報告書冊子として、それぞれ公表している。

※ユニバーシティ・スタンダード科目についての学生によるアンケートは別途実施している。

§ 文学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

基本的な理念は従来と変わらず、社会の大学に対する期待とニーズの多様化と、大学生の学力低下という現実に対応すべく、FD による役割意識と方法論の変革によって、時代に即した、そして普遍性を兼ね備えた大学教育を実現すべく努力するということである。また学生の就労意識の変化に対応した学生へのキャリアないし就職指導も、大学にとって重要性を増しているのに加え、文学部では比較文化学科が英語教育学科に移行する過程にあり、より FD の重要性は増しているといえる。

かかる現状認識の下、文学部では、一人ひとりの教員が文学部の理念や教育目標の実現に向けて意識を高め、職能成長できるような FD 活動を心がけている。そして、一部の教員のみが FD 活動を担うのではなく、全員が主体的に FD 活動に参加し、組織的な FD 活動を実現できるような体制を構築することを目標にしている。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

文学部長および主任会（教務主任、学生主任、人間学科主任、比較文化学科・英語教育学科主任）のもとに、文学部 FD 委員と人間学科・比較文化学科・英語教育学科の FD 担当（比較文化学科・英語教育学科は FD 委員が兼務）で、文学部 FD 委員会を組織している。

この FD 委員会は、年に 2 回の FD 委員会を招集する他、各学科の学科会あるいは運営委員会等においても定例的に FD 活動の企画・運営に関する事項の審議を行っている。

3 平成 27 年度の活動内容

(1) 研修会－教育学術情報図書館・ラーニング・コモンズ活用のための研修

① 概要（目的を含む）

今年度から新しくなった教育学術情報図書館とラーニング・コモンズの施設詳細を知り、授業への活用法を考える。

② 到達目標

新施設の概要を知り、何ができるかを理解する。

③ 活動内容

7 月 2 日（木）の 15 時 15 分から 1 時間、教育学術情報図書館とラーニング・コモンズそれぞれの担当者による施設の紹介と使い方の説明を受け、最後に質疑応答を行った。

④ 評価

文学部の専任教員 15 名が参加（欠席 2 名）、施設の基本的な使い方を理解した。

(2) 授業設計・成績評価ミーティング（人間学科）

① 概要（目的を含む）

複数教員が授業担当をする諸科目について、とりまとめ役を座長として授業の計画・内容・成績評価に関する合意形成を目的としたミーティングを行なった。

② 到達目標

各科目の授業担当者間において科目の教育目標達成のための合意形成を得る。

③ 活動内容

授業経験の報告と意見交換、授業改善の提案、成績評価に関する検討、他科目との連携の可能性、教員による授業評価

a) 「人間学演習」「人間学名著購読」授業内容の検討

授業内容の向上のため、授業の進め方と評価方法の統一に関して、学科教員全体で意見交換と検討を行った。

b) 「人間学特殊講義」(集中) 授業内容の検討

この科目は、フィールドワークを中心とした学生参加型の授業であるが、担当する複数の教員間で意見交換と内容の検討を行った。平成 24 年度から広島大学大学院工学研究科で開発したキットビルド概念マップを導入し、受講生の授業の理解度を可視化し、授業者がそれを把握できるようにした。

④ 評価

上記授業において、授業展開のための合意形成と、今後に向けての指針、さらに学生による授業評価の点において、掲げた目標は 100%達成できた。

a) については、必要に応じて随時行った意見交換の結果、情報共有が進み、授業内容の向上に効果があった。

b) については、授業者が前年度の受講生の授業理解度を踏まえた授業改善を行うことによって、受講生の授業の理解度の向上という成果を得た。この成果は第 22 回大学教育フォーラムにおいて発表し、好評を得た。(「(4) 学外セミナーへの教員派遣」の項参照)

(3) 授業評価アンケート (比較文化学科・英語教育学科)

① 概要 (目的を含む)

比較文化学科および英語教育学科で開設している授業について、授業評価アンケートを実施した。個々の教員が、担当する授業を点検し、改善するための指標を得ることが目的である。

② 到達目標

教員の意図と学生の受け止め方の間にどのような差があるかを検証し、次の学期あるいは次の年度の授業改善に具体的に生かす。

③ 活動内容

実施時期：

春秋両学期に開講している科目は春学期末に、秋のみの科目は秋学期末に実施した。

対象科目：

比較文化学科・英語教育学科で今年度開講した全科目 (ただし FYE 科目、US 科目、「比較文化セミナー」、「比較文化基礎セミナー」、教職関連科目、履修者が 10 名以下のクラスを除く) で実施した。

集 計：

集計は業者に委託して、各クラス別、カテゴリー別、全体の 3 レベルで集計し、かつクラスごとにアンケート各項目と総合的満足度の相関分析を加えている。

フィードバック：

各授業担当者にはアンケート原票、クラスの集計結果、カテゴリーおよび全体の集計結果、各項目と総合的満足度との相関分析をフィードバックした。

また、全体の集計結果は大学ホームページ上で公開する予定である。

④ 評価

アンケートおよび集計は予定通り実施、前記の方針で抽出した 72 科目(春 41 科目、秋 31 科目)中、63 クラスでアンケートを回収(春 38 科目、秋 25 科目)、総有効回答者数 1,749 (春 1,254、秋 495)、回答率は 87.14%であった。

学生による総合評価の評点(5 点満点)は春秋とも 4.4 で、昨年度の 4.2 を上回った。内容の分析は 4 月以降行う予定である。

なお、今後の問題として、新学科への移行に伴い、内容と実施方法の見直しが必要である。

4. 学外セミナー等への教員派遣

① 概要(目的を含む)

他大学での FD 活動の取り組み方法やその成果についての情報を収集し、文学部の FD 活動に活かすため、学外で開催されるセミナーに教員を派遣する。

② 到達目標

文学部専任教員の 20%を何らかの学外 FD 研修会に派遣する。

③ 活動内容

1. 大学コンソーシアム京都主催 第 21 回 FD フォーラム

開催日：平成 28 年 3 月 5 日～3 月 6 日

派遣：1 名(比較文化学科教員 1 名)

2. 京都大学高等教育研究推進センター主催 第 22 回大学教育研究フォーラム

開催日：平成 28 年 3 月 17 日～18 日

派遣：4 名(人間学科教員 4 名)

発表：以下の 3 件のポスター発表を行い、好評であった。

(1) 成功的教育観を取り入れた授業リフレクションの枠組みの開発

茅島路子、小田部進一、宮崎真由、林大悟、前田啓輔、林雄介、平嶋宗

(2) 成功的教育観を取り入れた授業リフレクションの実践

小田部進一、茅島路子、宮崎真由、林大悟、前田啓輔、林雄介、平嶋宗

(3) 要点マップを用いた映像講義のタグ付と予習としての活用

林雄介、茅島路子、小田部進一、宮崎真由、前田啓輔、平嶋宗

④ 評価

参加者数延べ 5 名は学部専任教員の 20.8%であり、数値目標は達成した。

昨年度の 48%には遠く及ばないが、これは英語教育学科の教員の大半が、この時期、留学準備のための海外出張をしていたためである。

また、ポスターセッションという積極的な取り組みが評価される。

(4) 授業参観

① 概要(目的を含む)

文学部教員の授業力向上のため、授業参観を実施。授業を公開する教員は、参観者

からの意見を聞くことによって改善に役立て、参観した教員は、他の教員の授業運営の方法を参考に自分の授業改善に結びつける。

② 到達目標

参観を通して授業実施者と参観者のそれぞれが自らの長短所を自覚し、授業力の向上の方法論的手がかりを得る。

③ 活動内容

実施時期：秋学期

実施内容：

人間学科：全科目・随時参観可とした。

比較文化学科・英語教育学科：「EIC in Mass Media」「中国語Ⅱ」（参観随時）

および「英語科指導法（総合）」「英語科指導法Ⅰ」（日時指定）計4科目

④ 評価

参観者数は、人間学科がのべ12名、比較文化学科・英語教育学科は1名であった。参観後は担当教員との率直な意見交換があり、今後の参考に資するところが多かったが、参観者が少ないというのが現状である。これは参観の時間のやりくりが困難であることが主たる原因である。時間設定の工夫をするか、さらには他の方策を考える必要もあるであろう。

4 昨年度（平成26年度）に提案された予定・課題の達成度について

今年度の目標は、ほぼ一通り達成することができた。ただ今年是新学科の立ち上げがあったため、一部のFD活動は、その影響で十分に遂行することができなかった。

5 今後（平成28年度以降）の予定・課題について

来年度以降に関しても、まずは従来の活動の継続と活性化が基本である。それに加えて、あらたな環境に対応した、ないしは対応するためのFD活動も行っていく必要がある。また近年関心の高まりをみせているアクティブ・ラーニングを取り入れた授業改善については、文学部がこれまで培ってきた授業改善を踏まえて積極的に取り組んでいく。各教員が担う学内業務も多様さを増しているが、学部内、学科内および複数担当授業内でコンセンサスをとる機会を捻出しながらしっかりと対応していきたい。

§ 農学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

玉川大学の教育理念に基づいた教育を実現し、さらなる教育と授業改善、学生理解の向上を達成するため、大学 FD 委員会と協調しつつ、全ての教員に研修会への積極的な参加を促す。また、専任教員および非常勤講師は学生による授業評価を実施し、授業改善への意識を高める。さらに授業評価の結果に基づき授業参観を実施し、教員間での授業改善への理解を共有できるようにする。学部内では、主任会の構成メンバーを中心に各教員との情報交換に努める。これらを通して、教員は自らの資質向上に対する意識をさらに高め、社会に貢献できる卒業生を農学部として育成するために組織的な FD 活動を推進する。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

農学部長、生物資源学科主任、生物環境システム学科主任、生命化学科主任、学生主任、教務主任、および大学 FD 委員の計 7 名が中心となり、目標達成にあたる。

3 平成 27 年度の活動内容

(1) 研修会

① 概要（目的を含む）

学部内での研修会は 1)「農学部ハラスメント防止研修会(桑島英美弁護士)」、2)「農学部心の健康について考える研修会(田亮介先生, 医療法人財団青溪会駒木野病院)」、3)「高校『生物』の学習過程を理解する研修会(村杉拓夢先生, 城南予備校講師)」、さらに 4)「高校『化学』の学習過程を理解する研修会(小林謙太郎先生, 城南予備校講師)」を実施した。

1)、2)については、農学部全教員を対象とし、研究と教育活動の円滑な実施と大学生への適切な指導および支援を目的に、また 2)、3)については、入試問題作成に関わる全ての教員を対象として、入試問題の適正な作成に活用することを目的とした。

② 到達目標

1)については、教員と学生間または教職員間のハラスメント防止、2)については、心に不安を抱え学生生活が満足に進められない学生への理解と対応、3)と 4)は、平成 28 年度大学入試の問題作成の振り返りと、高校生の生物、化学の学習の現状について理解することを到達目標とした。

③ 活動内容

1)は、大学で起きているセクシャルハラスメント、アカデミックハラスメント、パワーハラスメントの具体的な事例を中心に講義していただき、世代や立場による考え方の違いがハラスメントを生じさせるきっかけとなり、職場環境の改善や意思表示、コミュニケーションのとり方によってハラスメントを無くすお互いの努力について心構えを聞いた。2)は精神科医の立場から大学生の近年の精神的な特徴と傾向について講義していただき、日本学生支援機構や他大学の学生対応のマニュアルについて紹介してもらった。発達障害者支援法や障害者差別解消法などの法整備の現状についても紹介してもらった。3)と 4)では今年度のセンター試験を含めた各大学での入試問題の出題傾向を話してもらい、生物と化学には教科書の記載内容が出版社によって大

大きく異なることから、入試問題作成に対しての留意点や今後の作問の方策について議論した。また高等学校の理科が新課程になり、数年が経過した中で、学習内容が増加した生物と化学について、高校の現場における学習状況と受験生の理解度を話してもらい、入試問題作成や初年度の基礎科目の学修方針について意見交換をした。

④ 評価

1)については、教員間または教員と院生・学生間での具体的なハラスメントの事例から、日常の研究活動、教育活動における留意点を確認できた。ハラスメントを受けた際の対処法や、受けないための職場および教育環境改善について理解できた。2)は最近の大学生の精神的な傾向として、自身の問題を表現できない、自己理解の過程が進んでいない、何を悩んでいるのか本人自身も解っていないことが多く、大学生は精神疾患の好発年齢になっていることを聞いた。発達障害や精神疾患に対しての社会的な対応、法整備が進む中で大学での組織的な取り組みの重要性を理解した。3)と4)では、教科書の発展の内容が大幅に増加しており、大学の入試問題でもやや難易度の高い内容が多く盛り込まれる傾向にあることを知った。しかし、教科書の内容は出版社によって差異があり、受験者への公平性を保つには注意が必要である。また高等学校理科の学習内容が非常に増大したことによって、高校の指導現場でも順調に授業が進んでいない現状を聞いた。

(2) 学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

授業改善のために、農学部科目担当の教員（専任および非常勤講師）に協力を求め、講義科目と実験・実習科目の受講生 30 名以上の必修科目を中心に、授業評価アンケートを実施した。

② 到達目標

授業の状況把握により講義技法や情報伝達の仕方、教育設備の向上に活用し、授業改善を達成する。また、大学 HP 上に結果を公開することで受験生および関係者に対し、授業の健全性をアピールする。

③ 活動内容

春学期 58 クラス、4,209 名、秋学期 58 クラス、4149 名に対して授業評価アンケートを実施した。

アンケートを集計後、結果を各教員に送付した。さらに、大学 HP に学部、学科単位での集計結果を公開した。また、アンケートの記述欄を活用するために原本を各担当教員へ返却した。

④ 評価

昨年度に授業評価アンケートの改訂を行った。質問項目と記述欄が増えたが、今年度も記入時間を配慮してもらい実施した。アンケート結果は概ね良好な傾向を示した。学科間または授業間で、各項目に若干の変動がみられ、授業改善の一定の方向性を各担当教員に示すことができたと考える。講義科目に比べ、実験・実習科目での総合評価が若干高かったのは、実際に身体を動かし体験する授業での学修効果が高いことを示し、アクティブ・ラーニングの要素を取り入れ、学生の理解向上を図るべきであると考えられた。

表. 平成27年度の授業評価アンケート集計結果 (3学科のアンケート実施科目すべて)

(春学期-講義科目)

分野	設問	平均値	強く思う	ややそう	どちらとも	あまりそう	全くそう	無効 回答数	
			5	4	3	2	1		
I	1 あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか	3.9	20.2%	51.2%	23.9%	3.8%	0.9%	6	
	2 あなたがこの授業1回分の授業外に学習(予習・復習・課題)した時間はどれくらいですか	3.0	11.0%	18.3%	39.3%	24.2%	7.3%	6	
	3 この授業のシラバスはあなたの受講に役立ちましたか	3.4	12.6%	29.9%	44.2%	9.2%	4.1%	18	
	4 あなたはこの授業の目標を把握できていましたか	3.7	17.0%	41.4%	34.2%	5.6%	1.7%	15	
II	5 授業はシラバスに沿って進められましたか	3.7	20.2%	39.8%	34.4%	3.9%	1.7%	20	
	6 授業の進行速度は適切でしたか	3.7	23.8%	36.2%	27.7%	9.7%	2.6%	86	
	2)早かった 1)遅かった					86.2%	13.8%	129	
	7 授業内容の難易度は適切でしたか	3.5	18.5%	34.5%	30.5%	14.1%	2.4%	79	
	2)難しかった 1)易しかった					94.1%	5.9%	201	
	8 教員の声や話し方は明瞭で聞き取りやすかったか	4.0	34.8%	35.5%	23.2%	6.7%	2.2%	19	
	9 教科書、プリント、参考文献などが授業の理解に役立ちましたか	4.0	34.8%	35.5%	23.3%	4.7%	1.7%	15	
	10 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)や板書が授業の理解に効果的でしたか	3.9	34.1%	34.7%	24.4%	4.8%	2.0%	22	
	11 授業内容は系統的によく整理され準備されていましたか	4.0	33.1%	37.2%	24.6%	3.8%	1.3%	27	
	12 課題、レポートの量は授業内容を理解する上で適切であったか	3.7	24.5%	34.9%	32.6%	6.1%	1.9%	86	
	13 教員は効果的に学生の参加(質問、発言、自主学習)を促しましたか	3.8	25.5%	34.7%	31.9%	5.5%	2.3%	13	
	14 教員は受講生の反応を確かめながら授業を進めていましたか	3.8	27.4%	39.4%	26.7%	5.4%	2.2%	12	
	15 教員は熱意を持って授業していましたか	4.1	37.6%	36.5%	22.2%	2.5%	1.2%	21	
	III	18 この授業の内容をよく理解できた	3.7	18.1%	41.3%	31.5%	6.9%	2.2%	8
		19 この授業の内容に興味・関心が持てた	3.8	27.2%	38.4%	26.3%	5.6%	2.5%	10
20 自分で調べ、考える姿勢が身についた		3.7	22.0%	39.2%	31.6%	5.4%	1.8%	11	
21 この授業を通して新しい知識や考え方が習得できた		4.0	30.2%	41.9%	23.7%	2.7%	1.5%	10	
総合評価		平均値	強く思う	ややそう	どちらとも	あまりそう	全くそう	無効	
IV	22 この授業を受講して有意義であった	4.0	31.8%	39.5%	23.0%	3.7%	2.0%	19	

(春学期-実験・実習科目)

分野	設問	平均値	強く思う	ややそう	どちらとも	あまりそう	全くそう	無効 回答数	
			5	4	3	2	1		
I	1 あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか	4.3	43.0%	48.1%	7.8%	1.0%	0.2%	0	
	2 あなたがこの授業1回分の授業外に学習(予習・復習・課題)した時間はどれくらいですか	3.6	28.1%	23.7%	29.4%	16.9%	1.8%	2	
	3 この授業のシラバスはあなたの受講に役立ちましたか	3.6	20.7%	33.6%	38.0%	4.4%	3.3%	3	
	4 あなたはこの授業の目標を把握できていましたか	4.0	27.1%	51.8%	19.4%	1.2%	0.5%	1	
II	5 授業はシラバスに沿って進められましたか	4.0	32.2%	37.8%	26.9%	1.9%	1.2%	3	
	6 実験・実習内容の量は適切でしたか	3.9	26.0%	43.8%	21.9%	7.0%	1.2%	12	
	2)多かった 1)少なかった					94.9%	5.1%	28	
	7 実験・実習内容の難易度は適切でしたか	3.8	24.0%	43.6%	23.8%	7.5%	1.2%	13	
	2)難しかった 1)易しかった					92.1%	7.9%	31	
	8 実験や実習の方法や作業の説明は明瞭で分かりやすかったか	4.0	30.2%	46.1%	19.7%	3.4%	0.6%	2	
	9 教科書、プリント、参考文献などが授業の理解に役立ちましたか	4.1	35.6%	41.7%	19.8%	2.1%	0.7%	2	
	10 映像視覚教材(パワーポイントなど)や実験材料が授業の理解に効果的に活用されていましたか	4.0	32.3%	38.6%	24.0%	4.3%	0.9%	3	
	11 実験・実習がスムーズに進められるよう、材料や器具が十分準備されていましたか	4.3	48.5%	36.4%	12.9%	1.5%	0.7%	3	
	12 課題、レポートの量は授業内容を理解する上で適切であったか	3.8	24.6%	41.2%	25.1%	7.2%	1.9%	16	
	13 教員は効果的に学生の参加(質問、発言、自主学習、実験・実習への取り組み)を促しましたか	4.2	36.9%	44.2%	17.4%	1.1%	0.5%	2	
	14 教員は受講生の反応を確かめながら授業を進めていましたか	4.1	34.8%	44.0%	17.7%	2.8%	0.7%	1	
	15 教員は熱意を持って授業していましたか	4.3	45.3%	37.4%	15.9%	0.9%	0.6%	5	
	III	18 この授業の内容をよく理解できた	4.1	27.9%	53.5%	16.7%	1.5%	0.4%	0
		19 この授業の内容に興味・関心が持てた	4.2	39.2%	45.2%	13.4%	1.8%	0.4%	1
20 自分で調べ、考える姿勢が身についた		4.2	37.5%	46.2%	14.9%	1.0%	0.4%	1	
21 この授業を通して新しい知識や考え方が習得できた		4.3	46.7%	40.8%	12.1%	0.2%	0.2%	3	
総合評価		平均値	強く思う	ややそう	どちらとも	あまりそう	全くそう	無効	
IV	22 この授業を受講して有意義であった	4.3	49.1%	37.2%	12.6%	0.9%	0.2%	6	

(秋学期-講義科目)

分野	設問	平均値	強く思う	ややそう	どちらとも	あまりそう	全くそう	無効	
			5	4	3	2	1		回数
I	1 あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか	3.8	19.7%	50.4%	25.0%	4.1%	0.9%	3	
	2 あなたがこの授業1回分の授業外に学習(予習・復習・課題)した時間はどれくらいですか	2.9	7.1%	19.2%	39.3%	28.0%	6.4%	3	
	3 この授業のシラバスはあなたの受講に役立ちましたか	3.5	12.4%	34.8%	43.0%	6.8%	2.9%	6	
	4 あなたはこの授業の目標を把握できていましたか	3.7	17.0%	43.5%	33.4%	4.6%	1.6%	8	
II	5 授業はシラバスに沿って進められましたか	3.8	20.8%	43.4%	31.8%	2.9%	1.0%	5	
	6 授業の進行速度は適切でしたか	3.8	22.8%	41.4%	26.2%	8.2%	1.4%	46	
	2)早かった 1)遅かった					85.8%	14.2%	78	
	7 授業内容の難易度は適切でしたか	3.6	19.0%	38.8%	29.0%	10.8%	2.4%	49	
	2)難しかった 1)易しかった					96.5%	3.5%	127	
	8 教員の声や話し方は明瞭で聞き取りやすかったか	3.9	28.7%	39.4%	23.6%	6.2%	2.1%	22	
	9 教科書、プリント、参考文献などが授業の理解に役立ちましたか	4.0	34.0%	40.1%	21.1%	3.2%	1.7%	8	
	10 映像視聴教材(パワーポイント、ビデオなど)や板書が授業の理解に効果的でしたか	4.0	35.1%	38.1%	21.6%	3.6%	1.7%	9	
	11 授業内容は系統的によく整理され準備されていましたか	4.0	31.9%	42.0%	21.4%	3.2%	1.4%	10	
	12 課題、レポートの量は授業内容を理解する上で適切であったか	3.8	25.1%	37.6%	32.8%	2.8%	1.7%	58	
	13 教員は効果的に学生の参加(質問、発言、自主学習)を促しましたか	3.8	25.4%	36.5%	30.9%	5.2%	2.0%	10	
	14 教員は受講生の反応を確かめながら授業を進めていましたか	3.9	28.8%	38.8%	26.3%	4.3%	1.8%	7	
	15 教員は熱意を持って授業していましたか	4.0	34.8%	39.6%	22.5%	1.9%	1.3%	7	
	III	18 この授業の内容をよく理解できた	3.7	18.7%	43.3%	29.7%	6.4%	1.9%	7
		19 この授業の内容に興味・関心が持てた	3.8	25.6%	40.5%	26.6%	5.4%	2.0%	10
20 自分で調べ、考える姿勢が身についた		3.7	21.4%	40.6%	30.9%	5.1%	1.9%	8	
21 この授業を通して新しい知識や考え方が習得できた		3.9	27.6%	43.9%	24.0%	3.1%	1.5%	10	
総合評価		平均値	強く思う	ややそう	どちらとも	あまりそう	全くそう	無効	
IV	22 この授業を受講して有意義であった	3.9	30.3%	40.8%	23.9%	3.2%	1.8%	22	

(秋学期-実験・実習科目)

分野	設問	平均値	強く思う	ややそう	どちらとも	あまりそう	全くそう	無効	
			5	4	3	2	1		回数
I	1 あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	39.1%	47.6%	11.8%	1.3%	0.1%	1	
	2 あなたがこの授業1回分の授業外に学習(予習・復習・課題)した時間はどれくらいですか	3.5	22.2%	25.4%	32.7%	17.0%	2.7%	2	
	3 この授業のシラバスはあなたの受講に役立ちましたか	3.6	18.6%	37.1%	35.3%	6.7%	2.0%	1	
	4 あなたはこの授業の目標を把握できていましたか	4.0	25.0%	51.1%	21.2%	2.6%	0.1%	0	
II	5 授業はシラバスに沿って進められましたか	4.0	34.0%	35.9%	28.1%	1.6%	0.4%	4	
	6 実験・実習内容の量は適切でしたか	4.0	27.5%	45.4%	22.2%	4.5%	0.4%	7	
	2)多かった 1)少なかった					85.7%	14.3%	15	
	7 実験・実習内容の難易度は適切でしたか	3.8	24.9%	42.8%	24.7%	6.4%	1.2%	7	
	2)難しかった 1)易しかった					89.7%	10.3%	27	
	8 実験や実習の方法や作業の説明は明瞭で分かりやすかったか	4.0	32.8%	43.4%	19.7%	3.4%	0.7%	5	
	9 教科書、プリント、参考文献などが授業の理解に役立ちましたか	4.1	35.9%	40.6%	19.7%	3.4%	0.4%	2	
	10 映像視聴教材(パワーポイントなど)や実験材料が授業の理解に効果的に活用されていましたか	3.9	29.7%	38.8%	26.0%	4.0%	1.5%	2	
	11 実験・実習がスムーズに進められるよう、材料や器具が十分準備されていましたか	4.3	47.2%	37.2%	14.4%	1.1%	0.1%	3	
	12 課題、レポートの量は授業内容を理解する上で適切であったか	3.9	28.1%	43.9%	22.5%	5.1%	0.4%	20	
	13 教員は効果的に学生の参加(質問、発言、自主学習、実験・実習)への取り組みを促しましたか	4.1	37.0%	41.9%	19.0%	1.7%	0.4%	2	
	14 教員は受講生の反応を確かめながら授業を進めていましたか	4.1	36.2%	42.9%	17.9%	2.4%	0.7%	1	
	15 教員は熱意を持って授業していましたか	4.2	43.3%	38.3%	16.7%	0.9%	0.7%	4	
	III	18 この授業の内容をよく理解できた	4.0	27.8%	50.0%	19.7%	2.3%	0.3%	3
		19 この授業の内容に興味・関心が持てた	4.1	39.2%	39.7%	17.5%	3.0%	0.7%	1
20 自分で調べ、考える姿勢が身についた		4.2	39.1%	42.3%	16.4%	1.6%	0.5%	1	
21 この授業を通して新しい知識や考え方が習得できた		4.3	45.6%	39.2%	13.4%	1.3%	0.4%	1	
総合評価		平均値	強く思う	ややそう	どちらとも	あまりそう	全くそう	無効	
IV	22 この授業を受講して有意義であった	4.3	44.8%	37.4%	16.2%	1.2%	0.4%	2	

(3) 教職員を対象とした公開授業

① 概要（目的を含む）

教員の講義力・教育力向上を目指し、教員相互の授業参観を実施した。今年度から学生による授業評価アンケートの結果を参考にし、総合評価の高かった授業の参観を学科ごとに行い、報告書を作成してもらった。報告書をもとに学科会で授業改善に向けたディスカッションを企画した。

② 到達目標

公開授業の実施意義を各教員が理解するとともに、教授方法などを参考とする。授業内容や授業規模に対する設備施設活用を考える。

③ 活動内容

教員相互の授業参観を実施すべく、全学の専任および非常勤の教員に対して授業を公開した。授業を公開した教員は3学科で合計3名とした。

④ 評価

授業参観への参加率が大きく増加した。生物資源学科9名、生物環境システム学科2名、生命化学科7名であった。学科によっては時間割、海外研修プログラムの出張などにより参加できない教員もいた。授業を参観し、授業を進めるスピードや話し方、スライド資料の作成方法や授業展開など参考になる点が多々あったと回答する教員が多く、学科会における議論でも学生の学修向上に向けた活発な話し合いができた。また教室、設備に対しての意見もあり、授業の規模や内容にあわせた学修環境の適正が必要であると考えられた。今後も授業評価アンケートを基とした授業参観の実施を行っていくことが承認された。

4 昨年度（平成26年度）に提案された予定・課題の達成度について

心に不安を抱えた学生は顕在化しており、成績悪化による学修継続条件への抵触の何件かは、これに起因する。研修会においても大学に通う時期が精神疾患の好発年齢となっていることを聞き、近年の大学生の精神的傾向を学び知ることができた。発達障害者支援者法や障害者差別解消法などの法律が整備されている中で、学部あるいは大学としての対応を組織としてつくり上げていく必要性を感じた。

毎年実施している予備校講師との入試問題についての研修と意見交換によって、高校の生物および化学における現行カリキュラムへの対応が前進してきている。高校の教育課程の変更に伴って、入試問題の出題範囲や出題形式を変更しているが、予備校の先生からは評価が高かった。しっかり勉強してきている受験生を、選抜できる入試問題の作成にこれからも努めていく。

一方で入学した学生の学力には差がある。それは高校時の授業選択や入試形態が多様であることが原因であると考えられるが、学生の学力を把握し、適切な指導を進めることが求められる。ティーチング・アシスタント(TA)の登録された科目は、農学部で実験実習さらに講義科目でも多数ある。復習やレポート返却後のサポートを実施している科目があり、TAの活用は学力不足の学生の指導に有効であると考えられる。今年度は卒業要件にGPAの基準が入り、学修継続条件などが変更になったカリキュラムでの学生が4年次となり、3月に社会へ送り出した。来年度は16単位CAP制の新カリキュラムでの学生が4年次となる。新カリキュラムの目標である学修時間の確保と、その結果に続く学生の質の向上へ授業改

善やカリキュラムの点検を進めている。現状としては警告学生への対応の負担が大きい側面もある。

今年度は授業改善のための授業参観の科目を各学科で授業アンケートの結果より選出し、学生に評価の高い授業を参観して報告書を提出してもらう形式をとった。授業参観への参加者は増加し、報告書をもとに授業改善への議論が学科会で行えた。専門分野などにより各教員がもつ授業スタイルがあるが、授業参観を通して様々な授業形態を知ることは刺激になり、授業改善に繋がる一歩となる。アクティブ・ラーニングの導入などを通して学生の学修成果向上が求められる中で、授業改善に対する教員相互の組織的な取り組みをさらに進めていくことを確認した。

5 今後（平成 28 年度以降）の予定・課題について

- ・ 各種研修会（学内、学外）への参加への啓蒙的活動
- ・ 基礎学力不足の学生の把握と分析
- ・ 入学後の学生の適切な指導対応
- ・ 新カリキュラムの適切な運営と点検
- ・ 授業評価アンケートの公開方法および範囲の検討
- ・ 授業評価アンケートの授業への還元方法の検討
- ・ 教員相互の授業参観の組織的な取り組みと授業改善
- ・ 大学院 FD 委員会との連携強化

§ 工学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

工学部全教員が Tamagawa Vision 2020 を共有し、「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」との工学部の理念・目標に向けて、教育内容・教育環境の向上をはかることを継続している。

昨年度まで報告しているように、平成 25 年度入学生に適用されたカリキュラム改定では、入学生の学力不足対応のため 1 年次には専門科目を入れずに基礎教育を 3 学科共通で用意した。同時に平成 25 年度入学生から 16 単位キャップ制および GPA による警告制度・卒業要件が揃って適用された。それに加えて、平成 26 年度入学生に適用されたカリキュラムでは開講科目数が削減された。

また、平成 27 年度にはエンジニアリングデザイン学科が新設され、学部 4 学科体制となった。その全ての学科の平成 27 年度入学生に対しても、16 単位キャップ制および GPA による警告制度・卒業要件は同様に適用されている。

一方、平成 24 年度入学生に適用された履修 20 単位キャップ制および GPA による警告制度・卒業要件は完成年度を迎えた。この年度の入学生はそれ以前の年度の入学生同様に学期 20 単位の履修が可能であったが、警告制度が取得単位数割合から GPA へと変更適用されたわけである。したがって、全学的に GPA による警告制度・卒業要件の総括は今年度において必要であると考えられる。

このような状況下において、工学部全教員が現状を適切に理解すること、そのために 16 単位キャップ制および GPA 警告制度における学生の学修状況を分析すること、その結果と課題を把握し共有すること、次へ向けてより効果的で充実した指導の在り方を議論・検討すること、は工学部の理念・目標の検討と具現化のために非常に重要である。これらは工学部の最重要課題であり、主たる FD 活動である、「授業評価アンケート」および「工学部 FD 研修会」においてなされるものである。

昨今、アクティブ・ラーニングの重要性がさまざまに強調されているが、この件に関しては大学全体での研修会等開催されているため、現状においてはそちらにその展開をゆだねることとする。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

昨年度まで報告しているように、平成 20 年度までは工学部 FD 活動の多くが ISO9001 教育マネジメントシステムの運用によるものであった。一方、機械情報システム学科は平成 21 年度に一度 ISO9001 運用から離脱し、簡易化した PDCA のサイクルの自力運用へと変更した。しかし、当該学科は平成 26 年度に ISO9001 運用に復帰し、平成 26 年度は、機械情報システム学科、ソフトウェアサイエンス学科、マネジメントサイエンス学科の工学部 3 学科で ISO9001 運用を実施することとなった。

また、平成 27 年度にはエンジニアリングデザイン学科が新設されたことにより、ISO9001 運用は学部 4 学科へと拡張され、平成 27 年 10 月に全学科が ISO9001 認証継続を受けた。

以上のことにより、工学部では全学科において ISO9001 運用の中で FD 活動の多くが実施・継続されている。その運用において、学生による授業評価アンケート、教員による

授業改善計画・実行・点検、授業参観、工学部 FD 研修会の実施などを、授業評価検討会、教務担当者会、主任会等が相互に確認・補完し運営している。ISO9001 運用の詳細は、工学部発行「教育クオリティマニュアル」において記述されている。

現状では、毎年のカリキュラム改定、16 単位キャップ制・GPA 警告制度への移行等、教育システム上見逃せない課題が多いため、工学部全専任教員参加による工学部 FD 研修会の年 2 回開催を平成 24 年度以来継続しており、このことが工学部の最重要の FD 活動となっている。

3 平成 27 年度の活動内容

平成 27 年度工学部 FD 活動計画にそって、その詳細について以下のように記述する。

(1) 工学部 FD 研修会

① 概要

工学部最重要 FD 活動の一つである。春学期（第 1 回）・秋学期（第 2 回）にそれぞれ開催された工学部 FD 研修会のまとめ冊子（工学部・教育企画室・教育学修支援課において保管）の目次を図 1 および図 2 に示す。テーマと目的は図 1 および 2 に記載のとおりである。

② 到達目標

FD 活動への取り組みの項で記したように、本活動において工学部全専任教員が全学科の学生成績および学生への対応方針を共有し、工学部各学科の今後の組織的指導展開の構築と、学生への教科指導に効果的に反映できるようになること、が到達目標である。

③ 活動内容

詳細はまとめ冊子（工学部・教育企画部教育企画課・教学部教育学修支援課において保管）を参照されたい。ここでは各報告の概要について簡単に記述する。

第 1 回

1. 本年度春学期学習状況分析結果報告（GPA・単位取得率・経年比較 等）

- (1) 機械情報システム学科：春学期 16 単位制下の学修状況、成績比較、警告者比較
- (2) ソフトウェアサイエンス学科：入学生の分析、平成 24,25,26 年度に比べた平成 27 年度の GPA の比較、数学プレイスメントテストと GPA の因果関係、平均 GPA と平均単位取得率、警告者数
- (3) マネジメントサイエンス学科：平成 24,25,26,27 年度入学生の初期試験と一年次春 GPA
- (4) エンジニアリングデザイン学科：春学期 16 単位キャップ制下の学修状況、成績比較、警告者比較、確認テスト結果と履修モデル
- (5) 数学研究室：平成 27 年度 1 年生 「代数学入門」の結果
- (6) 物理研究室：平成 27 年度新入学生 物理学学力テストの結果と「物理学入門」の成績
- (7) 学部全体の状況：教務主任：学部全体の状況と今後（警告者の動向）

2. 警告者の経過動向と今後の指導方針

- (1) 機械情報システム学科：学科における数学・物理の履修指導について
- (2) ソフトウェアサイエンス学科：警告者の経過動向と今後の指導方針

- (3) マネジメントサイエンス学科：警告者の動向と今後の指導
- 3. 授業評価アンケート結果：授業評価アンケートの結果報告（図7）
- 第2回
 - 1. 本年度秋学期学修状況分析結果報告（GPA・単位取得率・経年比較 等）
 - (1) 機械情報システム学科：春学期 16 単位キャップ制下の学修状況、成績比較、警告者比較
 - (2) ソフトウェアサイエンス学科：1 年生の成績、平成 27 年度とそれ以前との比較、入学生の分析
 - (3) マネジメントサイエンス学科：平成 24～27 年度入学生の初期試験と 1 年生春秋 GPA
 - (4) エンジニアリングデザイン学科：春学期 16 単位キャップ制下の学修状況、成績比較、警告者、2 年生履修パターン例
 - (5) 学部全体の状況：教務主任：学部全体の状況と今後（警告者の動向）
 - 2. 最近の専門科目受講者動向
 - (1) 機械情報システム学科：
 - (2) ソフトウェアサイエンス学科：平成 27 年度 プログラミング I 実施報告、テスト結果（平成 26,27 年度）、数学プレイスメントテストとの関係
 - (3) マネジメントサイエンス学科：授業評価アンケート結果、発見事項
 - 3. 授業評価アンケート結果：授業評価アンケートの結果報告（図8）

④ 評価

昨年度まで報告しているように、各学科の総合的学修状況分析結果、専門科目学修状況分析結果およびそれらの今後の対応方針を共有し、工学部のあり方や指導に効果的に反映できてきていると考えられる。工学部では FD 研修会終了後に「発表資料＋発表者による解説」から成る記録冊子を作成し、必要に応じて学部内にて、主任を経由して利用可能となっている。

特に平成 24 年度入学生に適用された履修 20 単位キャップ制および GPA による警告制度・卒業要件は完成年度を迎えたことの総括、平成 25 年度入学生に適用された適用 3 年目の履修 16 単位キャップ制・GPA 新警告制度・改定カリキュラムの下における学生の学修成果情報を共有できたことは、今後の対処に有益である。

教務主任による総括では、以下のことが報告された。平成 25 年度入学生に適用された適用 3 年目の履修 16 単位キャップ制・GPA 新警告制度下における学生の学修状況については、1 年次春semester GPA<1.8 の学生の卒業へのハードルは非常に高いものとなっており、至急の学修策の対応が必要であるとの認識を持った。平成 27 年度入学生警告者については、ELF（4 単位）により、英語に不慣れな学生がこの科目を落としたため GPA が下がったことも要因の 1 つと考えられた。平成 26 年度入学生警告者については、専門科目により、従来の学修方法では教科内容に追いつけない学生が多いことが推察された。平成 25 年度入学生警告者については、各学科とも警告 3 回で退学した者とその前に退学を決めた者が非常に多く表れていた。総括として、制度に関わる指導内容を示し、履修上の工夫などについても提案を行った。特に大学 FD の中でも紹介された、反転授業及びアクティブ・ラーニングを取り込むことも課題の一つと考えられるとのことである。

教授会メンバーはほぼ出席しており、警告を受けた学生への指導対応・対策が提示され、認識・共有できた。

平成 27 年度 第 1 回 工学部 FD 研修会【解説／まとめ付】

日時：平成 27 年 9 月 10 日（木）9 時 00 分～10 時 00 分

場所：8 号館 第 2 会議室

テーマ：GPA・単位取得率による成績動向の把握による教員の指導方針共有

目的：① 1 年生においては GPA・単位取得率による成績の過去との比較

② 2 年生以上においては主たる専門科目の成績動向の過去との比較

③ 以上により、教員団が工学部生の成績に対し従来との比較を鑑みつつ、現状に関する共通の認識を持って教科指導の充実をはかること

内容：① 学習状況分析結果報告（学部・各学科・数学・物理学）

② 警告者の経過動向と今後の指導方針

③ 授業評価アンケート結果報告

到達目標：全学科の学生成績および学生への対応方針を共有し、工学部各学科の今後の組織的展開と、学生への教科指導に効果的に反映できるようになること。

	プログラム	頁
1.	本年度春学期学習状況分析結果報告	
	（1）機械情報システム学科 教務担当 岡田 浩之	1
	（2）ソフトウェアサイエンス学科 教務担当 大崎 正雄	6
	（3）マネジメントサイエンス学科 教務担当 佐藤 健治	10
	（4）エンジニアリングデザイン学科 教務担当 福田 靖	14
	（5）数学研究室 豊田 昌史	20
	（6）物理研究室 水野 貴敏	28
	（7）学部全体の状況 教務主任 相原 威	33
2.	警告者の経過動向と今後の指導方針	
	（1）機械情報システム学科 学科主任 相馬 正宜	38
	（2）ソフトウェアサイエンス学科 学科主任 山崎 浩一	43
	（3）マネジメントサイエンス学科 学科主任 菅原 昭博	47
3.	授業評価アンケートの結果から FD 担当 黒田 潔	52
○	解説／まとめ （各報告の最終頁）	

以上

図 1 春学期開催工学部 FD 研修会プログラム

平成27年度 第2回 工学部FD研修会【解説／まとめ付】

日時：平成28年3月10日（木）9時00分～9時50分

場所：8号館 第2会議室

テーマ：GPA・単位取得率による成績動向の把握による教員の指導方針共有

目的：①1年生においてはGPA・単位取得率による成績の過去との比較

②2年生以上においては主たる専門科目の成績動向の過去との比較

③以上により、教員団が工学部生の成績に対し従来との比較を鑑みつつ、現状に関する共通の認識を持って教科指導の充実をはかること

内容：①学習状況分析結果報告（学部・各学科・学科専門科目）

②授業評価アンケート結果報告

到達目標：全学科の学生成績および学生への対応方針を共有し、工学部各学科の今後の組織的展開と、学生への教科指導に効果的に反映できるようになること。

プログラム		頁
1. 本年度春学期学習状況分析結果報告		
(1) 機械情報システム学科	教務担当 岡田 浩之	<u>1</u>
(2) ソフトウェアサイエンス学科	教務担当 大崎 正雄	<u>6</u>
(3) マネジメントサイエンス学科	教務担当 佐藤 健治	<u>11</u>
(4) エンジニアリングデザイン学科	学科主任 春日 幸生	
	教務担当 福田 靖	<u>15</u>
(5) 学部全体の状況	教務主任 相原 威	<u>20</u>
2. 最近の専門科目受講者動向		
(1) 機械情報システム学科	白崎 博公	—
(2) ソフトウェアサイエンス学科	大竹 敢・大崎 正雄	<u>25</u>
(3) マネジメントサイエンス学科	根上 明	<u>32</u>
3. 授業評価アンケートの結果から	FD委員 黒田 潔	<u>39</u>
○ 解説／まとめ	(各報告の最終頁)	

以上

図2 秋学期開催工学部FD研修会プログラム

(2-1) 授業評価検討会および授業評価総合検討会

① 概要（目的を含む）

各授業の授業評価アンケート結果と、教員が授業ごとに作成している「授業実施チェックシート」（ISO9001 運用上の教育クオリティ記録・様式 No.7301-05、事実上のポートフォリオである）を基に、学科ごとに「授業評価検討会」を実施することが ISO9001 運用上定められている。ここでは主に授業上の不具合を抽出し、次期への課題を考察する。

セメスター末の教務担当者会では、学科ごとの「授業評価検討会」においてなされた報告を各学科教務担当が持ち寄り、学部として「授業評価総合検討会」を実施することが ISO9001 運用上定められている。ここでは各学科からの報告を基に、各学科教務担当が総合的に検討を加え、その結果を学部としての次期への授業改善の実施策として各学科へフィードバックされ、各学科における改善の実施に寄与させる。

② 到達目標

授業評価と授業実施チェックシートを基にした授業改善の継続的な検討が目標である。学科の人材育成目標にかかる授業カリキュラムの継続的な検討へと常に移行できる体制の維持も二つ目の目標である。

③ 活動内容

授業評価総合検討会実施日：春学期 平成 27 年 9 月 8 日

秋学期 平成 28 年 3 月 4 日

④ 評価

学生による授業評価アンケート・教員による授業チェックシート・ISO9001 運用上の科目別教育クオリティ目標一覧表 評価（様式 No.7301-04）・各学科による授業評価検討会によって、授業改善サイクルが定着している。

授業評価検討会は、授業評価総合検討会の数日前の各学科会時に各学科で開催され、授業評価アンケート・授業チェックシート・ISO9001 運用上の科目別教育クオリティ目標一覧表 評価を用いて議論されている。

授業評価総合検討会では、各学科で議論された内容が ISO9001 運用上の科目別教育クオリティ目標一覧表 評価（様式 No.7301-04）・ISO9001 運用上の授業評価検討会議事録（様式 No.7302-05）を用いて説明され、その内容を構成員である教務主任各学科、教務担当および FD 担当が議論する。

主に議論された内容は、科目別教育クオリティ目標一覧表 評価（様式 No.7301-04）における評価項目の「授業評価・成績 B 以上 60%」である。この範囲を外れる授業科目は当然存在するわけであるが、その対応法を学科を超えて議論した。学生が理解しやすい授業法や授業の構成法について意見が出され、学生が理解しやすいことと学生の理解度のみを依拠した授業の違いなど、相反する意見もあるのであるが、それらはそれぞれにもっともな内容であり、議論することによってより良い方向を検討した。

また授業評価アンケートについても、できるだけ実施率が高くなるよう、その仕組みについて反省点が説明され、例えばアンケート用紙の配布法やオムニバス授業や複数担当の科目の実施法、または各教員にとってアンケートとしての意義がある質問項目の検討などがなされた。

以上の検討項目は、再び各学科へフィードバックされ、次期の授業展開へ資するこ

ととなる。

(2-2) 研究授業 (参観授業)

① 概要 (目的を含む)

春学期と秋学期に各学科より1名ずつの教員が各自の担当科目に関して参観授業を実施する。担当授業は所属学科専門科目に限る必要はなく、全学US科目・他学科科目でも問題としない。春学期は工学部教員に公開し、秋学期は全学教職員に公開している。各学科教員数は10名前後であるため、4～5年で一巡する。本項目の実施目的は、学生による授業評価アンケートとは別の視点で、参観者(各学科教員または全学教職員)からの評価を授業改善につなげることである。

② 到達目標

参観者(工学部教員または全学教職員)からの評価を基にした授業改善の継続的な検討が目標である。

③ 活動内容

今年度の実施授業について表1に示す。

表1 平成27年度工学部研究授業(参観授業)実施

	学科	対象科目	担当教員	開催日時限	教室
春 学 期	機械情報システム 学科	情報理論	相馬 正宣	6月15日(月) 1・2時限	⑧号館 324
	ソフトウェアサイ エンス学科	回路基礎	相原 威	5月19日(火) 7・8時限	⑧号館 325
	マネジメントサイ エンス学科	代数学入 門	牛越恵理佳	5月28日(木) 1・2時限	⑧号館 320
	エンジニアリング デザイン学科	導入ゼミ	川森 重弘	6月25日(木) 7時限	⑧号館 311
秋 学 期	機械情報システム 学科	ソフトウェア ライティング	菅野 直敏	11月2日(月) 3・4時限	⑧号館 321
	ソフトウェアサイ エンス学科	ゲーム企画 開発論	小笠原亜衣	1月13日(火) 3・4時限	⑧号館 221
	マネジメントサイ エンス学科	プロジェクト マネジメント	根上 明	11月17日(火) 3・4時限	⑧号館 322
	エンジニアリング デザイン学科	管理会計	山田 義照	12月18日(金) 3・4時限	⑧号館 420

また、参観者が工学部教員である場合、参観しつつ記入する「工学部教員授業参観者チェックシート」を図3に、さらにその評価を受けて参観授業実施者が記入しFD委員に提出する「研究授業(科目担当者票)」を図4に示す。「工学部教員授業参観者チェックシート」は授業担当者が保管し、「研究授業(科目担当者票)」は授業担当者
とFD委員が保管する。

④ 評価

参観授業実施者が記入し FD 委員に提出する「研究授業(科目担当者票)」によれば、それぞれの教員が実施する授業に対してさまざまな評価を受けていることがわかる。ここで重要なことは、その評価がその後の授業改善に資することである。つまり、要改善と指摘されることは、プラスの効果を生むべきことであり、単に批判批評では授業改善に役に立たない。参観する側にも、評価する責任があるということである。工学部における参観授業では、その後につながる評価を参観者がしていることがうかがわれ、今後の FD 活動に大いに資する活動項目となっている。参観授業実施者が記述している、今後の対処計画、について以下に示す。1年あたり8人がこれらの授業改善を実施すれば、数年で授業の質が大きく向上すると考えられる。

- ・アイコンタクトは、相互の学習において必要な要素であることから、今後の授業ではできる限り意識して行うように心がけたい。
- ・説明には、できるだけ教科書に沿ったフレーズを用いて行うように心がけたい。
- ・黒板の端のあたりで文字が乱れがちなので、どこの箇所でも文字をきれいに書けるように努力する。また、定理やその証明を紹介するときは、学生に伝わりやすいように使う記号や説明の仕方を工夫する。そして扱う定理の理解を深めるために、演習の時間をさらに取り入れる。
- ・授業開始時に今日説明することの概要や意義について話すように心がける。
- ・デジタル機器による騒音により、担当者の説明が聞き取れない部分があるため、各機器の間に簡易的な仕切りを設けるなど対応したいと考えます。
- ・来年度では、各デジタル機器を使い、一つの造形物を完成させるプログラムを考えたいと思います。
- ・グループ中には、自分ではあまり関わらず、ほかの人に便乗する学生がどうしてもでてくるので、その対処法も考えたいと思います。
- ・説明用のポスターをもう少し充実させ、それらを活用することで、学生にわかりやすい説明ができるようにしたいと考えます。
- ・簡単な小テスト演習は重要であるので、やっていきたい。時間の関係で、数値計算を自習課題として与えるようにしている。普段、学生にはホワイトボードに書かせているが、今日はノートを使うことになった。
- ・体の向きについて、プロジェクタースクリーンに体を向けてしまうクセがあることがフィードバックによってわかったので、授業中に意識して改善する。
- ・スライドのデザインについては、自己流を改め、フォーマットをダウンロードして対応する。
- ・スライドの文字の大きさを統一し、補足資料の充実を図る。
- ・課題内容に合わせて、授業内にて適時確認する。
- ・ハンドアウトの印刷は授業の前日までにメール添付で教員へ連絡するように言っていたが、周知できていなかったもので、Blackboard 等を利用して周知徹底する。
- ・受講生の人数が 80 名と多いため、TA や SA の協力を得て教室内の学習環境の整備に努めたい。

研究授業チェックシート

本シートはプレゼン研修フォームに基づく

科目名		担当教員	記入者	月	日	時～	時
項目	評価	あてはまるものを囲む			フリーコメント		
話し方	声の大きさ	A B C D E	大きすぎる	適切でよく聞える	小さくて聞き取りにくい		
	明瞭さ	A B C D E	明瞭である	普通である	不明瞭で聞き取りにくい		
	速度	A B C D E	早口である	適切である	遅すぎる		
	抑揚	A B C D E	抑揚があり力強く印象深い	普通である	メリハリがない		
	語尾	A B C D E	語尾までよく聞き取れる		語尾が消え聞き取りにくい		
分かりやすさ	話の主旨	A B C D E	話したい主旨が分かった				
	理解度	A B C D E	学生の立場で理解できる				
	量	A B C D E	内容が多すぎる	適切である	内容が少なすぎる		
姿勢	体の向き	A B C D E	前を向いていることが多い		前を向いていないことが多い		
	姿勢	A B C D E	堂々としてよい	時々揺れる	猫背など姿勢が悪い		
	アイ・コンタクト	A B C D E	よくとれている	時々とれている	殆どとれていない		
	落ち着き	A B C D E	落ち着いている	普通である	せわしない		
	癖	A B C D E	気になる癖がある		気になる癖はない		
提示資料	文字の大きさ	A B C D E	適切である	適切でないものが時々ある	適切でないものが多い		
	図解	A B C D E	図解があつてよい		もっと図解が必要である		
	理解度	A B C D E	分かりやすい図面が多い		分かりにくい図面が多い		
	使い方	A B C D E	効果的である		あまり効果が得られない		

全体を通じてのコメント

よかった点

改善点

教員以外の方へ：本授業を見学しようと思われた理由をお聞かせください

記入後は、科目担当者へお渡しください。

科目担当者は、本用紙の内容を「研究授業(参観授業)科目担当者票におまとめください。

図 3 工学部教員授業参観者チェックシート

研究授業（参観授業）科目担当者票	
学科名	学科
実施科目名	
担当者名	
開催日・曜日・時限	___年 ___月 ___日 ___曜日 ___時限
反省会開催日時	
効果的であると評価を受けた点	
改善することが望ましいと指摘を受けた点	
今後の対処計画	
対処結果	

科目担当者は、記入後、大学FD委員（物理・黒田）までご提出ください。

図4 研究授業（科目担当者票）

(3) 学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

昨年度まで報告しているように、工学部では授業内容・方法・スキルの向上等の授業改善を具体化することを目的として、平成 12 年度秋学期より継続して学生による「授業評価アンケート」を春学期と秋学期の定期試験前の授業において実施している。

② 到達目標

工学部各学科開講科目の全科目について担当教員の専任・非常勤の区別なく実施し、継続的な授業改善およびカリキュラム改善の検討に役立てる。学科および学部の授業評価検討会および授業評価総合検討会における評価検討を通じた授業改善、カリキュラムの変更・改定に役立てる。

③ 活動内容

昨年度まで報告しているように、平成 24 年度以来、工学部学生のみを対象として設置された US 科目授業についても授業評価アンケート実施対象として組み入れており、平成 27 年度についても例年通りの方法で春学期と秋学期の定期試験前の授業において実施した。授業評価アンケート用紙を図 5 および図 6 に示す。

集計結果は科目ごとのデータおよび全体集計データとともに専任・非常勤の区別なく科目担当者に届けられた。集計結果は、科目担当者が作成した「授業実施チェックシート」と併せて、科目ごとおよび学科ごとに次期の授業に反映されるよう、PDCA を実行する努力を継続中である。学外向けには総括した内容を大学 HP で公開し、学内向けには詳細な内容を【玉川大学 工学部「学生による授業評価」報告書 31】として大学 8 号館ロビー等で閲覧公開している。また、ISO9001 運用上その適切な保管が定められており、ISO9001 認証時には、認証担当者（学外）の閲覧に供されている。

④ 評価

過去 3 年間の授業評価アンケートの参加状況について、図 7 および図 8 においてその変化を観ることができる。

項目「1.」より、各学科専任教員は全員が参加していることがうかがえる。ただし、いくつかの科目において、取り忘れが生じているようである。非常勤講師に関しては、例年のことでもあるが、7~8 割程度の参加率である。後述するが、アンケート用紙の配布法などがあいまいであり、チェック体制を確立すべきであるかもしれない。

項目「2. 3. 4.」より、各質問項目の総合平均値も例年と大きな変化はない。

項目「5.」より、質問項目ごとの変化に関しても大きな変化はない。ただし、5 段階評価の評価 4 程度であることは「ややそう思う」ということであり、若干評価が低いと感じられる。このことは平均であるので、科目により強弱はあろうが、改善すべき点かもしれない。自習・理解・意欲は僅かではあるが向上してきており、今後につなげたい。ただし、実験設備の満足度は落ちてきていることが懸念される。

項目「7.」より、参加科目数は過去 3 年で減少してきている。これは 16 単位キャップ制に基づく効果であり、学生が真に学ぶべき知識科目へと収斂していることが窺える。

アンケート用紙には学生からのコメント欄を載せているが、これに関しては集計をしていない。項目ごとの集計後は用紙そのものを科目担当者に返却し、コメント欄を含めて授業改善に役立ててもらっている。

一授業改善のための一
学生による授業評価アンケート 講義・演習用



このアンケート調査は授業担当教員が学生諸君と共に、授業をより改善することを目指して実施するものです。記入に当たっては、授業の全体を視野に入れた、責任ある評価をお願いします。なお、このアンケートがあなたの成績に影響することは一切ありませんので、氏名などは記入しないでください。

授業科目名	曜日	時間
担当教員名	記入日	年 月 日

記入上の注意

- 以下の質問について5段階評価してください。
- 1つの質問につきマーク所だけ、マークを塗りつぶしてください。
- この授業に該当しない質問や、答えられない質問は、空欄のままにしてください。
- 記入は必ずHBの黒鉛筆またはシャープペンシルで、下記の良い例の様に塗りつぶしてください。
- 訂正する場合は、消しゴムできれいに消してください。(ボールペンやサインペンは使用不可)
- 回答用紙を破損したり、汚したり、折り曲げたりしないでください。
- 正しく記入(塗りつぶし)されていない場合は読みとれなくなります。

良い例 ● 悪い例 ○ ◐ ◑ ◒

講義・演習

学生 の 取 り 組 み	1 授業には意欲的に取り組んだと思いますか	◎	○	◐	◑	◒
	2 授業に向けて予習・復習はしましたか	◎	○	◐	◑	◒
特 目 の 答	3 授業内容に興味は持てましたか	◎	○	◐	◑	◒
	4 授業内容は理解できたと思いますか	◎	○	◐	◑	◒
指 導 方 法	5 教員の説明(話し方など)は分かりやすかったですか	◎	○	◐	◑	◒
販 書 他	6 教員(OHPなど)・板書は見やすかったですか	◎	○	◐	◑	◒

<科目担当の教員から、独自の質問が設定された場合は、次に答えてください。>

7	◎	○	◐	◑	◒
8	◎	○	◐	◑	◒
9	◎	○	◐	◑	◒

講義を受けてみて、どんな事でも結構ですから(良かった点、悪かった点、今後への提案等)、講義全体への意見を自由に記述してください。

ご協力ありがとうございました。 玉川大学工学部

図5 授業評価アンケート用紙 講義・演習用

記入上の注意

- 以下の質問について5段階評価してください。
- 1つの質問につきマーク所だけ、マークを塗りつぶしてください。
- この授業に該当しない質問や、答えられない質問は、空欄のままにしてください。
- 記入は必ずHBの黒鉛筆またはシャープペンシルで、下記の良い例の様に塗りつぶしてください。
- 訂正する場合は、消しゴムできれいに消してください。(ボールペンやサインペンは使用不可)
- 回答用紙を破損したり、汚したり、折り曲げたりしないでください。
- 正しく記入(塗りつぶし)されていない場合は読みとれなくなります。

良い例 ● 悪い例 ○ ◐ ◑ ◒

実験科目

学生 の 取 り 組 み	1 授業には意欲的に取り組んだと思いますか	◎	○	◐	◑	◒
	2 授業に向けて予習・復習はしましたか	◎	○	◐	◑	◒
特 目 の 答	3 授業内容に興味は持てましたか	◎	○	◐	◑	◒
	4 授業内容は理解できたと思いますか	◎	○	◐	◑	◒
指 導 方 法	5 教員の説明(話し方など)は分かりやすかったですか	◎	○	◐	◑	◒
実 験 設 備 指 導	6 実験設備は整っていましたか	◎	○	◐	◑	◒
	7 指導書は分かりやすかったですか	◎	○	◐	◑	◒

<科目担当の教員から、独自の質問が設定された場合は、次に答えてください。>

8	◎	○	◐	◑	◒
9	◎	○	◐	◑	◒
10	◎	○	◐	◑	◒

講義を受けてみて、どんな事でも結構ですから(良かった点、悪かった点、今後への提案等)、講義全体への意見を自由に記述してください。

ご協力ありがとうございました。 玉川大学工学部

図6 授業評価アンケート用紙 実験用

平成27年度春 セメスタ 学生による授業評価 集計結果

工学部自己点検委員会

1. 参加状況

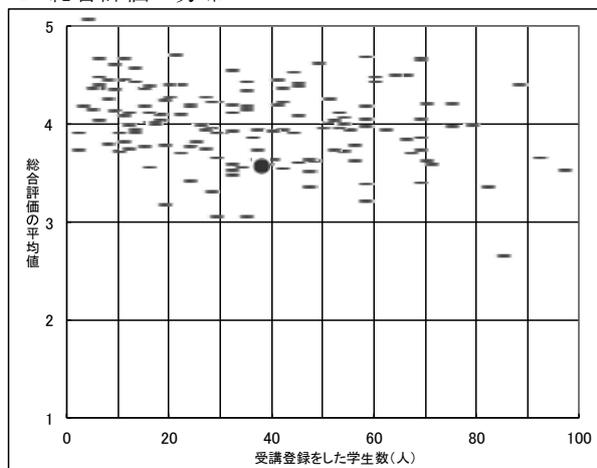
教員所属学科	参加科目数								参加教員数															
	H24年秋	H25年春	H25年秋	H26年春	H26年秋	H27年春	H24年秋	H25年春	H25年秋	H26年春	H26年秋	H27年春												
マネジメントサイエンス学科	44	88%	42	100%	37	93%	49	100%	42	98%	33	97%	15	100%	14	100%	13	100%	14	100%	15	100%	10	100%
機械情報システム学科	37	84%	35	100%	38	93%	31	100%	34	97%	31	91%	13	93%	14	100%	14	100%	14	100%	12	100%	11	100%
ソフトウェアサイエンス学科	47	92%	34	89%	44	100%	32	100%	35	100%	35	97%	11	100%	10	100%	10	100%	10	100%	9	100%	10	100%
エンジニアリングデザイン学科	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	23	100%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	7	100%
その他学科・非常勤	43	75%	57	88%	50	94%	45	79%	42	81%	33	75%	28	80%	35	90%	30	94%	31	82%	26	81%	24	77%
合計	171	85%	168	93%	169	95%	157	93%	153	93%	155	91%	67	89%	73	95%	67	97%	69	91%	62	91%	62	90%

開講学科	H26年秋 参加科目数				H27年春 参加科目数											
	常勤	他学科常勤	他学部常勤	非常勤	常勤	他学科常勤	他学部常勤	非常勤								
マネジメントサイエンス学科	28	97%	1	100%	4	100%	3	75%	19	95%	10	100%	1	100%	1	50%
機械情報システム学科	33	97%	1	100%	1	100%	12	86%	29	91%	9	100%	0	0%	11	79%
ソフトウェアサイエンス学科	32	100%	4	100%	0	0%	5	50%	32	97%	1	100%	1	50%	5	71%
エンジニアリングデザイン学科	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	1	100%	0	0%	3	75%
工学部共通	0	0%	9	100%	0	0%	7	88%	0	0%	11	100%	0	0%	6	100%
US工学部共通	0	0%	3	100%	0	0%	10	100%	0	0%	10	100%	0	0%	5	63%
合計	93	98%	18	100%	5	83%	37	80%	80	94%	42	100%	2	67%	31	76%

2. 各質問項目の平均

質問	学生について		教員について			講義	実験について		卒研	科目
	意欲	自習	興味	理解	説明	教具	設備	指導書	設備	平均
平均	4.07	3.68	3.91	3.77	3.91	3.84	3.87	3.75	4.48	3.92
標準偏差	0.87	1.05	0.99	0.99	1.04	1.07	0.95	1.01	0.76	0.97

3. 総合評価の分布



4. 科目ごとの総合評価の平均値

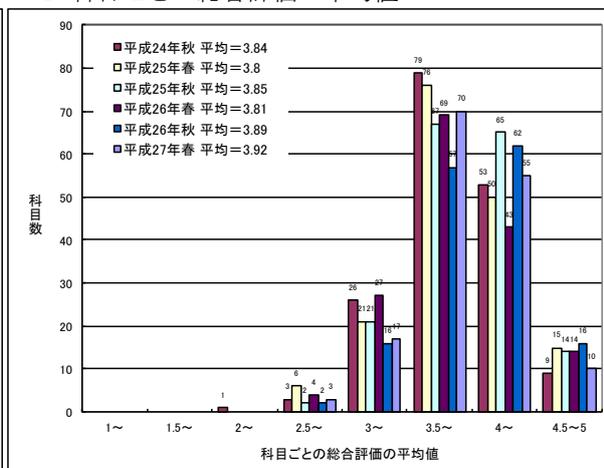
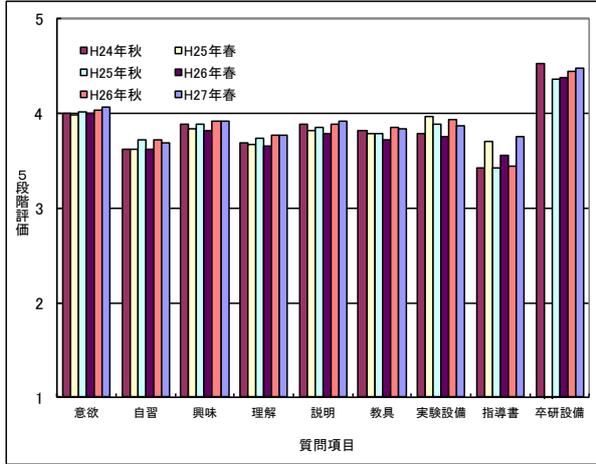
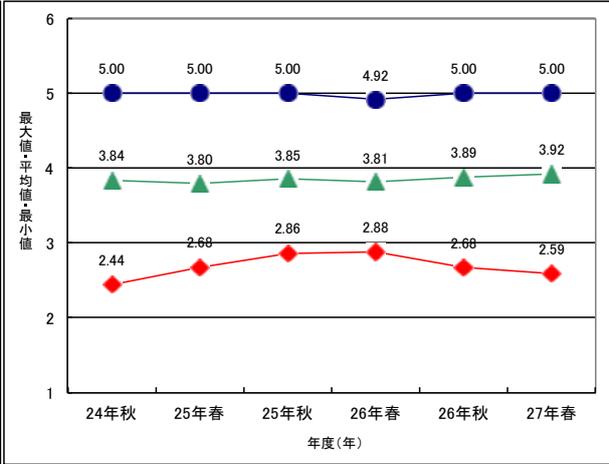


図 7 - 1 平成 27 年度春学期学生による授業評価アンケート集計結果

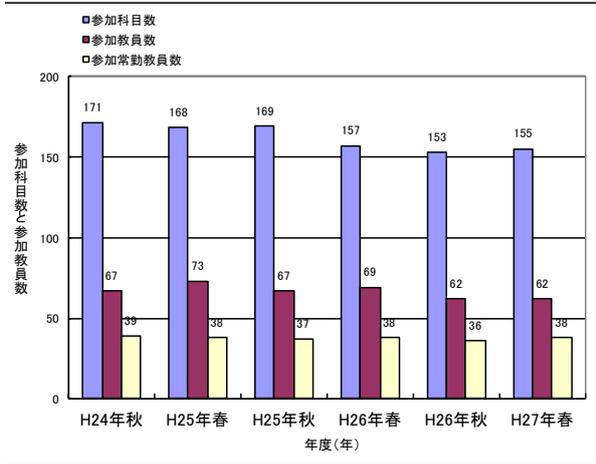
5. 全科目を通して回収されたアンケートの平均



6. 授業評価の平均値、最大、最小の年次推移



7. 参加科目数と参加教員数の年次推移



8. 質問項目と評価方法

学生の取り組み

- 1 授業には意欲的に取り組んだと思いますか(意欲)
- 2 授業に向けて予習・復習はしましたか(自習)

科目の内容

- 3 授業内容に興味は持てましたか(興味)
- 4 授業内容は理解できたと思いますか(理解)

指導方法

- 5 教員の説明(話し方など)は分かりやすかったですか(説明)

A 講義・演習

- 6 教具(OHPなど)・板書は見やすかったですか(教具)

B 実験科目

- 7 実験設備は整っていましたか(実験設備)
- 8 指導書は分かりやすかったですか(指導書)

C 卒業研究

- 9 研究設備は整っていましたか(卒研設備)

評価方法

- 5 : 強くそう思う(非常に良い)
- 4 : ややそう思う(良い)
- 3 : どちらとも言えない(普通)
- 2 : あまりそう思わない(あまり良くない)
- 1 : 全くそう思わない(良くない)

図 7-2 平成 27 年度春学期学生による授業評価アンケート集計結果

平成27年度秋 セメスタ 学生による授業評価 集計結果

工学部授業評価検討会

1. 参加状況

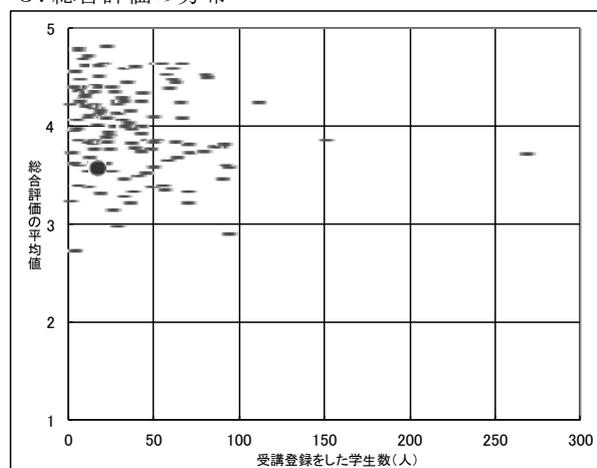
教員所属学科	参加科目数						参加教員数																			
	H25年春	H25年秋	H26年春	H26年秋	H27年春	H27年秋	H25年春	H25年秋	H26年春	H26年秋	H27年春	H27年秋														
機械情報システム学科	35	100%	38	93%	31	100%	34	97%	31	91%	31	100%	14	100%	14	100%	14	100%	12	100%	11	100%	11	100%		
ソフトウェアサイエンス学科	34	89%	44	100%	32	100%	35	100%	35	97%	30	97%	10	100%	10	100%	10	100%	10	100%	9	100%	10	100%	10	100%
マネジメントサイエンス学科	42	100%	37	93%	49	100%	42	98%	33	97%	24	96%	14	100%	13	100%	14	100%	15	100%	10	100%	10	100%	9	100%
エンジニアリングデザイン学科	-	-	-	-	-	-	-	-	23	100%	18	95%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	100%	8	100%
その他学科・非常勤	57	88%	50	94%	45	79%	42	81%	33	75%	31	78%	35	90%	30	94%	31	82%	26	81%	24	77%	20	80%		
合計	168	93%	169	95%	157	93%	153	93%	155	91%	134	92%	73	95%	67	97%	69	91%	62	91%	62	90%	58	92%		

開講学科	H27年春 参加科目数				H27年秋 参加科目数											
	常勤	他学科常勤	他学部常勤	非常勤	常勤	他学科常勤	他学部常勤	非常勤								
US工学部共通	-	-	10	100%	-	-	5	63%	-	-	4	100%	-	-	4	100%
工学部共通	-	-	11	100%	-	-	6	100%	-	-	8	100%	-	-	6	75%
機械情報システム学科	29	91%	9	100%	-	-	11	79%	31	100%	6	100%	2	100%	12	100%
ソフトウェアサイエンス学科	32	97%	1	100%	1	50%	5	71%	29	97%	2	100%	0	0%	1	17%
マネジメントサイエンス学科	19	95%	10	100%	1	100%	1	50%	13	93%	9	100%	2	100%	3	75%
エンジニアリングデザイン学科	-	-	1	100%	-	-	3	75%	1	50%	-	-	-	-	1	100%
合計	80	94%	42	100%	2	67%	31	76%	74	96%	29	100%	4	80%	27	77%

2. 各質問項目の平均

質問	学生について		教員について			講義	実験について		卒研	科目
	意欲	自習	興味	理解	説明	教具	設備	指導書	設備	平均
平均	4.05	3.76	3.90	3.73	3.86	3.82	3.80	3.46	4.36	3.86
標準偏差	0.90	1.02	1.02	1.04	1.09	1.08	1.17	1.25	0.84	1.05

3. 総合評価の分布



4. 科目ごとの総合評価の平均値

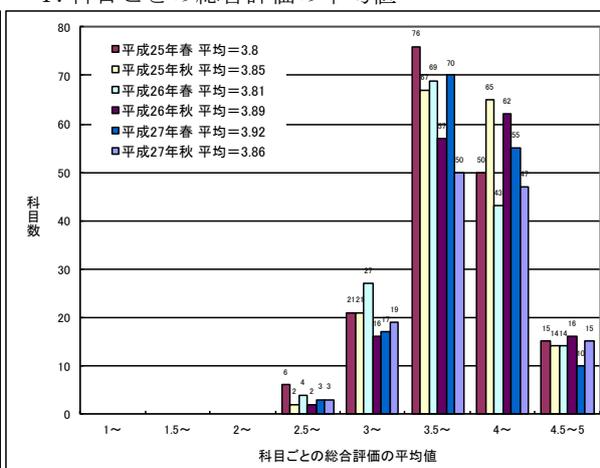
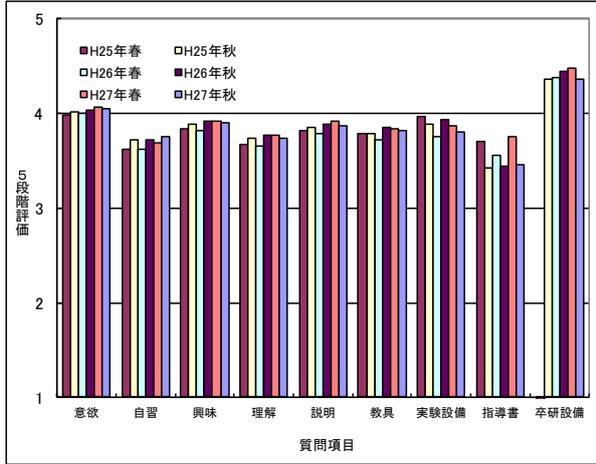
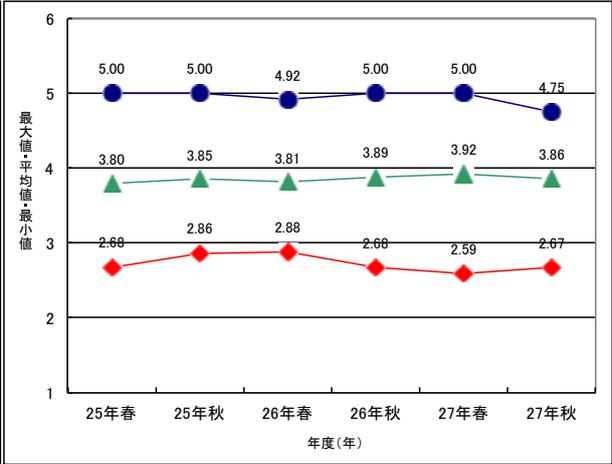


図 8 - 1 平成 27 年度秋学期学生による授業評価アンケート集計結果

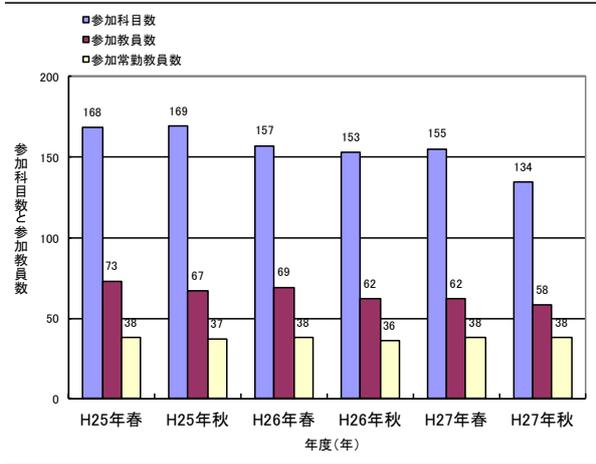
5. 全科目を通して回収されたアンケートの平均



6. 授業評価の平均値、最大、最小の年次推移



7. 参加科目数と参加教員数の年次推移



8. 質問項目と評価方法

学生の取り組み

- 1 授業には意欲的に取り組んだと思いますか(意欲)
- 2 授業に向けて予習・復習はしましたか(自習)

科目の内容

- 3 授業内容に興味は持てましたか(興味)
- 4 授業内容は理解できたと思いますか(理解)

指導方法

- 5 教員の説明(話し方など)は分かりやすかったですか(説明)

A 講義・演習

- 6 教具(OHPなど)・板書は見やすかったですか(教具)

B 実験科目

- 7 実験設備は整っていましたか(実験設備)
- 8 指導書は分かりやすかったですか(指導書)

C 卒業研究

- 9 研究設備は整っていましたか(卒研設備)

評価方法

- 5 : 強くそう思う(非常に良い)
- 4 : ややそう思う(良い)
- 3 : どちらとも言えない(普通)
- 2 : あまりそう思わない(あまり良くない)
- 1 : 全くそう思わない(良くない)

図 8 - 2 平成 27 年度秋学期学生による授業評価アンケート集計結果

(4) 学外セミナー・現況調査等への教員派遣

① 概要（目的を含む）

現状における学生教育に関する課題、あるいは今後の教務上の改正にかかわる課題に関する知見を得るため、学外のシンポジウムや研修会に参加して、その内容を FD 活動に活用する。

② 到達目標

参加研修等の内容を、本学工学部の学生学修指導に効果的に活用できるよう、その方策を検討すること。

③ 活動内容

下記学外セミナーに工学部 FD 委員（黒田）が参加した。

第 21 回 FD フォーラム

テーマ：大学教育を再考する～イマドキから見えるカタチ～

日時：2016 年 3 月 5 日（土）13：00～17：10 シンポジウム

：2016 年 3 月 6 日（日）10：00～15：30

第 7 分科会大学改革と FD～批判と提言～・ポスターセッション

会場：京都外国語大学、1 日目：森田記念講堂、2 日目：1 号館

主催：公益財団法人 大学コンソーシアム京都

後援：文部科学省／京都府／京都市

④ 評価

1 日目はシンポジウム「大学教育を再考する～イマドキから見えるカタチ～」を聴講した。池田輝政氏の言う、もう少しゆっくり（今はあまりにも性急に物事が進んでいる）、学生の学びと成長を考えたいとの話に共感した。形ばかりが先行している現在であるので、内実をしっかりと教職員が見極める必要があるとの提言であった。例えば、～～力が昨今行政側から発信されているが、それをそのまま伝達するのではなく、各大学の内情に合わせて咀嚼しわかりやすく書き換えることなどを挙げていた。そうでなければ、思考停止であり、アクティブではないことになる。

2 日目は分科会「大学改革と FD ～批判と提言～」を聴講した。パネラーである渡邊浩一氏および藤田尚志氏の哲学研究の観点から、今一度大学教育について深く考える話がなされ感銘を受けた。それらは現在すぐ FD 活動として利用できるような内容ではないと彼らも言うのだが（教育理念であるため）、むしろ我々教員が大学教育を理念として深く考察することの重要性に気づかせてもらった。この理念がない場合、FD 活動は単に要請をこなすばかりとなり、形骸化していくことの危険性があるという指摘である。

参加報告は工学部 FD 研修会にて実施することが基本であるが、研修会の時間の制約から省略し、資料等は必要に応じて学科会における報告や個別の報告回覧等により、活用されている。

4 昨年度（平成 26 年度）に提案された予定・課題の達成度について

（1）Tamagawa Vision 2020 の実現へ向けた課題

昨年度報告では、16 単位キャップ制および GPA による警告制度・進捗チェック・卒業要件の下、対応する改定カリキュラムにおける指導上の問題点の認識や結果の評価を継続し、効果的な改善を継続することを課題とした。本学大学教育における Tamagawa Vision 2020 として掲げられた目標のなかで工学部において重要であるのは、「教授主義から修得主義への転換」、「教職課程における教員養成の充実」、「学生の活性化に繋がる支援の充実と学習支援の強化」であろう。いずれも実現には終着点はなく、つまりゴールポストは経年するほど後退するわけであり、絶えず PDCA による教育活動の評価とフィードバックを継続していくことが重要である。そういう意味では、ここで浮上する課題とは、その改善の継続と、継続したことの内容の PDCA による更なる改善活動である。つまり、上記で述べた課題は継続実施されているという達成度を持っており、その上位概念としての課題は、これが特に「教員の教育力の向上」に資するような活動であることを担保していくことと考えられる。

（2）現状における課題

昨年度報告では、入学生の学力不足対応、発達障がい学生支援等の充実化が求められていることが挙げられていた。つまり、いわゆる底上げ対応に力点が置かれざるを得ない状況が続いていくことが報告されているが、一方で、それなりに基礎力を保持しているような学生の能力を伸ばす対応も課題となっているも挙げられていた。また、技術者に求められる学力以外の基礎力の育成も課題となりつつあると報告されていた。

まず、入学生の学力不足対応に関して記す。平成 21 年度以降、数学と物理学において、高等学校教員を退職された方、あるいは助手による学修支援制度はそれなりに効果を上げ、学生の基礎力の充実に貢献してきた。

数学学修支援においては平成 27 年度においても高等学校教員を退職された非常勤教員によってこの事業は継続されている。また 1 年次の基礎科目である「数学入門」、「代数学入門」、「解析学入門」に関しては、複数の教員が学修支援担当教員と連携しつつ講義内容と課題を統一し、全体的な数学の基礎学力の向上を図っている。

一方、物理学学修支援においては平成 26 年度以降、高等学校教員を退職された非常勤教員の確保が困難となり、授業外における特別な学修支援は実施されていない。そのため、専任教員による問題集の執筆配布や提出を要する授業時間外課題の出題等により、学生の基礎学力の高進と充実を図っている。特に機械情報システム学科とソフトウェアサイエンス学科の学生は、ほぼ全員が必修ではない基礎的な物理学の講義（「物理学入門」）を履修している。ここでは複数の教員が連携しつつ講義内容と課題を統一し、全体的な物理学の基礎学力の向上を図っている。工学部においては、物理学はその後に続く専門科目への橋渡しとしての意味があり、このことは今後の活動においても継続が求められると考えられる。

1 年次の学部共通の主要科目では、学修記録帳を配布し自学自修を促している。学部共通として開設した「導入ゼミ」は全教員で強力的に指導し、さらに「キャリアデザイン」も学部共通で開設し、工学系学生として必要な内容を講義している。平成 26 年度までは三学科合同の授業がほとんどであったが、平成 27 年度は学科が増えたことと、学生の授業への参加度を向上させるために、学科別で授業を実施した。そのため実施に関しては学科

教員が責任を持って学科のカリキュラムポリシーに沿った内容で実施した。

発達障がい学生への支援等の充実化については、その多くが授業担当者や担任に対応の負担がかかっていることは否めない。さらに、発達障がいの有無に関しても担当者がおおよそに判断しており、また判断する立場にもないことから、その支援体制については限界を感じる。昨年度の報告においては、将来のためになる方向へ状況が進展するよう支援すること、父母等の理解や、健康院カウンセラーおよび医者との連携（二次障害の防止策等のため）等によって、ケースバイケースで対応していること、インターンシップへの参加させるため、対応可能な受け入れ先をキャリアセンターおよびハローワークの協力で見つけてきたこと、が記されているが、今後については、これらの対応を継続することとともに、一貫性と正当性のある対応策を全学で構築していくことが望ましいと考えられる。

基礎力を保持しているような学生の能力を伸ばす対応については、その学生個人の資質に任せている面が多く、やはり継続的課題であると考えられる。しかしながら一方で、大学とは基本的に自力による学びの場であるし、基礎力を保持しているような学生の場合は、実はそれが可能であることも事実である。4年間の学びの最終まとめとして「卒業研究」や「卒業プロジェクト」のような科目で学生は総まとめを実施するが、その指導の場においても、やはり基礎力から専門力への橋渡しをしていくことが望ましい。それは学科のディプロマポリシーにもかかわることであるが、教員は研究者の側面を当然持っているわけであるから、教員の研究研鑽とともに、学生も学んでいくことが予想される。

技術者に求められる学力以外の基礎力の育成も課題と報告された。これについては、やはり学生は実際に仕事に就いてから学ぶことがほとんどであろう。しかし、現在のわが国においては、企業における新人教育力の余裕は以前に比して減少していると考えられ、座して待っているわけにもいかないのが実情である。そのような状況で、各学科ともキャリアセンターとの協力体制の下、社会人力涵養のための講座等を各種開催している。また、各種ボランティアやテクノフェスタにおける実行委員、労作活動、等により、徐々に経験し学んでいくしか方法はあるまい。要するに、机上の空論ではない行動を起こせることが、技術者に求められる学力以外の基礎力であり、これは学生・教員というような区別より、個人の思想信条によるところが大きく、そういう意味において、今後は、技術者倫理や科学哲学のような、沈思黙考させる教育も重要になっていくとも観ることができる。

昨年度も報告したが、精神的課題を抱える学生も増加しているとみられ、個人々人へのより適切な対応も求められている。しかし一方で担任教員や卒業研究指導教員もその対応に負担がかかっていることは否めない。統一的支援策の構築が重要であると考えられる。

(3) FD 活動の在り方に関する課題

参観授業については、参加者が極めて少ない状況が続いていたため、オムニバス形式の授業を対象とするなどの工夫が一部の科目でなされた。(オムニバス形式の授業の場合、当日の担当者以外もその時限に他の授業が入っていないため、参観しやすい。)

授業評価アンケートについて、組織としての効果的な授業手法等の共有が継続課題であり、結果を入学年度別、学年別、科目別などに整理し易くすることが望まれると報告されていた。平成 27 年度秋学期より、授業評価アンケート用紙作成および読み取り整理を委託する業者を変更したが、アンケート内容自体は変えていないため、統一継続的なデータの取得は可能である。

工学部 FD 研修会は年度に 2 回開催されているが、教授会の直前に実施していることも

あり、教員の参加率は非常に高く、時によっては活発な議論が行われている。このことは、「教員の教育力の向上」にとって高い評価をして良いことであり、絶え間なく実施しPDCAサイクルの循環とともに継続的課題である。

(1)でも記述したが、課題は継続実施されているという達成度を持っており、更なる課題としては、これが特に「教員の教育力の向上」に資するような活動であることを担保していくことと考えられる。

5 今後（平成 28 年度以降）の予定・課題について

(1) Tamagawa Vision 2020 の実現へ向けた課題

これまで通り 16 単位キャップ制、および GPA による警告制度・進捗チェック・卒業要件の下、対応する改定カリキュラムにおける、指導上の問題点の認識や結果の評価を継続し、効果的な改善を継続することが重要である。特に昨今の「教授主義から修得主義への転換」、「学生の活性化に繋がる支援の充実と学修支援の強化」に関し、“学生が能動的自主的に学修していく精神を涵養させる環境づくり”の目的のもと、アクティブ・ラーニング等への対応の検討を実施することが考えられる。アクティブ・ラーニング等の精密化については、全学の動きと歩調を合わせ、手段が目的化することのないように努めつつ、またこれらが、学生が能動的自主的に実施する学修とその成果に資するような活動であることを継続して担保していくことと考えられる。

(2) 現状における課題

昨年度同様、基本的には、入学生の学力不足対応の充実化、基礎力を保持しているような学生の能力を伸ばす対応、高学年学生が能動的自主的に学修していく精神を涵養させる環境づくり、等が求められる。また、平成 27 年度にはエンジニアリングデザイン学科が新設されたため、その所属学生の学修状況の動向の精査をするとともに、それを基にして、平成 29 年度設置計画中の情報通信工学科への新入学生の学修環境整備体制の工学部全体として適切な準備が必要である。

(3) FD 活動の在り方に関する課題

最重要活動の工学部 FD 研修会に関しては、従来の実施のプロセスで大きな問題はないと考えられる。本研修会は過去 3 年にわたって実施されているが、内容はその学期、その年度ごとに変更されている。これは時節に適応した内容を工学部全教員で議論することで、全員が FD 活動として共通認識を持つことを意味する。課題としては、議論する内容を主任会等でよく精査し、学生の学修状況の把握に努めることである。

授業評価検討会および授業評価総合検討会は、学科内および学科間での教員のコミュニケーション体制として重要である。学科ごとのカリキュラムポリシーおよびディプロマポリシーを念頭に、目指す方向を学科教員が共通して確認することが課題である。

研究授業（参観授業）は従来のように継続する。課題は参観者数が少ないことであろう。広く授業法の議論をするためには、他者の目が重要である。より拡充された実施の構築が重要である。

学生による授業評価アンケートに関しても、従来どおり継続する。課題は実施率を完全とすることがまず上げられる。専任教員には周知徹底されているので大きな問題はないが、非常勤講師の先生方に関しては、アンケート用紙の配布法などがあいまいであり、チェック体制を確立すべきである。また、オムニバス授業や複数担当の科目が多く存在すること

から、授業そのもののアンケートとしての意義と教員へのアンケートとしての意義が混在している点の解消が課題である。各授業は授業コードがキーであるが、これは各教員には対応していない。できるだけ、各教員のアンケートとしての意義があるように、配布法を工夫する必要がある。

学外セミナー・現況調査等への教員派遣に関して、1人ないし2人の教員が1泊出張できる程度に予算が立てられているが、各種研修会等は学外でも多く開催されている。各教員が“学生が能動的自主的に学修していく精神を涵養させる環境づくり”の目的のもと、それぞれの専門の範囲で研鑽していくことが考えられる。

アクティブ・ラーニング等の精密化については、全学の動きと歩調を合わせ、手段が目的化することのないように努めつつ、またこれらが、学生が能動的自主的に実施する学修とその成果に資するような活動であることを念頭に充実化していくべきと考えられる。

§ 経営学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

- (1) 質の高い卒業生（経営学部のミッション・ステートメントを体現し得る卒業生）を輩出する。
- (2) 玉川の教育理念を基盤とした経営学教育を実現する。
- (3) 21 世紀社会に生き残ることのできる経営学部—少子化時代・大学全入時代にあって、運営を維持しうる体力をもった学部を形成する。
- (4) 玉川学園および玉川大学全体の評価を高める学部を構築する。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

経営学部長、教務主任、国際経営学科主任、学生主任が中心となって FD 活動を実施する。教務主任と大学 FD 委員は連携して活動計画を取りまとめ、主として研修会の運営にあたる。観光学部設置にともなって、観光経営学科の教育に関する FD 活動は授業・学生支援を主として担当する観光学部の FD 活動として展開しているため、経営学部では国際経営学科の授業改善、教育手法の修得、教材開発等に関する FD 活動を展開している。

3 平成 27 年度の活動内容

(1) 研修会（平成 27 年 5 月 28 日）

① 概要（目的を含む）

今年度から運用を開始した教育課程におけるコース目標達成のための学修支援のあり方について、研修会を実施した。Dual Language Program (DLP) の運用、科目間の連携を強化した修得目標の設定とシラバス作成の 2 つをおもなテーマとした。

② 到達目標

コース科目の到達目標と目標達成のための教育手法を具体的に示す。

③ 活動内容

平成 27 年度開始の教育課程において学生が卒業までに修得する技能等と授業方法を検討した。現在授業を展開している基幹科目の学修プログラムを題材として、コース共通に設定した修得目標（TOEIC700 点）とコース別に設定したその他の目標を達成するための DLP の運用方法について議論を重ねた。教務・FD の教員から教育課程表の「授業を通して修得できる力」と各授業の到達目標の関連をより明確にした授業づくりを呼びかけた。より具体的に検討するために、コース別で議論を深めた。

④ 評価

昨年度から取り組んでいる内容で、春学期の授業が半分程度まで進んでいる時期であったため、より深く議論できた。教材の選定、授業方法、支援体制等を検討したが、コースによって進捗度に差があったようである。教育課程表の「授業を通して修得できる力」と各授業の到達目標の関連について、教員間で受け止め方が異なっていることは課題である。理解が進むように引き続き働きかける。

(2) 研修会（平成 27 年 6 月 25 日）

① 概要（目的を含む）

平成27年度入学生の教育課程において2年次に展開する「専門基礎ゼミナールA/B」の授業方法を共有するために、おもに専門科目の学修を促進するための英語力の養成と専門科目の学修の接続について検討した。

② 到達目標

英語の専門文献を用いた少人数授業及び学修支援の方法を具体的に示す。

③ 活動内容

まず文部科学省その他関連機関の公表資料を用いて、目標を達成するための英語力をどのように養成するかを議論した。平成27年度入学生の1年次の学修状況を踏まえて、2年次の「専門基礎ゼミナールA/B」から英語の専門文献を用いた授業を展開し、3年次以降の学修を支援するための教材と授業方法、体制について話し合った。

④ 評価

英語と経営の各専門分野の学修の接続について、より具体的な授業展開を共有できた。コース別の検討ではすでに授業内容が決まっているコースもあれば、A/Bでどのように関連づけるかについて時間をかけて議論するコースもあった。すでに開始したプログラムであるが、コースとして他の目標を検討したいという意見もあったようである。

(3) 研修会（平成27年10月22日）

① 概要（目的を含む）

専門性を高めるための授業を設計することを目的として、「専門基礎ゼミナールA/B」およびコース科目とコースのゼミナール科目との連携強化を図った。

② 到達目標

コースプログラムの学修に資するゼミナール科目の授業方法を明示する。

③ 活動内容

学生がコース目標を達成するためのゼミナールのあり方と具体的な授業の進め方を検討した。コースプログラムでは3年次のゼミナールがこれまでと異なる運用になることを全教員で共有したうえで討議を進めた。カリキュラム・ツリー、カリキュラム・マップをより強く意識して、コース別に2年次の「専門基礎ゼミナールA/B」の延長線上にある科目と位置づけて授業を展開することを確認した。各コースのゼミナールでは英語表記の専門書を基本教材とし、授業と関連するTOEIC等の外部試験の受験を促進することになった。

④ 評価

授業の進め方、教材、成績評価まで踏み込んで、さらにさまざまな方法で学生のアクティブ・ラーニングを支援することを確認できた。11月のコスモス祭でコースの取り組みを紹介するための準備が進んでいる時期であったため、この研修会では1年生の学修状況と次年度に向けた課題を確認する機会にもなった。

(4) 学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

例年、各科目の継続的な授業改善に役立てることを目的として授業評価アンケートを実施している。春学期・秋学期ともに実施した。

② 到達目標

学生の学修状況を把握するとともに、各教員のさらなる資質向上を図る。

③ 活動内容

独自の方法で実施している科目及び演習科目を除く経営学部開講科目でマーク式、記述式の授業評価アンケートを実施した。マーク式の集計は外部業者に依頼し、その結果を科目担当者別に配付して FD 活動に活用するよう継続的に呼び掛けている。記述式は科目担当者が個別に活用している。

④ 評価

16 単位キャップ制が 3 年目を迎え、また経営学部として新たな教育課程を開始した年度でもあるが、まだ大きな変化は見られないようである。次年度以降、コース目標と関連づけた学修支援を強化するとともに各授業の改善につなげたい。

(5) 学外セミナー等への教員派遣

大学コンソーシアム京都主催第 20 回 FD フォーラムに長谷川英伸助教が参加した。平成 28 年度 FD 研修会において報告と討議を予定している。

4 昨年度（平成 26 年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に引き続きコースプログラムにおける学修支援、授業方法のあり方を取り上げ、概ね予定どおりに FD 活動を進めることができた。研修会以外でも教員間の議論が活発になったことに加えて、コース別に学年・semester ごとの資格試験を 1 つの目安として学修目標に含めたため、学生も資格とあわせてカリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーをより強く意識して学修を進めるようになっている。

上級生へのアナウンスも強化したことで、経営学部の取り組みである検定試験合格助成制度の利用は年々、増えている。現在のところ、英語、簿記、BATIC（国際会計検定）[®]に合格して制度を利用する学生が多い。その他の検定試験でも合格者が増えるように、授業等でも働きかける。

その他の活動は予定どおり実施した。昨年度参加できなかった大学 FD フォーラムにも参加することができた。その他のフォーラムやシンポジウムへの参加は進まなかったが、全学で実施しているアクティブ・ラーニングの推進等にあわせて経営学部でも教育プログラムの効果をより高める必要がある。新たな教育課程の運用を開始して来年度で 2 年を迎える。FD 活動を学修支援と教育課程及び授業の改善につなげたい。

5 今後（平成 28 年度以降）の予定・課題について

全学研修会の規模が拡大するなかで経営学部の教員が事例等を報告する機会もあるため、これまで経営学部で実施していた内容の一部を全学の研修会に移行している面もある。全学の動向を踏まえて、経営学部における FD 研修の内容を継続的に検討する。一方で日頃実施している科目担当者研修会、学外研修会への参加は少ない。教員に参加を促すとともに、科目担当者研修会等の充実を働きかける。授業参観については参観対象の授業を拡大する。

これまでユニバーシティ・スタンダード科目の様式に合わせて授業評価アンケートを実施してきた。アクティブ・ラーニング推進の動きを受けて全学的にアンケート項目の一部

見直しもあったため、経営学部でも改訂を検討する。

ここ2年、経営学部の教員のみによって教育プログラムの整備・運用に取り組んできた。教員が自らの職責を意識して積極的に参加し、これまでのFD活動の成果に加えて教育活動に資するFD活動を充実させることができたことは大きな成果である。来年度は学生の学修成果を確認するとともに外部講師を招聘して入学者の動向、プログラムの評価等を把握したい。アクティブ・ラーニングのカリキュラム化が進むなかで、学生の自律した学修を促す仕組みづくりに引き続き取り組み、授業方法・学修支援のあり方を含めた教育プログラムの深化を図る。

§ 教育学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

本年度のFD活動への取り組み理念・目標は、平成26年度の内容を継続し、以下の通りである。

「本学部では学校教育はもとより生涯教育、社会教育の諸分野で貢献できる教育プロフェッショナルの育成を目指し、指導に当たる教員が自らの資質と能力を向上させることにある。」

2 学部におけるFD活動の組織構成と役割

教育学部長、教育学科・乳幼児発達学科の両主任、教務主任、学生主任、及びFD委員、通信教育部長、通信教育部教務主任、FD委員の8名で構成する。

教育学部長を委員長とし、FD委員会が学部におけるFD活動計画(企画・運営)の策定、FD活動の年度総括などを審議する役割を担っている。また委員会決定事項を教授会への議案提起を行い、FD活動の推進に努めている。

3 平成27年度の活動内容

(1) 研修会等

【通学課程】

① 概要(目的を含む)

前年度に引き続き、教員養成における課題や展望を再認識した上で日常の指導、教育実践に取り組むことを目的とし、講演会に参加した。

② 到達目標

今日の教育実践における先進的な取り組みや課題に触れ、研究活動および日々の授業実践に活かしていく。また日本の教育の課題と展望について学び、教員養成における指導や教育実践に活かし、また参加者同士のネットワークを築くことを目標とする。

③ 活動内容

(1) 分野連携アクティブ・ラーニング対話集会(心理学・教育学グループ)

開催日時：平成27年12月23日(水)14:00~17:00

主催：公益社団法人 私立大学情報教育協会

会場：会場：上智大学(四谷キャンパス)12号館301教室

1) 開催趣旨の説明

2) 社会と連携した発想型のアクティブ・ラーニングの話題提供

A) 社会との双方向型授業で汎用的能力と専門能力を結びつける体験型学修の提案

B) 汎用的能力と専門的能力の獲得に向けた教育プログラムの提案

(2) シンポジウム：「Measuring What Matters Most:資質・能力の評価を考える」

開催日時：平成27年7月26日(水)10:00~17:00

主催：認知科学学会 会場：会場：東京大学

④ 評価

知識の定着・確認、知識の活用・創造に効果的なアクティブ・ラーニングの在り方及び組織的に推進していくための教学マネジメントの工夫について、社会と連携した発想型のアクティブ・ラーニングや、汎用的能力と専門的能力の獲得に向けた教育プログラムのテーマで意見交換を行うことができた。また、7月の認知科学学会によるシンポジウムでは、教員及び学生の資質・能力の評価方法について意見交換することができた。

(2) 学生による授業評価アンケート

【通学課程】

① 概要（目的を含む）

学生による授業評価（教育学部では「リフレクションシート」と称す）を全授業で実施する。集計結果は学部全体の平均と比較できる形として各授業担当者にフィードバックされ、新学期に向けて授業改善につなげるものとする。また学部・学科・学年別の集計結果の傾向や課題を学部全体で共有することを目的とする。

② 到達目標

専任教員、非常勤講師が担当するすべての授業において学生によるリフレクションシートを実施する。ただし授業評価アンケート実施日の出席者が10名未満の授業については集計せず、各担当教員が授業改善のために活用する。実施した授業評価の集計はデータ分析と集積を行い、教員の授業改善および学生の傾向や課題の共有につなげる。

③ 活動内容

専任教員、非常勤講師が担当する教育学部すべての授業において、授業評価アンケート（リフレクションシート）を実施した。

④ 評価

授業評価のアンケート結果は各授業のみならず、学部全体の平均値と比較できるようにし、学生の傾向や課題を各教員が共有することができた。また教育学部における授業評価のアンケート結果は各設問とも概ね高い評価を得ることができた。この結果は各教員の日頃の授業改善の賜物ではあるが、実施するアンケート内容の周知により、明確な評価基準として、教員の意識改革につながり、さらなる授業改善につながったと言える。

一方、前年度に引き続いて予習・復習の時間に関しては他項目よりも低くなっている。ただし、あくまでも平均であり、個々の授業特性および学生の予習や復習に対する時間的な意識の違いがあることや10名以下の授業の削除等の考慮も加味した上で評価と考えるべきである。この点に関してはアンケート設問内容の改善や設問に対する説明を加えるなど検討したい。

【通信教育課程】

① 概要（目的を含む）

スクーリング授業において、学生による授業評価を全教員が実施し、集計結果は各授業担当者にフィードバックするとともに、『玉川通信』で学生に公表する。目的は、各授業担当者が新年度に向けて授業改善することにある。

② 到達目標

- ・専任教員、非常勤講師を問わず、すべての授業において学生による授業評価アンケートを実施する。
- ・実施した授業評価の集計を外部委託し、データ分析と集積を試み、教員の授業改善、また学生の傾向や課題を共有する。

③ 活動内容

- ・夏期スクーリングにおいて、専任教員、非常勤講師の全教員が、担当する全ての授業（一部の実技系科目を除く 92 科目）について、授業評価アンケートを実施した。回答数は延べ 3,002 名。
- ・質問内容は、前年度に質問の数を 6 から最大 14 へと増やしたので、それと同一のものを使用した。

④ 評価

各授業の結果は、全教員の結果をグラフ化したものと比較できる形で、通信教育部の全教員に配布し、結果と課題を共有することができた。また、補助教材『玉川通信』で結果の概要を学生に公表した。

授業評価の内容であるが、各設問とも概ね高い評価を得ている。特に「授業は知的な興味・関心を引いた、または技能を向上させた」「話し方・声量」「授業の目標が明確」「学生への対応・配慮」といった項目が高い評価を得た。予習時間に関しては科目によりばらつきが多かった。若干低めの評価となった項目としては、「学修目標を達成」「授業時間内に自分の考えや意見をまとめたり、学びを深めたりする機会や時間」「各回の授業の進捗」「各回の授業の学修量」といった項目があった。6 日間短期集中型という学修形態のため、必ずしも十分な予習・復習の時間が確保できないという制約の中で、授業時間内にいかにして学修内容の定着・深化を図り学修目標を達成するかという課題が浮き彫りとなった。

また、クロス分析を試みた結果、「自分は積極的に授業に取り組んだ」に対する回答とそれ以外の各設問への回答との間には、明確に相関関係（積極性の高い学生ほど、各設問に対しても前向きな回答をするという傾向）があった。これは予想されたところではあるが、授業者には積極的に参加したくなるような授業が求められているといえよう。

(3) 教職員相互の授業公開と参観

【通学課程・通信教育課程】

① 概要（目的を含む）

教員相互の授業参観を実施し、各自の教授法、教授内容についての振り返りを行い、授業改善につなげる。また関連する科目の教授内容の調整を検討する機会とする。

② 到達目標

大学 FD 委員会の提案に合わせ、通学課程は 5 名、通信教育課程は最低 1 名の教員が授業参観を行う。公開した教員の教育内容の振り返り、教授法の改善を図るとともに、参観した者の授業改善へ寄与することとする。

③ 活動内容

通学課程は教員 5 名の協力を得て、5 つの授業の授業公開と参観を行った。

通信教育課程は教員 1 名の協力を得て、1 つの授業の授業公開と参観を行った。

④ 評価

通学課程は若手教員および熟練者の授業参観を実施することができた。実施においては、多忙な大学教員の業務を考慮し、全 100 分の参観でなくとも良いこととしたが、参観者は前年度と同様に少なく、時間設定の方法や実施の在り方についての再検討が必要と思われる。しかし参観期間中の参加者数は少なかったが、参観期間に限らず、気兼ねなく教員同士がいつでも授業を参観できる環境・雰囲気は教育学部内で形成されている。特に関連する科目や共通科目が主ではあるが、教員間の教授法、教授内容についての意見交換が行われるようになったことは、授業公開を実施することの意義や成果の一つとして挙げられる。

通信教育課程は、昨年度の PR 不足の反省を踏まえて積極的に授業公開への参加を呼びかけたが、結果的には本年度も 1 名・1 件にとどまった。ただ、公開時期が秋学期だったので、春学期の授業なら公開したいという教員もおり、今後の課題としたい。

(4) FD 研修

【通学課程】

1) 鹿児島研修

① 概要（目的を含む）

平成 27 年度は、参加した教員同士が学び合い、各自が今後の教育活動、研究活動の活性化を図ることを目的とした教員自主企画および学部企画の学外（鹿児島）FD 研修「玉川学園の歴史および玉川の教育の背景」を実施し、自校の歴史や建学の精神を再確認し、玉川教育の全人教育の意義について理解を深める機会とした。

② 到達目標

自校史の理解促進や鹿児島県の小原國芳生誕地等を巡りながらの玉川大学の歴史や建学の精神を学ぶと共に玉川の教員としての誇りを持ち、日々の教育活動につなげていく。また教育学部の教員間で小原國芳の生き方や信念を共有し、愛校心を高めることを目的とする。

③ 活動内容

今回の研修では、1 泊 2 日の日程で、鹿児島における小原國芳先生ゆかりの場所をほぼ漏れなく訪問することができた。しかし、早朝から晩までのハードスケジュールとなった。現地では、桜島の噴火警戒レベル 4（避難準備）と天候不順にも拘らず、幸い予定通りの訪問ができた。しかし、この行程では 1 日 2 度に渡るフェリーへの乗船が必要であり、もし悪天候等でフェリーが使えなければ、宿泊先への移動が著しく困難となる行程であった。予算および日程調整の問題があるが、今後はゆとりある 2 泊 3 日の行程とするか、1 泊 2 日ならば訪問先を薩摩半島側か大隅半島側かのいずれかに限定することなど検討が必要になると考えられる。

石橋先生に事前に資料をご用意いただき、さらに現地で先生から解説をいただくことができたので大変有意義な現地訪問が可能となった。事前に資料に目を通した上で、現地で解説を聞くことで大変効果的な自校教育が可能になることが実感された。このように事前学習の資料を用意し、現地で解説を行うという今回の形は、自

校教育の一つのモデルケースになると考えられる。

今回は小原國芳先生の生誕地に限定した訪問となった。今後、小原先生ゆかりの地（香川、広島、京都、東京等々）の跡地状況の変化等も見越して、また、日程等の関係で現地訪問が難しいケースも視野に入れて、自校教育プログラム作成の一環として、テキストや映像資料等の作成が必要になってくるものと考えられる。

（文責・佐久間）

④ 評価

学部教員が創立者の生誕地である鹿児島を訪れ、その教育者としての原点に触れ、本学の創立理念を再確認し、教員個人の資質向上および学部組織としての教育力向上につながるものとなった。また多くの私大で進めらる自校史教育の意義を確認することができ、教育学部としての新たなミッションや教育内容を構築する機会となり、今後の大学における教育活動に大きく寄与することが期待できる。

【通信教育課程】

① 概要（目的を含む）

本課程では、教員数が少なく独自の FD 研修を実施するのが難しいため、随時各種の学外 FD 研修の情報を提供するとともに、1月に積極的な参加を呼びかけた。

② 到達目標

本校の全学で行われる FD 研修のほかに、専任教員の各自の問題意識にあった学外 FD 研修に参加することで、日々の教育活動の向上を図ることを目的とする。

③ 活動内容

「第 21 回 FD フォーラム」（3月 4 日～5 日、京都外国語大学）に 1 名参加。

「第 22 回大学教育研究フォーラム」（3月 18 日、京都大学）に 1 名参加。

④ 評価

結果としては学外研修への参加は 2 件にとどまったが、個人的な問い合わせなどもあり、反応は良かったと思われる。新年度は引き続き積極的な参加を呼びかけると共に、よりきめ細かに情報提供を行っていききたい。

4 昨年度（平成 26 年度）に提案された予定・課題の達成度について

【通学課程】

授業評価アンケートの全科目（専任・非常勤）実施を目標にしていたが、春学期には発注ミスにより一部の授業において実施できなかった。また、秋学期にも発注ミスがあり、最終授業に間に合わない事例がいくつかあった。これらは、FD 委員が発注に関する手順を見直すことで解決できる予定である。教育学部は、学部独自の教育課題を追及する学部企画 FD 研修を行っている。鹿児島の小原記念館を訪れ、創立者の理念を再確認し、教員個人の資質向上および学部組織としての教育力の向上につながったと言える。

また平成 25 年度より 16 単位キャップ制の導入など新しい大学教育において、これまで以上に教員間の信頼と協力・連携が必要である中、FD 活動や研修を機に多くの場面で学部教員が玉川大学や学生のため、より良い教育実践について意見交換を多く持つことができるようになったことも成果の一つであり、学部組織としての教育力の向上につながるものと思われる。

【通信教育課程】

スクーリングの授業評価アンケートは、授業者の多寡によらず原則として全科目で実施することができた。また、設問の内容も見直し、通学課程や他大学などの授業評価とある程度の比較を行えるようになったが、これについては時間切れで実施できなかった。次年度以降の課題としたい。

テキスト学修科目のアンケートについては、その実施方法や内容等について、教員の間での意見がまとまらず、とりあえずは見送ることになった。

5 今後（平成 28 年度以降）の予定・課題について

【通学課程】

前年度に引き続き、日常の教授内容や方法の更なる検討と研鑽を重ね、本学の建学の理念に基づき、今日の社会の要求に応じることのできる人材育成に取り組むことが重要である。授業評価アンケートにおいては、項目内容の改善として全授業に当てはまる項目の設定は困難ではあるものの、実習や演習、アクティブ・ラーニング、少人数の授業など授業体系に応じた項目を加えるなども今後の課題の一つである。

教員の重要な職務である研究活動の活性化のために、今年度も 10 月には文科省及び学術振興会の科学研究費申請のための勉強会は今後も必要であり、平成 28 年度も開催予定である。

FD 研修の一つである鹿児島研修において学部教員が創立者の生誕地である鹿児島を訪れ、その教育者としての原点に触れることは大きな意義がある。とりわけ私学においては創立者の建学の精神を教育の出発点としているため、その精神を教職員や学生が共有することが大学教育の成果にも大きく影響すると考えられ、昨今「自校史教育」の重要性が強調されている。さらに教育学部では学生たちが創立者・小原國芳の教育精神を学ぶ機会を授業や行事など多数設けており、今後もその充実が求められている。そのため今後の大学における教育活動に大きく寄与する鹿児島研修は今後も引き続き行っていく予定である。特に新任教員には学外出身者も多く、このような研修の機会を設けることは玉川教育の精神を全教員間で共有するためにも必要であると考えられる。

【通信教育課程】

スクーリング科目については引き続き授業評価アンケートを実施する。通学課程や他大学などの授業評価との比較や、同一科目・同一教員の経年経過の分析も試みてみたい。また、テキスト学修科目についても、学生のニーズをすくい上げることができ、なおかつ教員の指導方法や授業の改善にもつなげられる何らかの方法を検討したい。

§ 芸術学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

芸術学部のミッションは「芸術による社会貢献の実践力を育成する」であるが、現代の社会は経済を中心とするグローバル化や少子高齢化、情報化といった社会の変化が労働市場や産業・就業構造の流動化となって進行している。このような時代にあっては、我が国の人口動態も踏まえつつ、変化する社会の捉え方と貢献の仕方を常に検討して柔軟に対応していく必要がある。世論調査によると、国民の 60% が世界に通用する人材や企業、社会が求めている人材を大学は育てているかの質問に否定的な回答をしているように、人材養成や研究の目的が社会の要求と乖離していると指摘されている。大学は未来を築くための教育や研究に大学が総力を挙げて取り組み、社会に貢献することが使命である。特に芸術分野は新産業分野でも期待される感性や想像力などの育成と深くかかわり、豊かな創造力を以て、社会の発展や改善に貢献できる人材の育成を使命としている。

そのためには、従来の教育や福祉に加えて、芸術と産業分野との関連性と活用が高まっているように、常に社会とのかかわりを意識しながら教育体制や教授法の改善・開発をおこない、社会の要請に応えうる柔軟性、機動性をもった組織として教員団を編成しなければならない。また、学修の修得主義を推進していくためには、学生を主体とした授業方法の研究や、総合的な学修環境を形成するプロジェクト型授業や外部との連携授業などを推進すると共に、教員団のチーム力形成が重要である。そのためには次のような 4 つの目標が考えられる。①情報収集力、②得た情報から問題や課題を発見する複眼的な分析力、③発見した問題や課題を共有し、教員個々人の問題や課題とする仕組み、④問題や課題を解決するチーム力(チーム学校)の形成、⑤修得主義の実践が重要と考える。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

芸術学部長を中心とした主任会の構成員及び FD 委員が FD 活動の中核メンバーである。定期開催の主任会と主任研修会で情報の共有や分析をおこない、目標や課題の設定、及び手段などの基本方針を検討する。そして、中核メンバーはもとより、課題ごとの担当教員が報告や成果、及び方策等を拡大教授会で報告し、全学部教職員の組織的な取り組みとする仕組みを構築している。また、各学科の主任は学部 FD 中核メンバーであるので、学科内の取り組みをまとめることや推進する役割を担い、教授会と学科会が連動して FD 活動を推進させている。大学 FD 委員は、全学的な課題や情報の収集と伝達、及び他学部・他大学における FD 活動の情報収集を行うと共に、情報の共有を図り、FD の組織的活動が円滑におこなわれる役割を担っている。

3 平成 27 年度の活動報告

(1) 授業アンケートの実施と授業成果報告書の作成

① 概要・活動内容(目的を含む)

平成 27 年度は予定通り年 2 回の授業アンケートが芸術学部で開講されている全ての授業について実施された。個々の科目に関するデータおよび統計的データの全てを、Blackboard を通じて学部内の全学生および学部内の全教員に公開する。また、個々の科目についてのデータは伏せつつ、統計的データを、持ち出し不可の冊子として一

般の閲覧に供することを検討している。さらに、各学科の専門科目の担当者が授業概要と授業成果をまとめた授業成果報告書などを作成している。

② 到達目標

芸術学部 FD 委員会においては、授業アンケートのデータを分析し、今後の FD 活動の方向性を考える手がかりとする。また、各科目担当者はそれぞれのアンケート結果を参照し、授業の内容と養成人材像との妥当性について点検する。授業成果報告書は各学科の専任・非常勤教員に配付し、全ての教員が専門科目の概要を把握することによって、より緊密な連携を可能とする。

③ 評価

本年度も昨年度に引き続き 2 年次以降の専門科目に関して授業報告書を作成し、様々な情報を共有しつつ、今後の教育方針に関する議論の土台を築くことができた。また、授業アンケートの結果に関しては、芸術学部の拡大教授会において、その結果を報告するとともに、学生の学修状況、その傾向などについての情報を共有することが出来た。

(2) 学外セミナー等への教員派遣

1)

① 概要（目的を含む）

全国私立大学教職課程研究連絡協議会第 35 回研究大会（平成 27 年 5 月 30 日、31 日 仙台大学）に中村慎一教授を派遣し、教員養成改革に関する情報収集を行い、本学部の教員養成への活用と改革動向に対応した運営を行うための基礎情報を得る。

② 到達目標

学校制度改革及び教員免許制度の改正から、教職課程に関わる最新情報を入手すると共に、他大学の養成課程の現状や採用側の情報を把握する。

③ 活動内容

文部科学省初等中等教育局教職員課長による教育行政に関する講演、インターンシップ、全学的な教員養成センターの報告及び教職課程と小学校・中学校との連携など 12 の分科会において議論を深め、課題共有や課題解決の議論を深めた。

④ 評価

学校制度改革及び教員免許制度の改正についての最新情報が得られたと共に、都道府県・政令指定都市教育委員会の教員採用試験の実態や多様な教員養成課題についての知見が得られた。

2)

① 概要（目的を含む）

協同出版セミナー 小中一貫教育を担う今後の教員養成の在り方（平成 28 年 6 月 4 日経団連ホール）に中村慎一教授を派遣し、我が国の教育制度改革の取り組みと教員免許法の改正についての最新動向及び小中一貫教育に対応した教員養成に関わる情報を収集する。

② 到達目標

我が国の教育政策に関する最新の動向を把握して、教員養成課程としての対応と充

実を図る基礎情報とする。

③ 活動内容

文部科学省文部科学審議官による教育再生の背景及び我が国の取り組み、改革方向性、教員政策の方向性についての最新情報を得ると共に小中一貫教育における免許制度の改善についての知見を深めた。

④ 評価

我が国の教育政策の背景と議論の方向性を確認できたと共に、今後の教員養成及び免許制度の課題についての理解が深まり、教員養成課程を有する学部の運営に活かすことが出来る。

3)

① 概要（目的を含む）

人とモノの未来をデザインする（平成 27 年 5 月 12 日 日本橋タワー）へ中村慎一教授を派遣し、アートとテクノロジーを融合させた研究及び開発の事例報告と人材育成についての情報収集を行い、本学の人材養成及び教育体制の中長期的教育計画の基礎資料とする。

② 到達目標

芸術と工学の融合させた優れた研究・開発の事例及び人材育成についての知見を深め、本学部の人材養成と中長期教育計画の基礎資料とする。

③ 活動内容

東京大学産業技術研究所 山中俊治教授により、テクノロジーとアートを融合させて社会に貢献できる開発事例を示された共に、アートとテクノロジーを融合させて社会の改善や発展に貢献できる人材の育成や研究活動についての紹介がなされた。

④ 評価

様々な実践・事例の解説を通して、デザイン教育と工学教育の融合について、多くの知見が得られた。今後の学部の教育活動や教育計画に反映させる基礎情報を得ることが出来た。

(3) 研修会

1)

① 概要（目的を含む）

芸術学部ハラスメント研修会（平成 28 年 1 月 28 日大学研究室棟 B104）を開催し、ハラスメントに関する理解を深めると共にハラスメントのない教育・職場環境を形成する。

② 到達目標

本学園におけるハラスメントの定義を確認し、大学におけるハラスメントの種類や加害者の分類について理解をする。またハラスメントの被害状況やどのような行為がハラスメントに該当するのかを理解し、働く人の心構え、加害者、被害者にならないための具体的行動を理解する。

③ 活動内容

学部の全教員を対象にして本学顧問弁護士が作成した「ハラスメントのない大学に-

ハラスメントの防止に向けて-」を用いて、藤枝由美子玉川学園ハラスメント防止委員会委員が解説を行った。なお、非常勤教員に対しては同冊子を全員に配布した。

④ 評価

全専任教員及び非常勤教員(資料配布)に対してハラスメント防止の研修を行い、ハラスメントに関する正しい理解と防止に向けての情報共有と規範に沿った行動が出来る基礎研修となった。ハラスメント防止研修は望ましい教育・研究環境を形成する上で継続して実施すべきである。

2)

① 概要 (目的を含む)

芸術学部公開シンポジウム「美術教育の現在-学校と美術館の役割とは-」(平成 28 年 2 月 27 日 玉川大学)を開催し、美術教育における学校と美術館の役割について、日米の美術教育者による講演の実施とパネルディスカッションを通して、教員養成はもとより美術鑑賞教育の在り方についての理解を深める。

② 到達目標

創造的で活力がある民主的な社会を形成する市民の育成に、美術教育、美術鑑賞教育はどのような役割を果たすことが出来るのかについての理解を深め、教員養成はもとより芸術学部の教育全般に活用を図るための基礎情報を得る。

③ 活動内容

美術館の観点からは米国メトロポリタン美術館教育学芸課長と大原美術館学芸課長、学校の観点からは前全国造形教育連盟委員長による講演が行われた。またパネルディスカッションを実施し、クリティカルシンキングやクリエイティブシンキングの力を育成する題材や場として、美術作品や美術館の活用が多数の事例と共に示されたと共に学校と美術館の課題も示された。

④ 評価

現代はクリティカルシンキングやクリエイティブシンキングが民主的で活力ある社会を駆動する能力として育成、発展させるべき力として考えられている。学校や地域と連携を図りながら美術館や美術作品を活用し、望ましい社会を形成させることが出来る人材養成についての具体的方策や方向性について貴重な知見が得られた。

3)

① 概要 (目的を含む)

平成 27 年度芸術学部全体会(平成 28 年 3 月 24 日 玉川大学)を開催。芸術学部の専任教員と非常勤教員が学部の養成人材像と大学の方針を確認し、共通理解に基づき、チーム学校の一員として個々の教員が教育活動を推進することを目的としている。

② 到達目標

教育再生課題や大学の方針を理解し、学部の養成人材像実現のために必要な基礎情報や重点施策について理解する。

③ 活動内容

全体説明と所属各学科に分かれて専任と非常勤が一体となって次年度の教育活動を

推進できるように打ち合わせを行うと共に、教員の親睦を図りチーム学校の体制を整える。

④ 評価

役割や担当科目が異なっても、チーム学校として同じ目的に向かって個々人が教育活動を推進することが出来る。

4)

① 概要（目的を含む）

デザイン・シンキング実践ワークショップ(平成 27 年 5 月 22 日 東京都港区・品川フロントビル)に橋本順一教授を派遣した。本ワークショップは日経デザイン誌が主催したものである。

② 到達目標

創造的な思考としての「システム思考+デザイン思考」の考え方と、実際的な適用方法を演習を通して修得する。

③ 活動内容

企業における既存の事業評価プロセスの課題と、それを解決するイノベティブな事業評価プロセスについての解説があり、さまざまな業種の企業からの参加者が約 50 名あり、10 のグループに分かれ、実践的なワークショップをおこなった。

④ 評価

平成 27 年 11 月に参加した「デザイン思考マスタークラスワークショップ」とは異なったアプローチがあり、今後、この経験を授業等に活かしていくことができる。これらは 6 月 18 日(木)の芸術学部拡大教授会で報告され、多くの教員が最新の実践メソッドを理解、共有することができた。

5)

① 概要（目的を含む）

デザイン思考マスター・クラス夏期特別講座(平成 27 年 8 月 21 日～23 日 東京都千代田区・アーバンネット神田ビル)に橋本順一教授を派遣した。

② 到達目標

グループ作業の中で、大学教育や教授法、キャリア・デザインなどに多くの実践的な方法論を見出し、より効果的なものにする。

③ 活動内容

さまざまな企業から 30 名以上の参加者があり、企業のイノベーションのためのデザイン思考の認知が広がっていることを実感した。

講座は 3 日間にわたり、実践的なグループワークが行なわれた。「都会の旅行体験をリ・デザインする」というテーマで、実際に浅草の観光客へのインタビューからニーズ、問題点を特定して新しい提案のアイデアをまとめていった。

④ 評価

教育の効果を最大化するためには、社会の変化を見通した授業であるべきで、社会での実際のコミュニケーションを意識することの重要性が改めて認識された。これらは 10 月 22 日(木)の芸術学部拡大教授会で報告され、多くの学部教員が情報を共有す

ることを通して、授業改善、発展の手掛かりとすることができた。

6)

① 概要（目的を含む）

デザイン・シンキング セミナー（平成 27 年 9 月 16 日 東京都千代田区・ソラシティカンファレンスセンター）に橋本順一教授を派遣した。日本経済新聞社主催のセミナーで 4 名のプレゼンターより、企業活動とデザイン思考との関係性についての紹介があった。

② 到達目標

社会の流れの中でデザイン思考の重要性を実例を通して浮き彫りにし、今後の課題とベクトルを見極める契機とする。

③ 活動内容

田子学氏（エムテド代表取締役、慶応義塾大学大学院システムマネジメント研究科特任教授）より、『全く新しい価値の創造へ、経営手法として注目を集める「デザインマネジメント」』と題して田子氏のデザインマネジメントの考え方や実践事例の紹介があった。

次に新隼人氏（東京大学知の構造化センター i. school プログラムマネージャー）から「デザイン・シンキングを用いた新製品・サービス開発」と題して東京大学 i. school の紹介と企業との連携の事例が紹介された。

次に飯塚真也氏（NTT ドコモイノベーション統括部）、森永康夫氏（NTT ドコモサービスイノベーション部）から「NTT ドコモにおけるデザイン・シンキングの組織的実践事例」と題して NTT ドコモでの事例が紹介された。

最後に八木田寛之氏（三菱日立パワーシステムズ）から「創業 130 年の三菱重工が語る変化を乗り越える新事業の作り方」と題して三菱重工の事例が紹介された。

④ 評価

会場に入りきらないほど参加者があり、企業活動においてデザイン思考への関心がとても高いことがわかった。

大学もデザイン思考を応用した企業の課題解決に向けた研究をしており、企業とのコラボレーションによる実践が始まっている。

このような社会の流れの中で、本学の関わりを考えるよいきっかけとなった。

（4）調査・研究など

① 概要(目的を含む)

美術鑑賞教育の新手法として注目を集める VTS=Visual Thinking Strategies について、その可能性と問題点を調査するため、これを積極的に推進する京都造形芸術大学アートコミュニケーションセンター（ACOP）を訪問する。あわせて小・中・高等学校と連携した美術鑑賞教育の実践を豊富に有する大原美術館を訪問する。調査は実践体験および関係者への聞き取り調査によって行う。芸術教育学科教授の加藤悦子と林卓行、および同准教授の高橋愛を派遣した。

② 到達目標

近年発展の著しい、美術鑑賞教育の諸方法について、実践現場におけるデータを収

集し、さらにこの方法を本学学生に対して集团的・体系的に学修させる方法の基礎理論を構築する。

③ 活動内容

京都造形芸術大学のアート・コミュニケーション・センターでは、同大の教育活動における VTS 導入の経緯と、それをさらに日本国内の状況に合わせて改良した対話型鑑賞教育、ACOP=Art COmmunication Project について、参加者としての実践を含む詳細なレクチュアを受けた。次に訪問した倉敷、大原美術館では、学芸課長柳沢秀行氏の講義により、対話型鑑賞教育を含む、館全体として組織的に取り組んでいる教育普及活動に詳しい情報を得ると共に中学生を対象とする対話型鑑賞の現場を見学した。

④ 評価

京都造形芸術大学では、現在の対話型鑑賞が、より個別の目的に応じて改良されたものになっていることがわかった。また大原美術館では対話型鑑賞教育とほかの教育諸活動の有機的な連携、さらに対話型鑑賞教育を教育現場で行うにあたって、美術館-学校間の協働体制の確立が急務であることを、確認した。これらのあたらしい知見は平成 27 年 11 月の芸術学部拡大教授会で報告され、情報の共有を図った。なお、平成 28 年度中に刊行される玉川大学学術研究所紀要に発表の予定である。

4 昨年度（平成 26 年度）に提案された予定・課題の達成度について

セミナーへの教員派遣については、教員養成改革、教育制度改革の進行及び次世代人材養成へ対応が求められる状況で、社会の要求を踏まえた学部の運営や教育計画の実行に有効であった。

5 今後（平成 28 年度以降）の予定・課題について

芸術学部では各学科の教育活動を相互に参観することや協働体制を強化してきたが、各学科や各プロジェクトの横断性や学部を超えた連携はもとより、社会との連携を図り、理論と実践の往還による教育体制を推進し、現代ニーズに適合した人材養成機関と研究機関としての機能を高めるためにも、積極的かつ継続的に教員団の資質能力の向上を図る。

§ リベラルアーツ学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

本学部では、①学士課程教育の質保証、②学部・学科設置の趣旨と教育目標、③実効的なリベラルアーツ教育の実現、という観点から日頃の教育研究活動の改善へ向けた FD 活動を展開することを目標としている。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

本学部における FD 活動の組織構成・役割は以下の通りである。

学部長・各主任…学部における FD 活動の方針について提案・助言する。

大学 FD 委員…学部における FD 活動全般をコーディネートする。また大学 FD 委員会で審議・報告された内容を拡大教授会にて報告する。

FD 研修会担当…学部で実施される専任教職員向けの FD 研修会についてコーディネートする。

※この他、所属教員全員が主体的に FD 活動に取り組む体制がとられており、教育内容・方法に関する情報交換は教員間で日常的に行われている。

3 平成 27 年度の活動内容

(1) 初年次教育の方向性に関する研修

① 概要（目的を含む）

リベラルアーツ学部の人材育成に資する、より効果的な 1 年次研修・初年次教育を実践するために、次年度以降の 1 年次研修の具体的なプランを検討する。また、研修と連動した初年次教育のあり方についても意見交換を行う。

② 到達目標

次年度以降の 1 年次研修および初年次教育カリキュラムを改善することができる。

③ 活動内容

1 年次研修の 2 日目である平成 27 年 5 月 30 日（土）に湯本富士屋ホテルにて実施した。参加者は 1 年生担任教員、学部長、各主任であった。具体的には以下の各項目について検討を行った。

- ・次年度以降の新入生研修のあり方について
- ・新入生研修の成果のアウトプット方法について
- ・秋学期の「一年次セミナー102」のスケジュールについて

④ 評価

検討内容を実践に反映させるのは平成 28 年 4 月となるため、実質的な評価はそれ以降になるが、リベラルアーツ学部の初年次教育の要ともいえる 1 年次研修の内容について一定の問題意識を共有できたため、現時点での暫定的な目標達成はできたと考えられる。

(2) 「キャリアセミナー」の教育内容と方法の改善に関する研修

① 概要（目的を含む）

本学部 2 年生必修科目「キャリアセミナーⅠ」および「キャリアセミナーⅡ」の教

育内容と教育方法を検討し、望ましいキャリア教育の在り方を考える。

② 到達目標

キャリア教育の一環として、この科目の教育内容・方法を具体的に改善することができる。

③ 活動内容

5月23日、6月25日、8月13日、9月17日、10月22日の各日において、2年生各クラス担任が参加し、教育内容・方法を改善するためのディスカッションと研修を実施した。

④ 評価

キャリア教育の在り方に関して教員間で問題意識を共有でき、実際の教育内容と方法を改善することができた。また学生のキャリアに関する意識を高め、教育効果を上げることができたと考えられる。

(3) 教育現場における防災に関する研修

① 概要（目的を含む）

学部専任教員の防災に関する意識を高めると同時に、教育現場において火災等災害発生時に迅速かつ的確な対処ができるよう、必要な知識とスキルを確認し、具体的な対処手順を実践的に理解する。今回は新校舎（大学教育棟）において実施する。

② 到達目標

火災等災害発生時の迅速かつ的確な対処ができるようになる。

③ 活動内容

平成27年9月16日（水）15:30～17:00、大学教育棟7階会議室および同棟内消防設備設置場所にて実施した。キャンパスセキュリティセンター職員による説明の下、火災等災害発生時の対処方法の確認および大学教育棟内消防・防災設備の実地見学が行われた。

④ 評価

定量的な評価は実施していないが、新校舎内における火災等災害発生時の対処方法を具体的に理解できたという参加教員の意見が多く聴かれたことから、到達目標は概ね達成されたと評価できる。

(4) 平成27年度リベラルアーツ学部FD研修会

① 概要（目的を含む）

リベラルアーツ学部の教育理念を実現し、Tamagawa Vision 2020に対応した大学教育の質保証を高めるため、学部の教育研究活動を点検調査し、専任教職員が認識を共有する。

② 到達目標

日頃の教育研究活動を教職員が点検し、教育目標や教育方法、研究活動の在り方について教職員間で認識を共有することができる。

③ 活動内容

平成28年2月18日（木）、20日（金）の両日、湯本富士屋ホテルにおいて専任教職員約20名による研修会を実施し、以下の各項目について集中的に検討した。

(ア) 大学改革に関する研修

講師：文部科学省高等教育局大学振興課課長補佐 北岡龍也氏

講演タイトル：大学改革の動向について

(イ) 共同研究中間報告

- ・玉川学の構築と展開に関する実践的研究
- ・米国における「日本学」の動向調査

(ウ) 学部改組について

(エ) カリキュラム改訂について

(オ) 平成 27 年度教育活動の振り返りと次年度教育計画の検討

④ 評価

(ア) 大学改革に関する研修では、大学行政の最前線に携わる講師による「わが国の大学改革の動向について」の講演を聴講し、大学改革の背景、現状と課題についての認識を深めるとともに、今後の本大学・本学部の教育計画と運営に資する貴重な情報を得ることができた。

(イ) 共同研究中間報告では、本学部における玉川学や日本学に関する研究成果と教育課程の課題を把握できた。

(ウ) 学部改組およびカリキュラム改訂に関する研修では、情報の共有と問題点の検討ができた。

(エ) 平成 27 年度の教育活動を振り返ることにより改善点を捉えることができた。それを踏まえて 28 年度の教育活動に関する検討を行い、具体的な教育計画を立案することができた。

以上の点から、極めて意義深い研修会であったと評価される。

(5) 学外 FD セミナーへの参加

① 概要（目的を含む）

外部機関が主催する FD セミナーに本学部教職員が参加し、FD に関する研修を受けるとともに、大学教育や FD 活動に関する最新の情報や研究動向を把握する。

② 到達目標

学外の FD セミナーに参加し、FD に関する最新の情報を得ることができる。

④ 活動内容

平成 28 年 3 月 17 日～18 日に行われた京都大学高等教育研究開発推進センター主催「第 22 回大学教育研究フォーラム」へ本学部 FD 委員が参加。大学教育における参加型授業やアクティブ・ラーニング等に関するセッションへ出席した。

⑤ 評価

大学教育と FD に関する最新の情報と他大学の活動状況を把握できた。特に参加型授業の方法論やわが国大学生に特有のアクティブ・ラーニングの問題点に関する情報と研究動向を知ることができたことは意義深い。

4 昨年度（平成 26 年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に提案された予定・課題は以下の通りであった。

- ① これまでと同様、大学教育の質保証を図るため、FD への意識をより高めるとともに、

インターラクティブな相互研修を基盤とする FD 活動の機会を多く設け、本学部教員の資質向上を一層図り、「教育力」と「研究力」を高めていきたい。

- ② 学部運営の PDCA サイクルの中に FD 活動を位置づけ、その成果を本学部の教育理念・教育目標の共有と実現に生かしていく仕組みを構築していく必要がある。
- ③ 大学研究室棟 2014 が平成 26 年度末に完成し、平成 27 年度から本格稼働する。教育研究環境の大きな変化であるため、新しい環境に早く適応することが課題となる。
- ④ 新しい教室環境を活用し、アクティブ・ラーニングの特長を生かした上で適切に取り入れ、教育効果を高めることが課題となる。

以下、それぞれの達成度について振り返る。

- ① に関しては、FD 研修会等の実施や日常的な教員相互のブリーフィングなどによって FD に対する意識は高まり、概ね実践されてきたと評価できるが、近年の大学教育の変化に対応した教育力と研究力の一層の向上を目指す試みが必要である。
- ② に関しては、概ね実践されているが十分とは言えず、引き続き検討すべき課題である。
- ③ に関しては、大学教育棟への移動は教育研究環境の大きな変化であったが、1 年を経て漸く適応してきたと思われる。今後も教育研究活動の質を高めるために教育研究環境の点検を継続して行うことが必要である。
- ④ に関しては、各教員は科目の特性に応じてアクティブ・ラーニングを取り入れ、教育効果を高めているように思われたが、アクティブ・ラーニングの教育効果を妥当性のある方法で的確に捉える必要があるだろう。

5 今後（平成 28 年度以降）の予定・課題について

- ① これまでと同様、大学教育の質保証を図るため、FD に対する意識をより高めるとともに、インターラクティブな相互研修を基盤とする FD 活動の機会を多く設け、本学部教員の資質向上を一層図り、近年の大学教育の変化に対応した教育力と研究力を一層高めていくことが第 1 の課題である。
- ② 学部運営の PDCA サイクルの中に FD 活動を位置づけ、その成果を本学部の教育理念・教育目標の共有と実現に生かしていく仕組みを具体的に構築していくことを検討したい。
- ③ 本学部と文学部の改組へ向けて、その方向性の検討と、学部学科の教育理念・教育目標の再検討、および教員間の問題意識の共有をいかに図るかが課題となろう。
- ④ アクティブ・ラーニングの本質を見極めた上で、科目の特性に応じて適切に取り入れ教育効果を高めていくことが昨年度に引き続き課題となる。さらにその教育効果を妥当性の高い方法で的確に捉えていくことが課題になると思われる。

§ 観光学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

観光学部では、現在における観光の意義と役割、現状と課題を的確に理解し、適切な情報収集とその分析および異文化に対する理解を基礎に、高度な英語運用力を駆使してグローバル時代の観光ビジネス、地域活性化に貢献できる人材を養成する。

目標とする人材育成にあたり、教員全員が観光学部の理念、教育目標、そして、問題意識を共有することを目標とする。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

観光学部長、観光学科主任、教務主任、学生主任、FD 担当教員が中心となって FD 活動を実施する。学部の担当教員と大学 FD 委員は連携して活動計画を取りまとめ、主として研修会・ワークショップの運営にあたる。

3 平成 27 年度の活動内容

(1) ワークショップ

平成 27 年 8 月 13 日（木）16 時～17 時 30 分

① 概要（目的を含む）

「受験生が捉える玉川大学観光学部の現状」と題して、河合塾の神本優氏から講演いただいた。本講演会の目的は、受験生が捉える玉川大学観光学部の位置づけを理解し、今後、受験生に対してどのようなアプローチをとるべきかを検討してその課題を浮き彫りにすることである。

② 到達目標

ライバル校との競争優位・劣位について理解し、今後、受験生へのアプローチとして何が適当か一定程度的見解を示せること。

③ 活動内容

質疑応答も含め、下記の内容に沿って約 1 時間半ご講演いただいた。

I. 観光学部関連の受験マーケット状況

- ・東京五輪の影響で近年は増加傾向にあるのかどうか

II. 受験生全体の傾向

- ・現在、文系・理系のどちらの人気の高いのか
- ・入学者数の制限が次年度より本格的に導入されることを前に、有名私立大の動向はどうなることが予想されるのか

III. 4 年前の観光経営学科と観光学科との偏差値比較

- ・過去（観光経営学科）VS 現在（観光学科）

IV. 本学の観光学部のライバル校の動向

- ・立教の滑り止め校として、東海、東洋などがライバル校であるが、こうしたライバル校の偏差値推移はどのようなものか

V. 本学観光学部の本年度入学者の内訳についての対外的評価

- ・本学観光学部の本年度入学者の内訳で一般入試が最も高い結果となったが、この結果について、受験マーケットではどのような評価となるのか

VI. 現在の高校生について

- ・英語教育の問題点や河合塾で実践している英語教育の効果測定とはどのようなものか

④ 評価

長年にわたり大手予備校の校社長を勤め、多くの受験生のとの接点をもつ神本優氏の見識は実に深く、上記質問項目に対しても的確にご回答いただいた。特に、本学部のディプロマポリシーに対する認識はほとんど受験生に届いていない可能性を示唆いただき、これはライバル校の動向を考えれば決して看過できない近々の課題であると同時に、いかに今後の広報戦略を再考するか、その課題も浮き彫りにした。また、現在の保護者が親として未熟との指摘があり、本学部に限らず高等教育全般にわたる課題をご提示いただいた。

(2) ワークショップ

平成 27 年 10 月 22 日 (木) 16 時～17 時 30 分

① 概要 (目的を含む)

「就職活動における選考試験の現状とあるべき対策」と題して、本学キャリアセンター長の大槻利行氏からご講演いただいた。本講演会の目的は、就職活動における選考試験の現状とあるべき対策を理解するためである。

② 到達目標

SPI や一般教養などの現状を理解し、教員が企業へ取るべきアプローチとは何かを理解し、学生がとるべき就職対策を指導できるようになる。

③ 活動内容

学生の就職における選考試験で代表的な SPI や一般教養などの現状を理解し、学生がとるべき対策等についてご解説いただいた。また、観光経営学科は内定・就職率ともに学内では最も高かったが、観光学部となった今後は、その数値が高いだけではなく、本学部の成果を見極める点でも就職先が極めて重要となる。従来であれば、学生も手が届かなかった企業へ、我々教員がどのようにアプローチとるべきか、学生にどのようなキャリア支援をしていくべきか、そして、学生がどのようなアプローチを取ればよいのか、ご教示いただいた。

④ 評価

有名企業はやはり SPI をその選考過程で用いている。そこへアプローチするためには、SPI の正答率を足きりラインである 9 割に上げる必要がある。その意味では、観光経営学科でも SPI 対策を実施してきたが、改めてその対策は継続する必要があるほか、留学前に SPI を受験させ、学生の SPI への意識を高めなければならないことがわかった。

(3) 調査

① 概要 (目的を含む)

平成 27 年 3 月 10 日 (木) 14 時 00 分～15 時 00 分

学生の留学先であるメルボルン提携校の大学箇所を巡り、学生のインタビューを通じて、留学している学生の状況を理解する。

② 到達目標

留学する学生に対して、メルボルンに関する一定の見識を示せるようになる。

③ 活動内容

担当教員数名がメルボルン提携校を視察したうえ、学生らとの交流を通じて現状を把握し、帰国後、調査結果を報告する。

④ 評価

1期生の帰国後に浮き彫りになった課題を留学先へ報告すると共に、その課題解決へ向けて協議した結果を報告いただいた。

(4) 学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

観光学部観光学科の科目において、授業改善を目的とした授業評価アンケートを実施した。今年度は春学期および秋学期に実施している。

② 到達目標

学生の学修達成度を測り、改善点を踏まえて今後の授業運営に資すること。

③ 活動内容

観光学部開講科目でマーク式、記述式の授業評価アンケートを実施した。データの集計結果は科目担当教員に配付し、活用している。

④ 評価

観光学部授業評価アンケートの結果は下記の通りである。

春学期授業評価アンケート回答数は昨年度 479 に対して、今年度は 301 と減少した。主な原因として、担当科目教員の授業評価アンケートの採り忘れによる。また、「1 回分の授業外の学習にかけた時間」が昨年度 2.7 に対して今年度は 2.9 と 0.2 時間増加した以外に、主だった変化（0.2 ポイント以上の差）見られなかった。

秋学期授業評価アンケート回答数は昨年度 295 に対して、今年度は 608 と増加した。主な原因として、1 期生の帰国に伴い授業数が増加したことによる。全体的な傾向として、19 ある質問項目のうち昨年度と比較して 10 項目が 0.2 ポイント以上下回っており、総じて下落傾向にあると思われる。仮に 1, 2 年次教育に大きな差異がないとすれば、この下落傾向は帰国した 1 期生の影響によるところが大きいと推察される。具体的には、「1 回分の授業外の学習にかけた時間（2.9→2.7）」、「上記以外でこの授業の理解を深めるために取り組んだ 1 回分の学習時間（2.7→2.5）」、「各回の授業のねらい・内容は明確であった（4.3→4.1）」、「シラバスは受講に役立った（3.8→3.4）」、「教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った（4.4→4.1）」、「映像視覚教材（ビデオ、書画装置、パワーポイントなど）や板書が授業の理解に役立った（4.3→4.0）」、「教員は、効果的に学生の授業参加（質問、意見など）を促していた（4.3→4.1）」、「多角的な視点から見る姿勢が身についた（4.2→3.9）」、「授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった（4.2→4.0）」、「この授業を他の学生に薦めたい（4.2→3.9）」、であった。

【春学期授業評価アンケート全体結果】

玉川大学

観光学部全体

回答数(全体): 301

分野	設問	平均値	3時間以上	2時間～3時間未満	1時間～2時間未満	1時間未満	まったくしていない	無効回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.9	8.6%	14.0%	39.2%	33.2%	5.0%	0
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.5	5.3%	7.0%	35.0%	37.3%	15.3%	1
		この授業の平均値	よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない	無効回答数
			5	4	3	2	1	
II	3 この授業に積極的に参加した。	4.1	36.2%	46.2%	15.0%	1.3%	1.3%	0
	4 シラバスは受講に役立った。	3.4	16.3%	27.0%	41.7%	8.7%	6.3%	1
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	32.3%	50.3%	14.3%	2.3%	0.7%	1
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	36.5%	43.9%	16.6%	2.0%	1.0%	0
	7 映像授業教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	31.6%	44.2%	19.6%	3.7%	1.0%	0
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.1	38.5%	40.9%	16.9%	2.7%	1.0%	0
IV	9 新しい考え方や発想に触れた。	4.0	29.3%	43.7%	21.3%	4.3%	1.3%	1
	10 基本的知識が得られた。	4.2	41.2%	43.5%	14.3%	0.7%	0.3%	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	29.6%	42.2%	21.6%	4.3%	2.3%	0
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.0	33.3%	38.3%	22.3%	5.0%	1.0%	1
	13 科目の持つ学問的意義を読み取れた。	3.9	27.4%	44.8%	23.7%	2.7%	1.3%	2
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	27.2%	44.5%	20.9%	5.3%	2.0%	0
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	37.2%	42.5%	15.9%	3.3%	1.0%	0
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	30.7%	42.3%	21.3%	4.3%	1.3%	1
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	28.4%	40.8%	21.7%	6.7%	2.3%	2
VI	18 この授業の教員の大きさは適切であった。	4.3	49.5%	34.9%	12.0%	3.0%	0.7%	0
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.3	50.2%	34.6%	13.3%	1.7%	0.3%	0

【秋学期授業評価アンケート全体結果】

玉川大学

観光学部全体

回答数(全体): 608

分野	設問	平均値	3時間以上	2時間～3時間未満	1時間～2時間未満	1時間未満	まったくしていない	無効回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.7	7.6%	12.1%	31.5%	36.7%	12.1%	5
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.5	6.2%	9.3%	28.7%	37.9%	17.9%	9
		この授業の平均値	よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない	無効回答数
			5	4	3	2	1	
II	3 この授業に積極的に参加した。	4.1	37.9%	36.9%	21.4%	3.1%	0.7%	1
	4 シラバスは受講に役立った。	3.6	23.7%	27.2%	36.9%	7.4%	4.8%	1
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.2	39.4%	40.1%	18.3%	1.3%	0.8%	2
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.2	43.7%	34.1%	19.6%	1.3%	1.3%	1
	7 映像授業教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.2	45.5%	32.6%	18.8%	1.8%	1.3%	1
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.1	39.8%	33.4%	23.3%	1.7%	1.8%	3
IV	9 新しい考え方や発想に触れた。	4.1	42.0%	33.9%	20.0%	3.1%	1.0%	3
	10 基本的知識が得られた。	4.2	45.8%	35.2%	17.2%	1.2%	0.7%	3
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	35.5%	34.8%	24.8%	4.0%	1.0%	2
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	31.4%	32.0%	28.7%	6.3%	1.7%	2
	13 科目の持つ学問的意義を読み取れた。	4.0	32.1%	37.9%	25.8%	2.5%	1.7%	4
	14 学問的興味をかきたてられた。	4.0	34.5%	37.5%	23.6%	2.6%	1.8%	2
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.2	42.6%	36.7%	18.3%	1.7%	0.7%	3
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.1	39.5%	35.9%	22.8%	1.3%	0.5%	3
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.0	38.7%	31.1%	26.7%	2.2%	1.3%	4
VI	18 この授業の教員の大きさは適切であった。	4.3	53.6%	26.9%	17.4%	1.2%	1.0%	3
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.3	53.9%	26.9%	17.5%	1.2%	0.5%	3

(5) 教職員相互の授業公開と参観

① 概要(目的・到達目標を含む)

教員相互で授業を参観し、各教員の教授法、教授内容について授業改善を行う。

② 活動内容

春学期、秋学期にそれぞれ1名ずつの教員の協力のもと、参観授業を行い、授業改

善につながるよう担当教員と参加教員による振り返りを行った。

③ 評価

昨年と同様、参観できた教員が少なかったため、次年度も参観教員数を増やせるよう検討の余地がある。

4 昨年度（平成 26 年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度の予定はすべて達成した。今年度は昨年度とは異なり、期初の FD 活動計画の通りに実施した。昨年度までは必要と思われる FD 活動を期中に適宜実施してきたが、本学部が完成年度に近づくとつれ、課題が徐々に解消される、または、その課題に思いのほか関心を寄せていないがために、臨時 FD 活動が実施されなかった可能性も否定できない。次年度はいよいよ観光学部完成年度を迎えるが、必要と思われる FD 活動は、今後も臨機応変に実施していきたい。

5 今後（平成 28 年度以降）の予定・課題について

平成 27 年度と同様に、学部 FD 研修会、講演会、参観授業、授業評価アンケートを実施する。次年度は観光学部が完成年度を迎えると同時に、4 年間で見てきた課題を改めて一から検討する必要がある。特に、カリキュラム改訂については FD 活動にも絡めて検討しなければならないだろう。また、帰国した学生らの英語力の維持や更なる向上に向け様々な試みが必要であろうから、こうした試みに対して種々検討することが予想される。一方で、TOEIC の卒業要件の基準未達によって卒業が少なくとも半年間見送られた学生のフォローをどのように実施していくのか、その点についても改めて検討しなければならない。

また、次年度は学部長が交代し、新しい体制で臨むこととなる。そのため、学部としての結束力を上げることを目的に玉川アクティブプログラム（通称 TAP）を利用する予定である。さらに、本年度から担任によるヒアリング調査の実施に伴い、学生に対するヒアリングの有用性を高めるため、本学のカウンセラーにご講演いただく予定である。

なお、次年度は完成年度を迎えるが、学部全体として共有すべき事案については、臨機に FD の一環として扱うこともあろう。結果として、目的として掲げられていた観光学部の理念、教育目標、そして、問題意識の共有については、ある程度達成されたが、課題も見えてきたのも事実である。今後も紋切型の FD になることなく、有用性の高い FD を実施していく。

3. 教師教育リサーチセンターの活動

1 教職課程 FD・SD 活動への取り組み理念

本センターは、大学における教職課程を運営するため、大学附置機関として設置された。主な業務内容としては、教職課程における学生支援と、教職に関する研究活動支援がある。研究活動支援の中には、教員養成における教職課程 FD・SD 研修も含まれており、教員養成の質を向上させることを理念・目標としている。

2 教師教育リサーチセンターにおける教職課程 FD・SD 活動の組織構成と役割

センター長、事務長、課長を中心に教職課程 FD・SD 活動を計画し、課長補佐以下職員で研修会開催の実務を担当している。

3 平成 27 年度の活動内容

(1) 教師教育フォーラム

① 概要（目的を含む）

「質の高い教員養成に向けた大学の取り組みと教育実践」をメインテーマとし、フォーラムを開催した。今年度は本学の「教育学研究科教職大学院」および「教育学研究科 IB 研究コース」と共催し、午前の部に分科会、午後には講演・シンポジウムを実施した。このため、昨年度までの「教員養成フォーラム」から「教師教育フォーラム」と名称を変更しての実施とした。本学教職員をはじめ、近隣教育委員会、全私教協加盟大学、教育実習先、学会関係者等、教師教育や教員養成に関わる多くの方々へ広報を行った。

昨今、教員養成に関する課題となっている、質の高い教員養成に向けた大学の取り組みや、大学の果たす役割等について、分科会や講演、シンポジウムを通して、今後の教員養成の在り方について、多くの方々と共に考える機会とした。

② 到達目標

200 名以上の出席者を目標に掲げた。

③ 活動内容

平成 27 年 10 月 25 日（日）9:30～17:00 於：大学教育棟 2014 他

テーマ：『質の高い教員養成に向けた大学の取り組みと教育実践』

【プログラム】

午前の部：

1. 分科会

12 分科会（特別支援教育、小学校英語教育、国語教育、道徳教育、IB 研究、幼児教育、英語、国語、社会、数学、美術、音楽）

午後の部：

1. 学長挨拶・講演 小原芳明（玉川大学学長）

2. 講演「教員養成改革の今後の展望」

前川喜平（文部科学審議官）

3. シンポジウム「教員研修の充実と教員養成を担う大学の果たす役割」

高岡信也（独立行政法人 教員研修センター理事長）

坂本修一（町田市教育委員会教育長）
濱野裕美（東京都公立小学校女性校長会会長・昭島市立武蔵野小学校校長）
森山賢一（玉川大学教師教育リサーチセンター長、
大学院教育学研究科・教育学部教授）

コーディネーター：八尾坂修（九州大学大学院教授）

7. 閉会挨拶 菊池重雄（玉川学園理事、経営学部教授）

④ 評価

当日は約 305 名の出席者となり、盛況に終了し、目標達成となった。

(2) 平成 27 年度 教職課程 FD・SD 研修会

① 概要（目的を含む）

各学部長、学科主任、教務主任、教務担当、教職担当は原則出席とし、関係部署教職員にも出席を促した。文部科学省初等中等教育局教職員課教員免許企画室長の山下恭徳氏に講師を依頼し、以下の「内容（目的）」に基づく研修会とした。

② 到達目標

以下活動内容の「内容（目的）」に示されているように、平成 27 年 12 月 21 日に示された中央教育審議会答申のポイントについての共通認識を持つ。

③ 活動内容

日 時：平成 28 年 3 月 1 日（火）10：00～11：10

場 所：大学研究室棟 B104

対 象：全学教職員

内 容（目的）：「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について ～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」(中央教育審議会答申 平成 27 年 12 月 21 日)により、教員の養成・採用・研修についての課題や、具体的方策が示された。養成段階においては、新たな課題（英語、道徳、ICT、特別支援教育）やアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善、学校インターンシップの教職課程への位置付け、教職課程を統括する組織の設置、教職課程の評価の推進、「教科に関する科目」と「教職に関する科目」の統合などの科目区分の大きくくり化等を、各大学において検討していく必要がある。また、教育委員会と大学等との協議・調整のための体制（教員育成協議会）の構築も検討の一つとなっている。この答申内容について、全体の概要と、教員養成を中心とした実務に即した方策についての具体的なポイントを解説いただき、共通認識を持つ。

【プログラム】

1. 開会挨拶 小原芳明（玉川大学学長）

2. 講 演 「中央教育審議会答申のポイント
～教員養成・研修の課題と具体的方策の解説～」

山下恭徳（文部科学省初等中等教育局教職員課教員免許企画室長）

3. 閉会挨拶 森山賢一（教師教育リサーチセンター長）

④ 評価

山下氏より、具体的データに基づき、中央教育審議会答申の背景や、特に教員養成と研修に関する事項を中心に、今後、教員養成を担う大学が対応すべき新たな課題や今後の方向性について、実務に即した解説をいただいた。参加した大学教員、職員それぞれの立場で、中央教育審議会答申の内容の理解を深めることができた。当日は、80名の出席者があった。

4 昨年度（平成 26 年度）に提案された予定・課題の達成度について

平成 27 年度は、「教師教育フォーラム（計画では教員養成フォーラム）」、および「教職課程 FD・SD 研修会」1 回を開催するように計画した。計画通り実施することができ、それぞれの目標も達成することができた。

5 今後（平成 28 年度以降）の予定・課題について

「教師教育フォーラム」、および「教職課程 FD・SD 研修会」1 回を開催するように計画したい。「教師教育フォーラム」は、引き続き「教職大学院」、「IB 研究コース」との共催により、大学全体としての教員養成への取り組みをふまえた内容で開催を予定している。

4. ELF センターの活動

1 FD・SD 活動への取り組み理念

教員ひとりひとりの教育の質が ELF プログラムの成果にとって重要である。したがって教員の資質向上が本プログラムの向上に必須であるというのが ELF センターの基本的な理念である。多くの ELF の授業が非常勤教員によって担当されているため、ELF センターは専任教員だけでなく非常勤講師の資質向上にも力を入れてきた。また、ELF センターにはさまざまな言語的・文化的背景を持つ教員がいる（ウクライナ、インド、韓国、フィリピン、ニュージーランド、トルコ、アイルランド、マケドニアなど）ため、FD 活動は互いの知識や経験から広く学ぶことができる有意義な機会と捉えている。

2 ELF センターにおける FD・SD 活動の組織構成と役割

ELF センターの FD 活動の告知や内容は ELF センター会によって決められている。予算やサポート等もこの会議で審議される。FD 活動の内容が決定された後、ELF センターの作業部会の専任教員がその企画と実施を引き継ぐ。指導法、評価、e-learning など作業部会内にさまざまな分野に特化した教員のグループが存在し、Blackboard や ELF ワークショップなどの FD 活動を担当する。

3 平成 27 年度の活動内容

(1) 講演会・ワークショップの開催

① 概要

ELF センターは平成 27 年度に多数の大規模な学会やフォーラムの後援を行ってきた。全国語学教育学会（JALT）の講演会を共同で主催し、ELF センター主催の ELF フォーラムの広報を行うことができた。

② 到達目標

それぞれの FD 活動において非常勤講師に参加を促してきた。これらの活動はセンターと学会との関係、および教員同士のつながりを強める役割を果たすことになった。さらに、これらの活動によってセンターの教員が一堂に会し、より良い教育実践に関する考えや研究を共有する機会となった。

③ 活動内容

以下のワークショップや発表大会が玉川大学で開催された。

- ・5月30日のコンピュータを使った英語教育に関するワークショップ（全国語学教育学会 JALT 横浜支部主催研究会 YOJALT）
- ・10月25日の2015 ELF フォーラム

④ ELF フォーラムの評価

上記の活動においてそれぞれ約 50 名の参加があり、有意義な発表大会であった。しかし、反省すべき点として以下の二点が挙げられた。1. 大学内外への広報活動の不足。今後はフォーラムを学内外へ周知させる活動を充実させる必要があると考えて

いる。2. フォーラムのスケジュールを冊子として会場で配布しなかったこと。今回は参加者に前もってスケジュールを pdf ファイルで配信しておいたが、参加者からはその場で確認できるように冊子のスケジュールが必要だという声があった。次回はフォーラム内で配布するためのスケジュールを用意する必要がある。

(2) 研究会・ワークショップなど

① 概要

- ・Blackboard の使い方に関する理解を深めるワークショップや講演会を開催した。
- ・ELF の理念に関する講義や意見交換を実施した。

② 到達目標

- ・非常勤講師が Blackboard の仕組みを理解し、円滑に利用できるようになる。
- ・ELF の授業においてブレンド型学修（通常授業にオンラインを取り入れる学修）や自主的学修を積極的に取り入れることができるようになる。
- ・ELF 研究について最先端の知識を深める。
- ・ELF の理念について教員間で知識を深める。
- ・言語教育について教員間で知識を深める。

③ 活動内容

- ・非常勤講師対象 Blackboard ワークショップ（平成 27 年 4 月 20・21 日、9 月 28・29 日）
- ・ELF センターマクブライド・ポール助教、レイクセンリング・アンドリュウ助教による「ELF Speaking Activities ワークショップ」（平成 27 年 4 月 28・29 日）
- ・ELF センターマクブライド・ポール助教、ミリナー・ブレット助教、佐藤敬典助教、ディモスキ・ブラゴヤ助教による「ELF Assessment ワークショップ」（平成 27 年 6 月 22・23 日）
- ・ELF センター佐藤敬典助教による「ELF Pronunciation ワークショップ」（平成 27 年 10 月 27・28 日）
- ・ELF センター長小田眞幸教授による「Career Development と研究レクチャー」（平成 27 年 7 月 8 日）
- ・アテネオ デ マニラ大学（フィリピン）Isabel Martin 教授による「Periphery ELT: Myths about English in the Philippines レクチャー」（平成 27 年 7 月 6 日）
- ・コロンビア大学（アメリカ）John Fanselow 名誉教授 による「クラス観察参観授業に関するレクチャー」（平成 27 年 10 月 26 日）

⑤ 評価

ELF センターの教員は Blackboard のコンテンツマネジメントシステムを学内で最も活用多用している。非常勤講師も同様であり、ほぼ全ての ELF の授業でこのシステムを授業内の活動、評価、反転授業の目的で使用している。Blackboard に関する

ワークショップが効果的であることが見てとれる。ELF および言語意識に関するワークショップは教員の授業に対するアプローチに良い影響を与えてきた。ELF 所属教員対象のアンケート調査では、教員のほとんどが ELF の理念や概念をどのように授業に生かすかについて考慮していることが分かった。さらに、ELF センターが立ち上げた The Center for ELF Journal には多くの教員が研究論文を投稿し、研究に対しても積極的な態度が見られた。これらの教授アプローチの効果は学生の授業評価からも見ることができた。平成 26 年と 27 年の学生アンケートを比較したところ、平成 27 年の学生の方が ELF に対する理解がより深いという結果となり、自分たちに与える影響を理解しているようであった。

(3) ELF センター教員オリエンテーション

① 概要

- ・ ELF センター教員のオリエンテーションを実施した。

② 到達目標

- ・ ELF 研究について最先端の知識を深める。
- ・ ELF の理念について教員間で知識を深める。

③ 活動内容

- ・ 非常勤講師を含む全 ELF 教員のオリエンテーション（平成 28 年 3 月 28 日）

④ 評価

50 名が参加する予定。オリエンテーション後、専任教員間で実施についての改善点を協議する予定である。

(4) 学生による授業評価アンケート

① 概要

平成 27 年の春学期と秋学期の最後に、ELF センター独自のオンライン授業評価アンケートを実施した。学生は授業の中でスマートフォンまたはパソコンを使用してアンケートに回答するように指示された。アンケートは 33 項目あり、学生は教科書、教授方法、Blackboard システム、TOEIC、ELF に関する意識、チューター制度、多読などについて評価した。調査結果は教育プログラム策定の基礎資料となり、それぞれの教員にも自身の授業運営改善のために共有されている。

② 到達目標

評価アンケート調査の目標は学生の ELF プログラムや教員の教授アプローチに対する観点や評価を得ることにあつた。また、調査結果はそれぞれの教員に自分の教授法に対する学生の評価をフィードバックするという目的もあつた。

③ 活動内容

春学期授業評価アンケートは 1,879 名（全学生の 72%）から回答を得た。秋学期授業評価アンケートは 1,959 名（全学生の 96%）から回答を得た。

④ 評価

これらのアンケートのデータは **ELF** プログラムに対する評価として使用され、平成 28 年度の教育プログラムの構築のために使用されてきた。概ね学生は授業に対してとても満足しているという結果であった。それぞれの教員に学生からの評価を配付し、自身の指導の改善に役立ててもらった。

(5) 教員による授業内容アンケート

① 概要

平成 27 年の春学期と秋学期の最後に、**ELF** センター独自の教員対象のオンラインアンケートを実施した。アンケートは 29 項目あり、教員は教科書、教授方法、**Blackboard** システム、**TOEIC**、**ELF** に対する意識、センターから受けるサポートの質について評価した。調査結果は教育プログラムの計画や研究の目的で使用された。

② 到達目標

多様な教員のニーズにどのように応え、より効果的にサポートを行うかについての情報を収集することが目的であった。

③ 活動内容

春学期アンケートは 33 名 (69%) の教員から回答を得た。秋学期アンケートは 18 名 (38%) から回答を得た。

④ 評価

今年度はあまり多くの教員から回答を得ることはできなかった。**ELF** センターとしてどのように非常勤講師をサポートすれば良いかについて有意義な情報を得られる機会であるため、今後はより多くの回答を得られるようにアンケートへの協力を喚起したい。しかしながら今回のアンケートから得られた情報は教科書の選定に役立ち、教員のサポートをどのように効果的に行うかについて知ることができた。また、教員の **ELF** に対する理解が深まっていることがアンケートから知ることができた。

(6) ジャーナルの出版

① 概要

平成 28 年 3 月、2 人の査読者がそれぞれの投稿論文を審査する **The Center for ELF Journal** の第 2 号を発行した。

② 到達目標

ジャーナルの達成目標は以下の通りである。

- ・授業運営を改善する。

- ・自発的学修についてのアイデアを共有する場を設ける。
- ・教員間で高い学識を探究する。
- ・ELF に対する学識を共有する。
- ・ELF センター所属の教員に効果的な FD の場を設ける。

③ 活動内容

- ・The Center for ELF Journal 第 2 号 1 巻と 2 巻を発行した。
第 2 号 1 巻と 2 巻各 150 部を学内や学外に配付予定である。玉川大学教育学術情報図書館にも寄贈し、ELF センターの HP にも掲載している。さらに、教員のアカデミックポータル (academia.edu, REAP, Research Gate など) にも掲載している。

④ 評価

The Center for ELF Journal は教員に配付され、筆者自身も出版されたものに満足しているようであった。ELF センターはこのジャーナルをオンラインで閲覧できるように準備している。こうすることでより多くの研究者が我々の論文を手にとることができ、他の論文にも引用されるようになると考えられる。

4 昨年度（平成 26 年度）に提案された予定・課題の達成度について

今年度初めに提出された全ての予定・課題が実施された。センターは二つのジャーナルの出版に関わり、その中でも大きいものがセンター発刊のジャーナルであった。センターは、ELF ブレンド学修に焦点を当て、研究活動にも活発であった。表 1 は平成 27 年度の ELF 専任教員の研究活動をまとめたものである。44 の学会発表を実施し、29 本の論文を投稿・出版した。

表 1. 平成 27 年度の ELF 専任教員の研究活動

発表・出版	数
国際発表	18
国内発表	26
論文を投稿・出版	29

表2. 平成27年度のELF専任教員の論文を投稿・出版

査読の有無	論文・著書	著者
有	Toh, G. (2015). 'A Tale of Two Programs': Interrogating 'open(closed)ness' and 'cultural diversity' through critical observations of two Japanese University English language programs. <i>Policy Futures in Education</i> , 13(7), 900-916. doi:10.1177/1478210315578064	Glenn Toh
有	Leichsenring, A., McBride, P., Ogane, E., & Milliner, B. (2015). English as a lingua franca: Towards changing practices. In P. Clements, A. Krause, & H. Brown (Eds.), <i>JALT2014 Conference Proceedings</i> . Tokyo JALT, 378-385.	Andrew Leichsenring, Paul McBride, Ethel Ogane, & Brett Milliner
有	Milliner, B. (2015). Class blogging in the EFL classroom. <i>Frontiers of Language and Teaching</i> , 6, 1-11.	Brett Milliner
有	Dimoski, B. (2015). Student Nameplates for Classroom Management and Beyond. <i>The Center for ELF Journal</i> , 1(1), 83-95.	Blagoja Dimoski
有	Okada, T., Milliner, B., Ogane, E., Leichsenring, A., Imai, M., Cote, T., & McBride, P. (2015). A report for the center for English as a lingua franca (CELFL) for academic year 2014-2015. <i>The Center for ELF Journal</i> , 1(1), 9-24.	Tricia Okada, Brett Milliner, Ethel Ogane, Andrew Leichsenring, Mitsuko Imai, Travis Cote & Paul McBride
有	Leichsenring, A. (2015). A Teacher's Exploratory Inquiry of Language Awareness: Language Learner Perceptions from Oral Presentation. <i>The Center for ELF Journal</i> , 1(1), 41-52.	Andrew Leichsenring
無	Cote, T., & Milliner, B. (2015). A report on the micro-conference on tourism English education. <i>The Journal of Tamagawa University College of Tourism and Hospitality</i> ,	Travis Cote & Brett Milliner

	2, 93-97.	
無	Toh, G. (2015). Dialogizing ‘the known’: experience of English teaching in Japan through an essay of derivatives as a dominant motif. In D. J. Rivers (Ed.), <i>Resistance to the known: counter-conduct in language education</i> (pp. 144-167). London: Palgrave-Macmillan.	Glenn Toh
無	Toh, G. (2015). Teaching English for academic purposes in a Japanese setting: problematizing and dialogizing essentialist constructions of language pedagogy, culture and identity. In M. A. Peters & T. Besley (Eds.), <i>Paulo Freire: the global legacy</i> (pp. 335-350). New York: Peter Lang.	Glenn Toh
有	Toh, G. (2015). Countering essentialist conceptualizations of content knowledge in a Japanese CLIL situation. <i>ELTWorldOnline.com, Special Issue on CLIL</i> , 1-16. Retrieved from http://blog.nus.edu.sg/eltwo/2015/04/27/countering-essentialist-conceptualizations-of-content-knowledge-in-a-japanese-clil-situation/	Glenn Toh
有	Yujobo, Y.J. (2015). Multiple Assessment Strategies and Rubrics for the 4Cs of 21st Century Skills. The Asian Conference on Language Learning. <i>The International Academic Forum</i> . p.273-284.	Yuri Jody Yujobo
有	Milliner, B., & Flowers, S. (2015). Form technology for language teachers: How do you like your monkey? <i>The Language Teacher</i> , 39(3), 24-27. Retrieved from http://jalt-publications.org/tlt/departments/tlt-wired/articles/4475-form-technology-language-teachers-how-do-you-your-monkey	Brett Milliner & Simeon Flowers (Tokai University)
有	Sato, T., & Ikeda, N. (2015). Test-taker perception of what test items measure: a potential impact of face validity on student learning. <i>Language Testing in Asia</i> , 5(10).	Takanori Sato & Naoki Ikeda (University of

	doi:10.1186/s40468-015-0019-z	Melbourne)
有	Milliner, B. (2015). Using smartphones in the language classroom: Making the most of core smartphone apps. <i>Accents Asia</i> , 8(1), 9-11.	Brett Milliner
有	Toh, G. (2015). English in Japan: indecisions, inequalities, and practices of relocalization. In R. Tupas (Ed.), <i>Unequal Englishes: The politics of Englishes today</i> (pp. 111-129). London: Palgrave MacMillan.	Glenn Toh
有	Cote, T., & Milliner, B. (2015). Implementing and managing an online extensive reading program: Students performance and perceptions. <i>The IALLT Journal</i> , 45(1), 70-90.	Travis Cote & Brett Milliner
無	Okada, T., Ogane, E., Milliner, B., Yujobo, Y. J., & Sato, T. (2015). Assessing ELF proficiency in project-based learning. <i>The 62nd TEFLIN International Conference: Proceedings for Teaching and Assessing L2 Learners in the 21st Century</i> (pp. 202-210). Denpasar: Udayana University Press.	Tricia Okada, Ethel Ogane, Brett Milliner, Yuri Jody Yujobo & Takanori Sato
無	Oda, M. (2015). The Discourses of Proper 'Assessments' in ELT: How Can Teachers Deal with Them Critically? In Hamied, F. A. et al. (Eds.) <i>Developing Indigenous Models of English Language Teaching and Assessment</i> (pp.191-202). Denpasar: Udayana University Press.	Masaki Oda
有	Milliner, B., & Cote, T. (2015). Mobile-based extensive reading: An investigation into reluctant readers. <i>International Journal of Computer Assisted Language Learning and Teaching</i> , 5(4), 1-15. doi:10.4018/IJCALLT.2015100101	Brett Milliner & Travis Cote
無	Milliner, B., & Cote, T. (2015). Comparing two approaches to extensive reading (ER) management in the TAMAGAWA ELF program: M-Reader and Xreading. 玉川大学の教師教育リサーチセンター 年報 第5号, 115, 123.	Brett Milliner & Travis Cote

有	Milliner, B., & Cote, T. (2015). One year of extensive reading on mobile devices: engagement and impressions. In F. Helm, L. Bradley, M. Guarda, & S. Thouësny (Eds.), <i>Critical CALL – Proceedings of the 2015 EUROCALL Conference, Padova, Italy</i> (pp.404-409). Dublin: Research-publishing. doi:10.14705/rpnet.2015.000366	Brett Milliner & Travis Cote
有	Cote, T., & Milliner, B. (2015). Training ELF teachers to create a blended learning environment: encouraging CMS adoption and implementation. In F. Helm, L. Bradley, M. Guarda, & S. Thouësny (Eds.), <i>Critical CALL – Proceedings of the 2015 EUROCALL Conference, Padova, Italy</i> (pp. 158-163). Dublin: Research-publishing. doi:10.14705/rpnet.2015.000366	Travis Cote & Brett Milliner
有	Yujobo, Y. J. (2015). Practical methods in measuring 21st century skills and global competency. <i>The Journal of Saitama City Educators</i> , 5(5), 9-14.	Yuri Jody Yujobo
有	Oda, M. (2015). University English Language Program in Transition: EFL to ELF, then? <i>Waseda working papers in ELF 2015-06</i> , 4, 199-208.	Masaki Oda
有	Milliner, B. (2016). Implementing a mobile-based extensive reading component: A report on student engagement and learning outcomes. In L. Yoffe & M. Iguchi (Eds.), <i>JACET Summer Seminar 2015 Proceedings No. 14</i> (pp. 41-49). Tokyo: The Japan Association of College English Teachers.	Brett Milliner
有	Dimoski, B. (2016). A proactive ELF-aware approach to listening comprehension. <i>The Center for ELF Journal</i> , 2(2), 24-38.	Blagoja Dimoski
有	Milliner, B., & Dimoski, B. (2016). A report on faculty development and research inside the Center for English as a Lingua Franca. <i>The Center for ELF Journal</i> , 2(1), 49-67.	Brett Milliner & Blagoja Dimoski
有	Yujobo, Y. J., Ogane, E., Okada, T., Milliner, B., Sato, T.,	Yuri Jody

	Dimoski, B. (2016). Efficacy of promoting awareness in ELF communicative strategies through PBL. <i>The Center for ELF Journal</i> , 2(1), 1-18.	Yujobo, Ethel Ogane, Tricia Okada, Brett Milliner, Takanori Sato, Blagoja Dimoski
無	小田眞幸 (2015). Book Review 「日本人と英語」の社会学 寺沢拓敬著『新英語教育』, 552号, p. 44.	Masaki Oda

5 今後（平成 28 年度以降）の予定・課題について

平成 28 年度には、ELF の授業規模がさらに拡大し、2,500 人の学生の英語教育を担うことになる。また、10 人程度の新しい教員を迎え入れることになり、さらにさまざまな国籍の専任教員と非常勤講師で ELF センターが構成されることになる。FD 活動はこのことを考慮した試みが必要であると認識している。我々は以下の項目の実施によって ELF プログラムをより効果的に運営するよう努めたい。

1. 効果的な教員オリエンテーション
2. Blackboard と e-learning のワークショップ
3. ELF の概念を生かした教授法に関する講義
4. 学会と共同で実施される英語教育に関する研究会
5. 学生や教員による授業評価アンケート

Ⅱ 教員研修

新任教員研修会

平成28年度採用の新任教員(助教以上)に対し、大学FD委員会の主催により、関係各部の協力・連携のもと研修会を実施した。この研修会は、今年度で14回目の開催となる。参加者14名で、2日間の日程で行われた。

日 時:平成28年3月17日(木) 10:00～17:20 *18:00より、懇親会開催
3月18日(金) 10:00～15:30

場 所:大学教育棟2014 519番教室

対 象:平成28年度採用教員(助教以上)

研修目的:玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を理解する。

専任教員としての業務に必要な知識を得る。

到達目標:玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を他者に説明することができるようになる。

専任教員としての業務を理解し、遂行することができるようになる。

(1) 研修プログラム内容

1日目:3月17日(木)

10:00	開始/研修説明	教学部教育学修支援課
10:05	開催にあたって	小原 芳明 理事長
10:25	新任教員自己紹介	教学部教育学修支援課
10:40	講演「玉川大学の教育理念」	菊地 重雄 高等教育担当理事
12:00	昼食	
13:00	キャンパス・ツアー	人事部人事課
14:20	休憩	
14:30	本学のICTを活用した教育 玉川大学共通アカウントについて	教学部教育学修支援課
15:50	Notes システムと Notes 掲示板の活用	総務部情報基盤システム課
16:10	玉川学園の個人情報保護方針について	総務部総務課
16:40	質疑応答/翌日の予定説明	教学部教育学修支援課
16:50	キャンパス・カード用写真撮影	教育企画部広報課
17:20	終了(一時解散)	
18:00	懇親会	大学FD委員会
20:00	修了	

2日目：3月18日（金）

10:00	本日の研修説明	教育学部教育学修支援課
10:10	教学事項 ・玉川学園の組織機構／玉川大学の概要 ・各種運営担当、担任業務、教務指導・学生指導 ・年間授業計画 ・学則・規程等 （授業、休講、補講、試験、成績等） ・教学事務手続要領（研究費、出張（国内外）等） ・ラーニング・コモンズ見学	教育学部 教務課 授業運営課 学務課 教育学修支援課
11:30	生活上の学生指導について	青木 敦男 学生センター長
12:00	昼食	
13:00	講演 「これからの大学に必要なこと」	稲葉 興己 教育学部長
14:40	研究者情報システムについて	教育学部教務課
15:00	質疑応答／まとめ	
15:30	終了	

(2) 配付資料・参考資料

資料No.	資料	担当部署
なし	平成 28 年度新任教員研修会<研修プログラム>	人事部人事課
	平成 28 年度新任教員研修会 出席者一覧	
	大学教員の勤務について	
	WELBOX 会員の皆様へ	
	玉川学園 玉川大学 総合パンフレット 2015	教育企画部広報課
	小原國芳『全人教育論』	玉川大学出版部
	玉川学園編『愛吟集』	
	「全人」2016年3月号	
1	玉川大学の教育—高等教育改革の文脈を踏まえて—	菊池 重雄 高等教育担当理事
2	玉川学園案内図(キャンパスツアールート)	人事部人事課
	平成 28 年度新任教員研修会 キャンパス・ツアー資料	
3	ICTを活用した教育	教育学部教育学修支援課
	1-1 新規 学内 LAN 利用アカウント申請書	
	5-1 学内 LAN 接続機器登録申請書	
4	コンプライアンス方針について	総務部総務課
	学校法人玉川学園 コンプライアンステキストブック 2012.4	
	学校法人玉川学園 個人情報保護テキストブック 2015.4	
	写「文部科学省所轄事業分野における 個人情報保護に関するガイドライン」(冊子)	

資料No.	資料	担当部署
	よくわかる個人情報保護のしくみ《改訂版》	
	個人情報の保護に関する法律	
	研修受講報告書	
5	学校法人玉川学園組織機構 玉川大学の概要 担当業務等について	教学部教務課
	新任教員研修会 教務事項	教学部授業運営課
	平成 28 年度 個人研究費説明会について	教学部学務課
	ご着任にあたって	
6	教員ハンドブック(専任教員用)(抜粋)	学生センター
7	これからの大学に必要なこと	稲葉 興己 教学部長
8	資料 1 研究者情報システム ReaP 教員用マニュアル(説明会用抜粋)	教学部教務課
	資料 2 研究者情報システム ReaP 管理者・教員共通マニュアル(説明会用抜粋)	

(3) 実施の成果

本学における教育について、昨年度に引き続き、高等教育のコンテキストから参加者に理解を促すため、2 つの講演「玉川大学の教育理念」そして「これからの大学に必要なこと」を設けた。これにより、専任教員としての業務に必要な、教学事項や学生指導、個人情報保護に関する事項等と合わせ、大学やそこで働く教員に期待されていることが何かを明確に伝えることができた。受講者から提出された研修受講報告書では、研修内容、資料、説明に対して全員が「とても充実していた」または「充実していた」と回答している。

研修会の運営にあたっては、全体を通して参加者が参加しやすく過ごしやすい空間・環境を整えるように心がけた。

今回の研修の良かった点についてのコメントは、次のとおりである：

- ① これから教育活動に当たっていく上でとても参考になる点が多かったです。
- ② 全体レジメに加え、別途資料があり良かった。
- ③ 資料が充実しているので、後日確認するのに役立てられそうである。
- ④ 全体像を理解することができた。
- ⑤ 個人情報保護法についての理解が深まった。
- ⑥ 大学の現状がよくわかりました。
- ⑦ 同期の先生とお会いできたこと、また大学の教育方針等を知ることができてよかったです。
- ⑧ 大学での個人情報保護の重要性について理解できました。
- ⑨ 具体例を含め説明下さったので、解りやすかったです。
- ⑩ 情報を扱うご本人の顔がわかった。出会いが充実していた。
- ⑪ 大学でつとめるにあたり理解が深まった。
- ⑫ ひと通りの知識を得、心構えがもてた。

- ⑬ とても役立つ **information** を学ぶことができました。いちばんよかったのが大学の **education policy** をきけたことです。

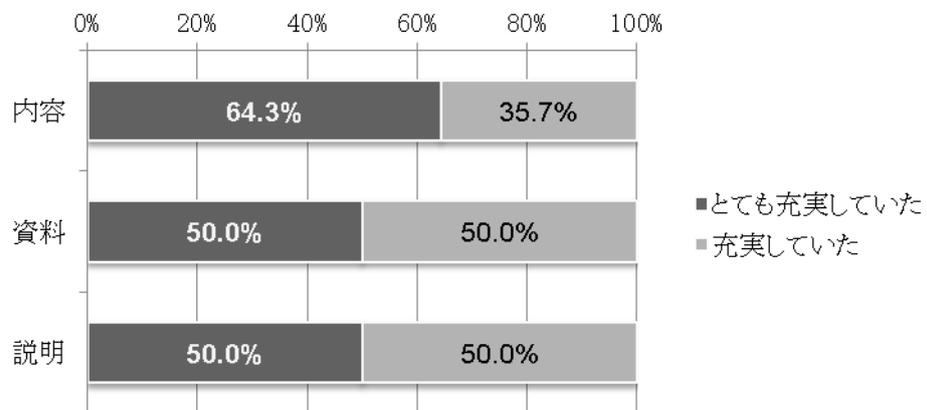
その上で、改善希望として、次のようなコメントがあった：

- ① 説明が若干文系寄りなので、もう少し工学系についても説明が含まれると助かります。
- ② 担当の先生からのご連絡のタイミングもあり、もう少し早いタイミングで開催されていればシラバスの作成など、より良くできたと思います。
- ③ 日程的に3月末に2日間、現職場をあけることが大変でした。
- ④ 資料の往復が多かったので、一見してわかると良い。
- ⑤ 時間配分
- ⑥ 個別の事情における質問の時間ももう少しほしかった。

また、感想として、次のようなコメントがあった：

- ① 2日間濃い内容の講義等ありがとうございました。
- ② 事前準備が大切だったと思います。ありがとうございました。
- ③ とても丁寧にご説明頂きましたので、よく理解できました。資料も充実していたので、今後もよく熟読し、理解を深めたい。
- ④ 大変わかりやすかったです。
- ⑤ 機会をお作りいただき、ありがとうございました。

＜報告書データ集計 —内容、資料、説明について—＞



これらの意見から、本研修会の目的・到達目標は達成できていると評価できる。同時に、本研修会が新任教員との教育・研究活動に向けた良好な関係構築に役立つものであったと考えられる。

次年度の開催に向け、引き続き、研修内容や提示資料の工夫と質の向上に努めたい。

以上

Ⅲ ユニバーシティ・スタンダード科目の「授業評価アンケート」

1. アンケート実施概要

(1) 概要

平成 27 年度春・秋学期において、それぞれ最終授業にて実施した。対象科目はユニバーシティ・スタンダード（以下、US）科目である。

また、平成 27 年度秋学期より内容を一部改訂した。社会的状況の変化や大学改革の流れの中で、学生の主体的・能動的な学修が重要視されていることから、学生自身の授業外学修状況を確認し、今後の授業改善に役立てることを目的とした改訂である。

春学期：US 科目（但し、実験実習実技科目、教職関連科目群、資格関連科目群、工学部開講の US 科目、その他一部の科目は除く）

秋学期：US 科目（但し、実験実習実技科目、教職関連科目群、資格関連科目群、工学部開講の US 科目、その他一部の科目は除く）

実施担当者数、実施開講クラス数及び回答学生数は次のとおりであった。

実施担当者数：春学期＝220 名／232 名（94.8％）

秋学期＝206 名／216 名（95.4％）

実施開講クラス数：春学期＝362 クラス／379 クラス（95.5％）

秋学期＝338 クラス／356 クラス（94.9％）

回答学生数：春学期＝11,094 名／13,303 名（83.4％）

秋学期＝10,750 名／12,971 名（82.9％）

(2) 実施時期

春学期：7 月 20 日（月）～7 月 24 日（金）

秋学期：1 月 18 日（月）～1 月 22 日（金）

※春・秋学期ともに一部の科目については補講・試験期間中に実施。

(3) 実施方法

春学期・秋学期ともに、科目担当者がアンケート用紙を配付、実施した。回答用紙の回収についてはクラスの代表（科目担当者が指名）が回収し、最寄りの事務室に提出することとした。

(4) 調査用紙（p.114～117 参照）

2. 集計結果及び公表（p.82～109 参照）

集計は前年度及び今後のデータの比較分析を考慮し、クラス別及び次の分類別に行った。

US 科目全体、玉川教育・FYE 科目群「一年次セミナー101」、「一年次セミナー102」、人文科学科目群、社会科学科目群、自然科学科目群、学際科目群、言語表現科目群

また、集計結果は、クラス別集計については科目担当者にのみフィードバックし、上記 8 分類についてはその平均値を学内のみを対象にホームページで公表している。

平成27年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目全体

回答数(全体): 11094

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.5	21
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.3	79

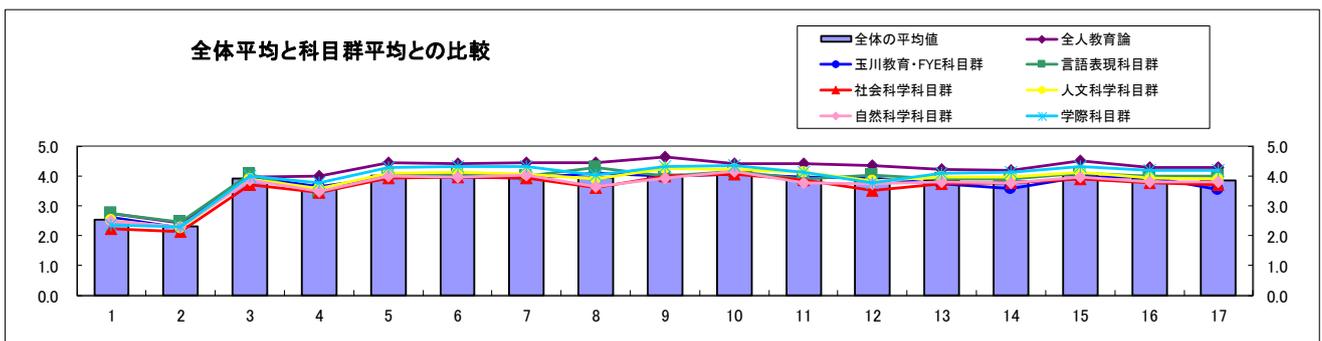
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.9	6
	4 シラバスは受講に役立った。	3.5	25

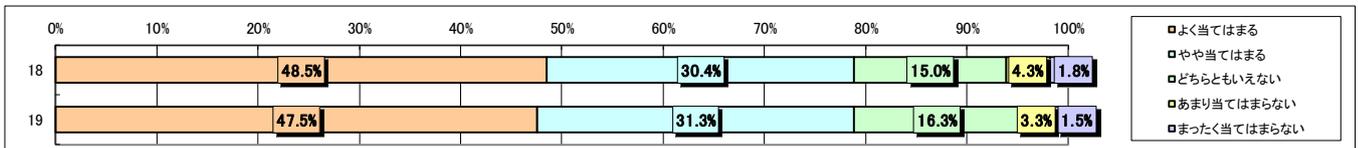
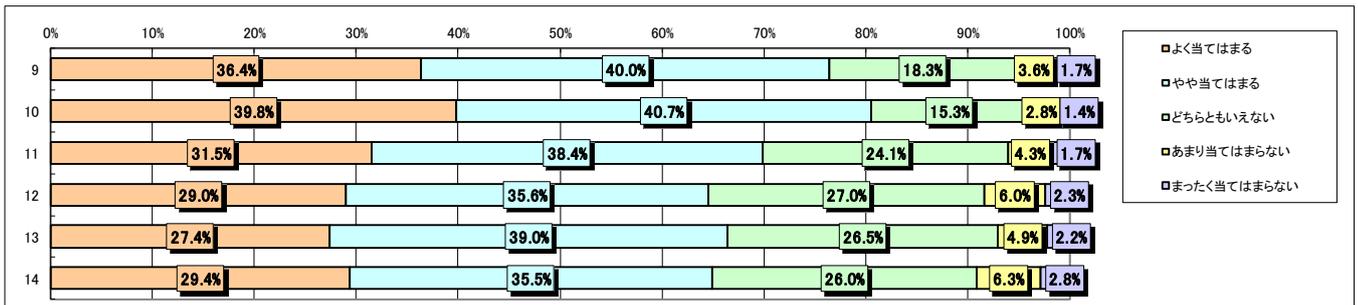
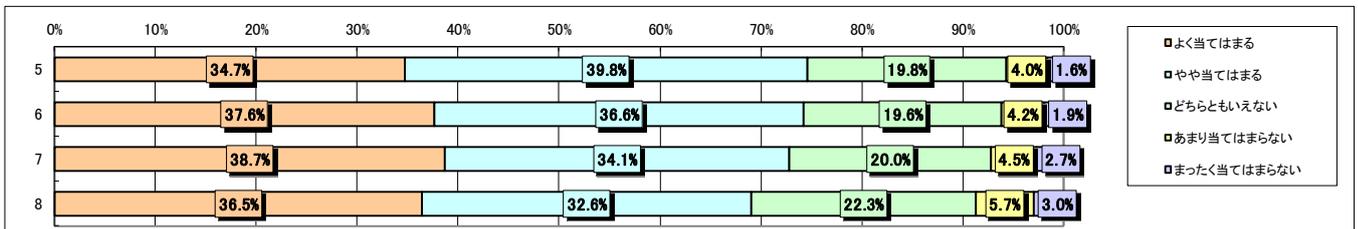
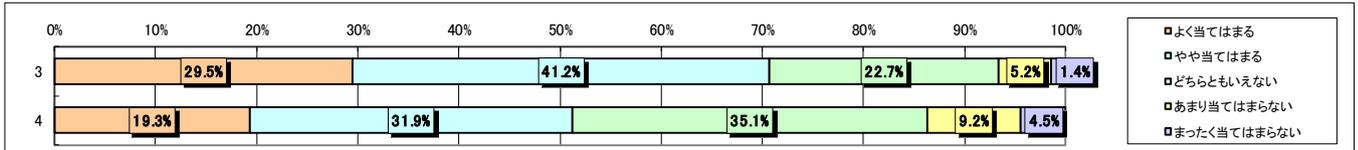
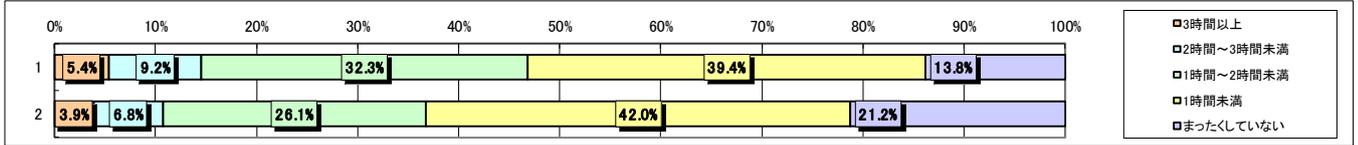
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	20
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	23
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	17
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	9

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	10
	10 基本的知識が得られた。	4.1	12
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	16
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	23
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	25
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	27

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	16
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	13
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	36

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	36
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.2	33





◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

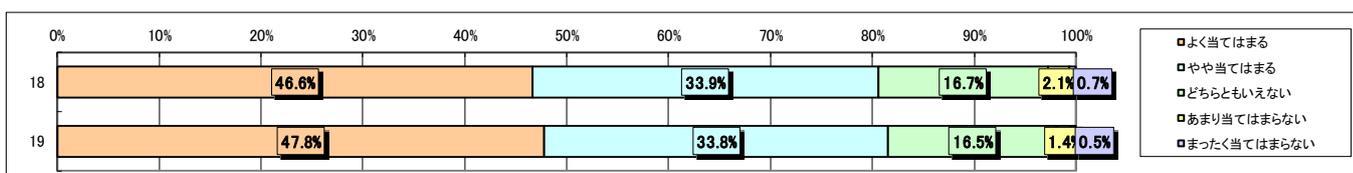
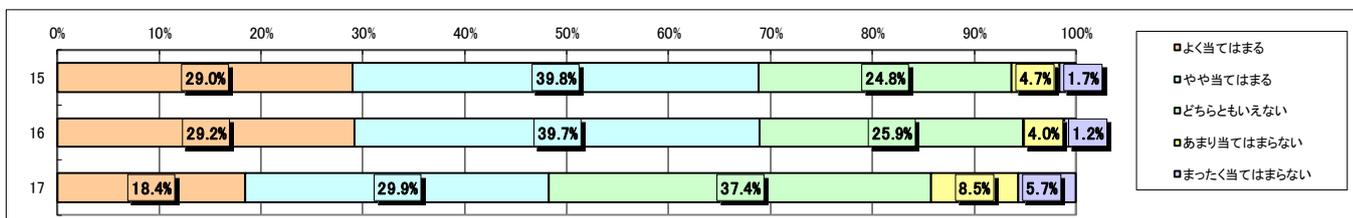
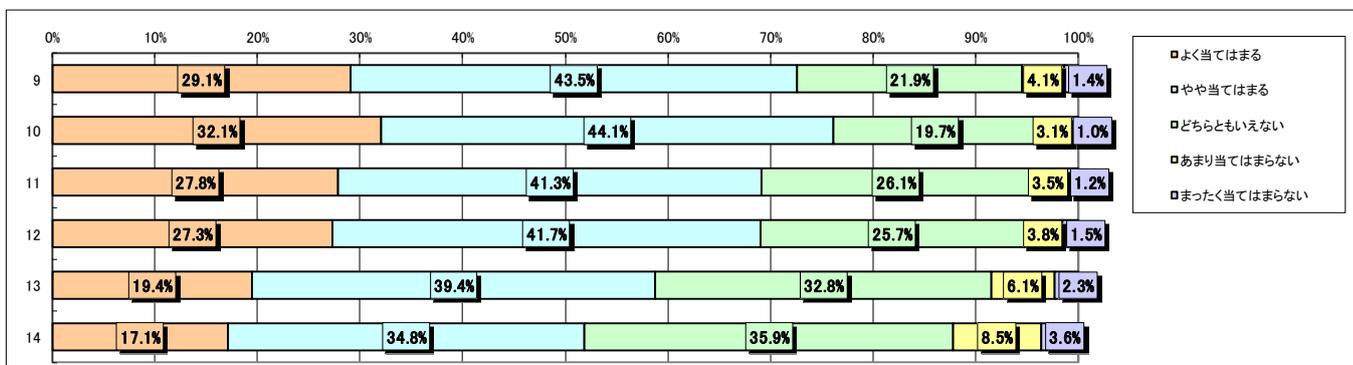
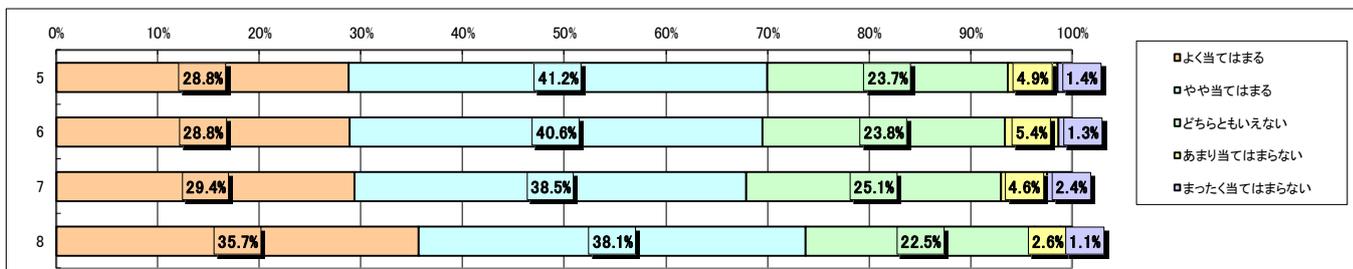
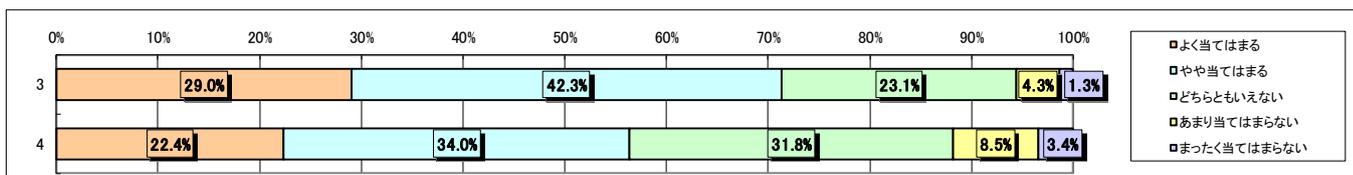
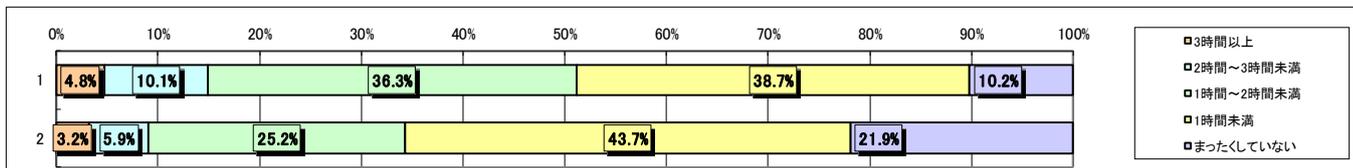
平成27年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 玉川教育・FYE科目群 一年次セミナー 101

回答数(全体): 1683

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.6	3
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.2	14
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.9	2
	4 シラバスは受講に役立った。	3.6	3
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	3.9	1
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	3.9	5
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.9	5
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.0	1
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	3.9	2
	10 基本的知識が得られた。	4.0	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	2
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	5
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.7	1
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.5	5
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	3.9	1
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	2
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.5	6
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	2
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.3	1



平成27年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 人文科学科目群

回答数(全体): 2178

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.5	5
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.3	20

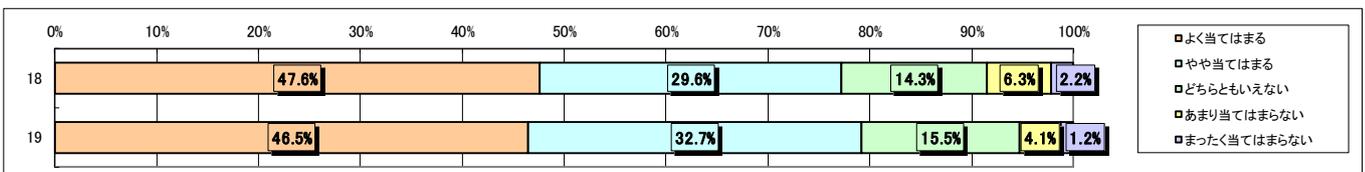
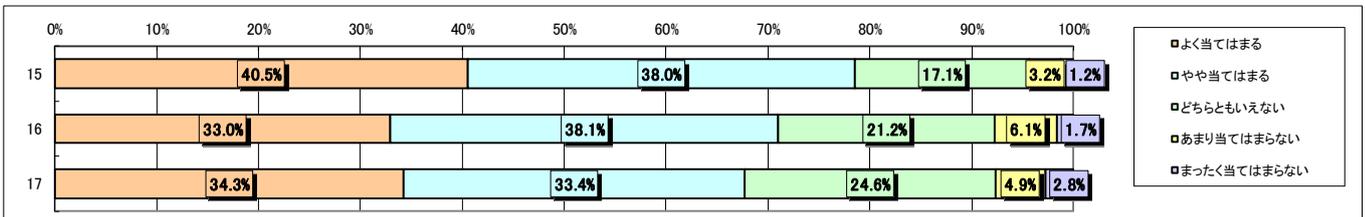
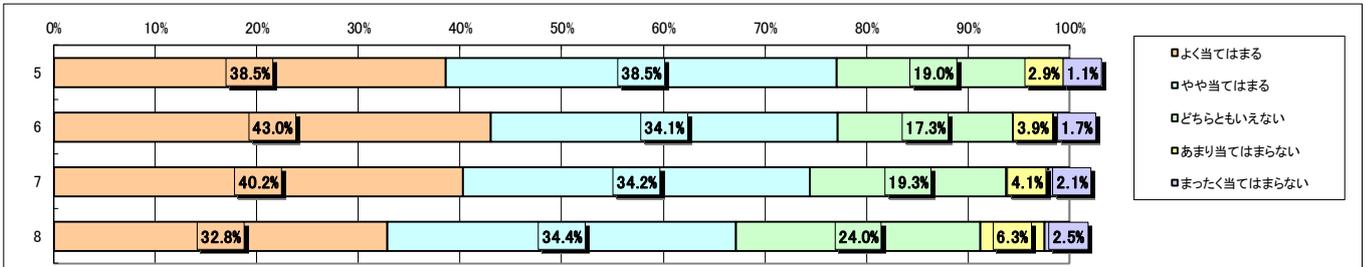
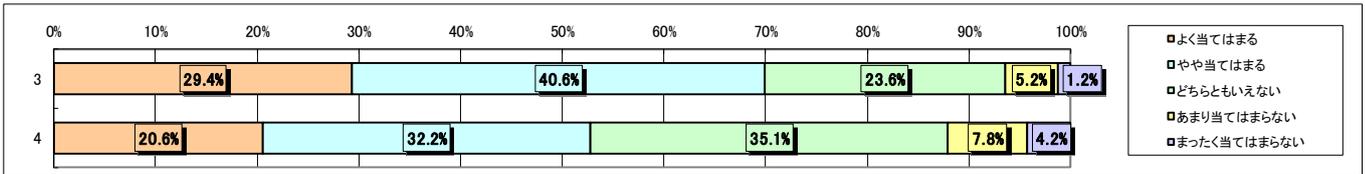
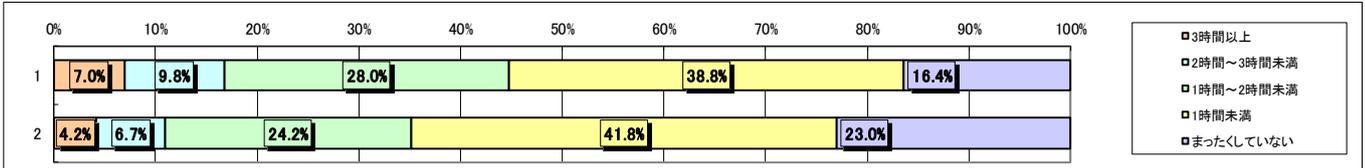
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.9	1
	4 シラバスは受講に役立った。	3.6	4

分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	4
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	5
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.1	4
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	2

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.3	1
	10 基本的知識が得られた。	4.2	4
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.1	3
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	5
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.0	4
	14 学問的興味をかきたてられた。	4.0	6

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	1
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	0
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	4

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	7
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.2	5



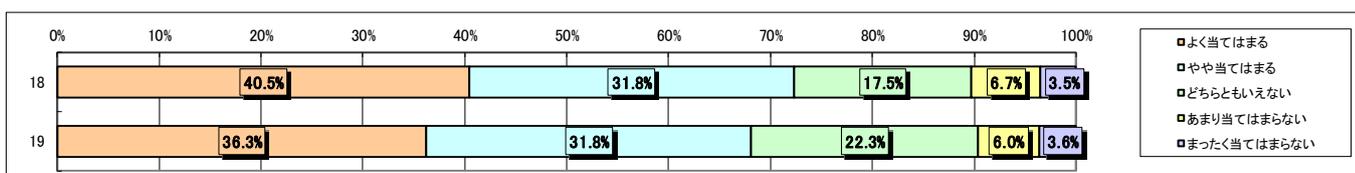
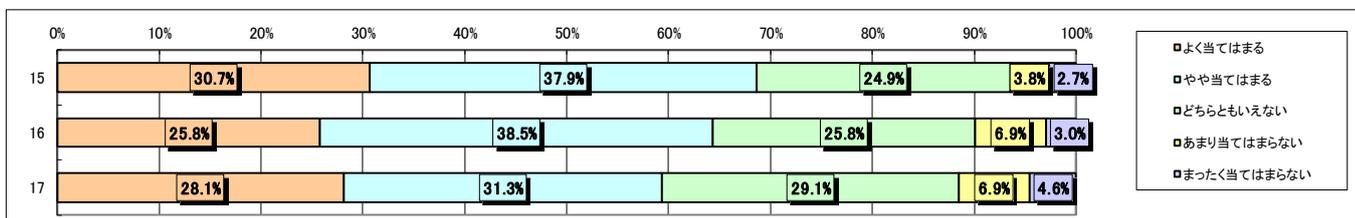
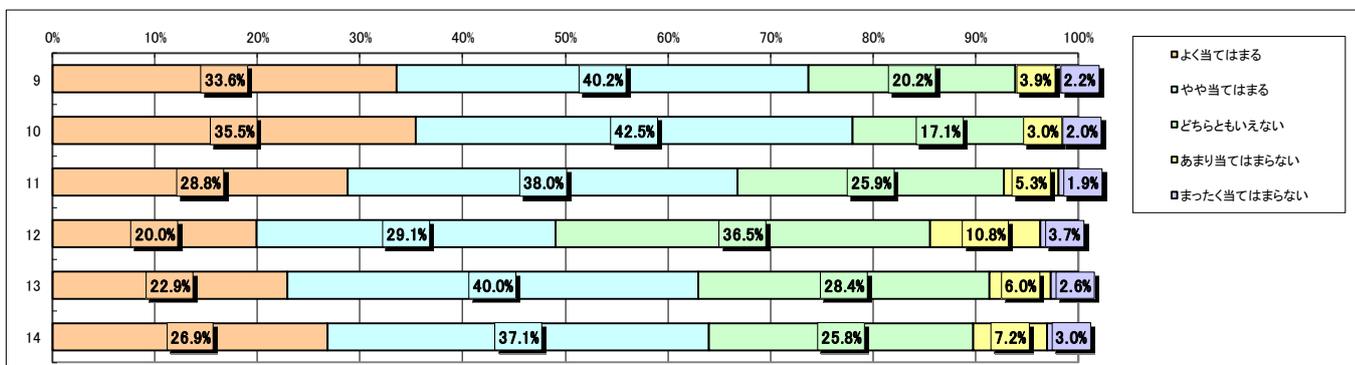
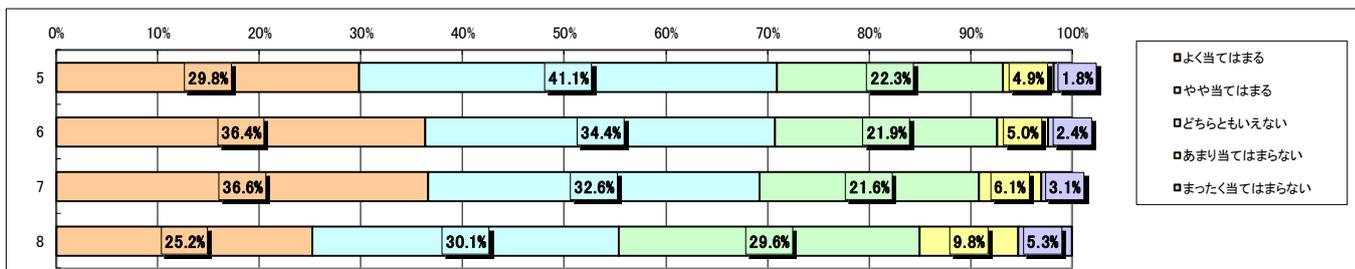
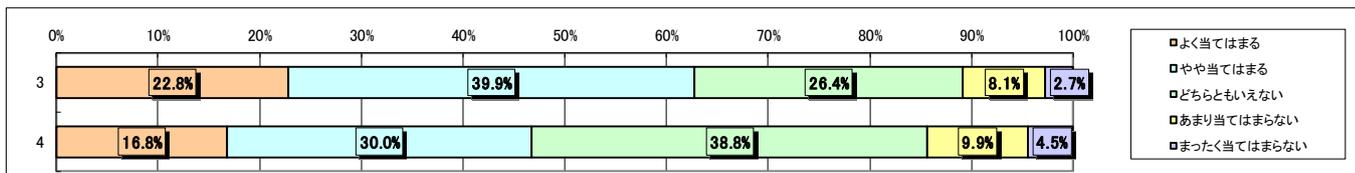
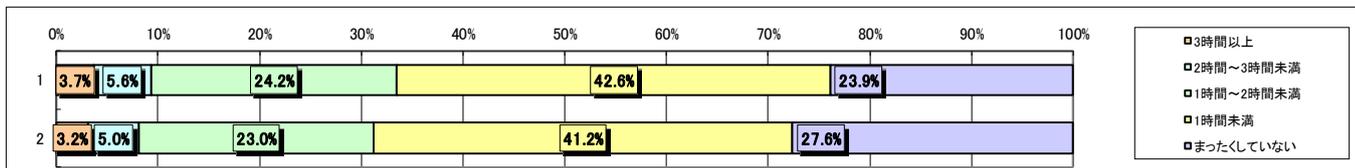
平成27年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 社会科学科目群

回答数(全体): 1688

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.2	5
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.1	10
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.7	2
	4 シラバスは受講に役立った。	3.4	4
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	3.9	5
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	2
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.9	3
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.6	0
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	2
	10 基本的知識が得られた。	4.1	4
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	5
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.5	5
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.7	7
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	3
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	3.9	4
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.8	4
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.7	9
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.0	10
	19 この授業の受講者数は適切であった。	3.9	11



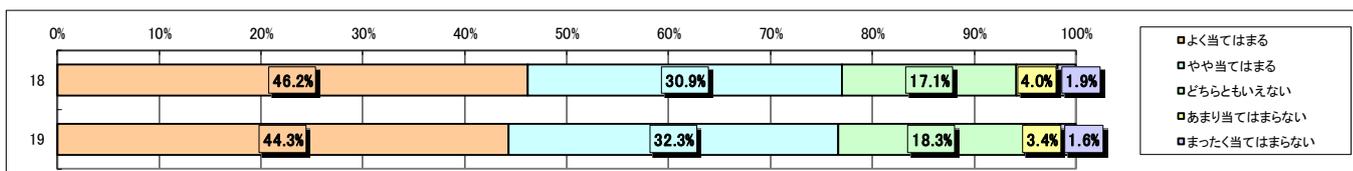
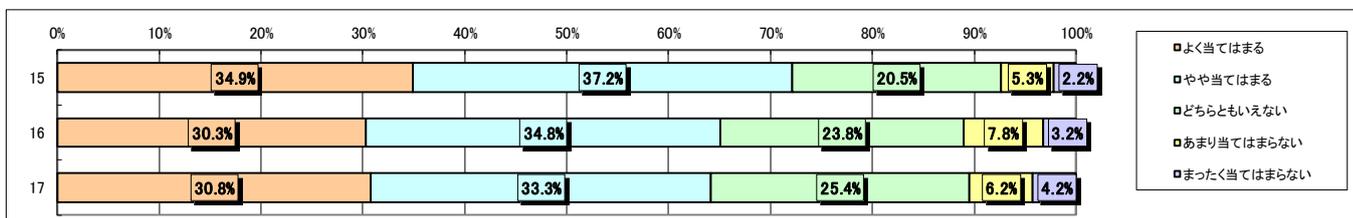
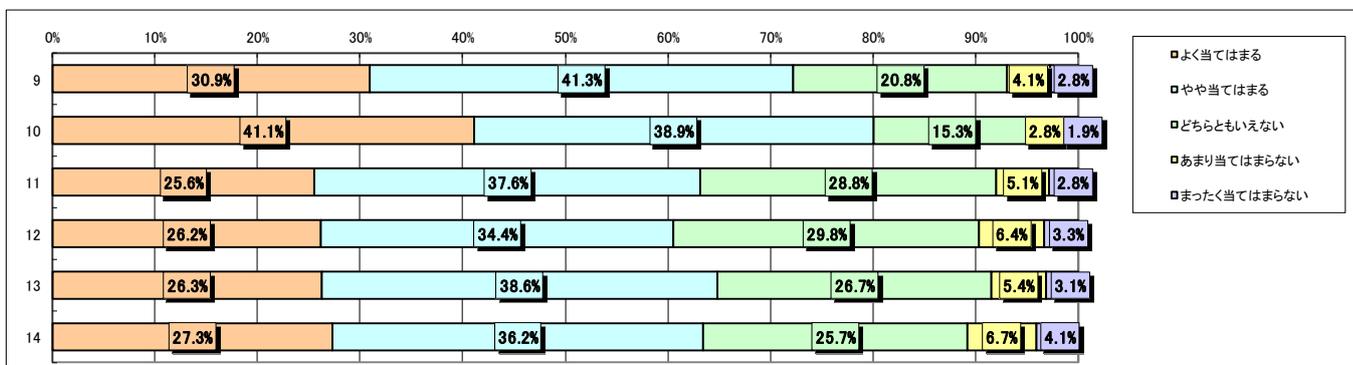
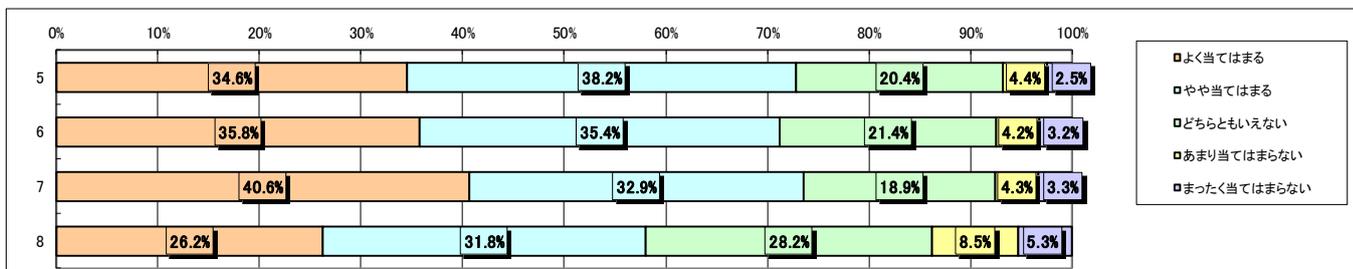
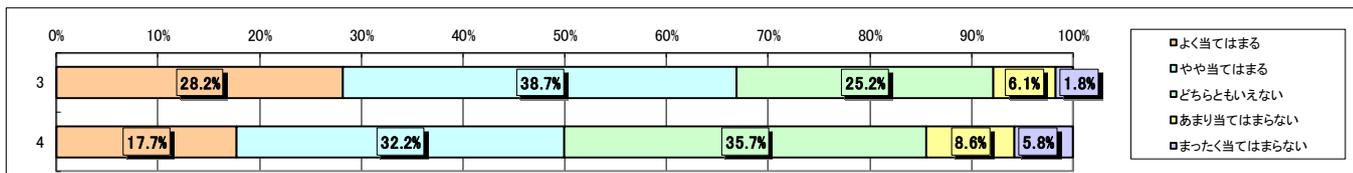
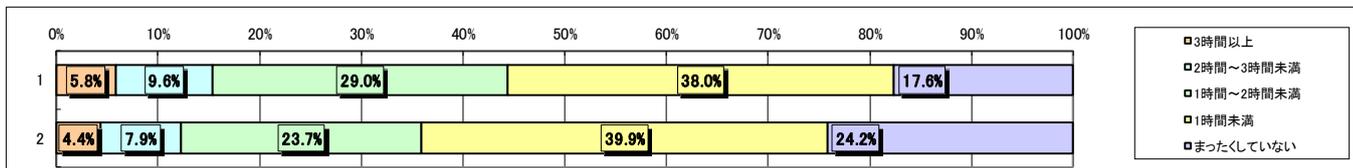
平成27年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 自然科学科目群

回答数(全体): 2042

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.5	1
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.3	11
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.9	1
	4 シラバスは受講に役立った。	3.5	3
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	6
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	5
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	2
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.7	1
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	3.9	2
	10 基本的知識が得られた。	4.1	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.8	1
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.7	3
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	6
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	7
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	4
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.8	2
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	7
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	4
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.1	4



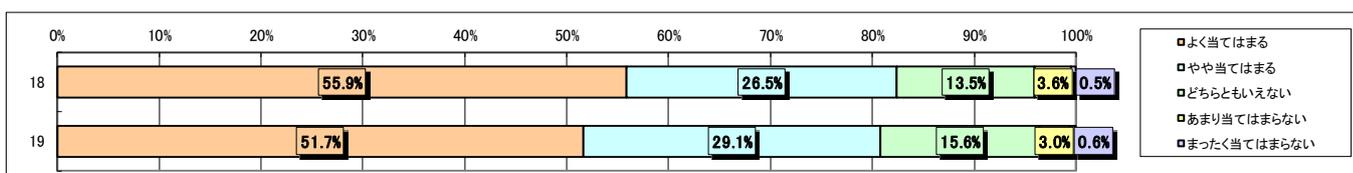
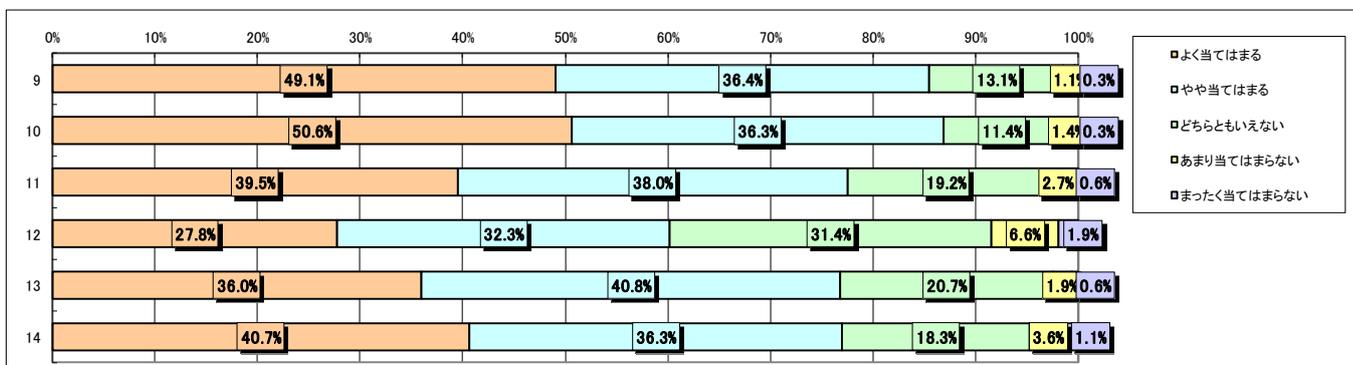
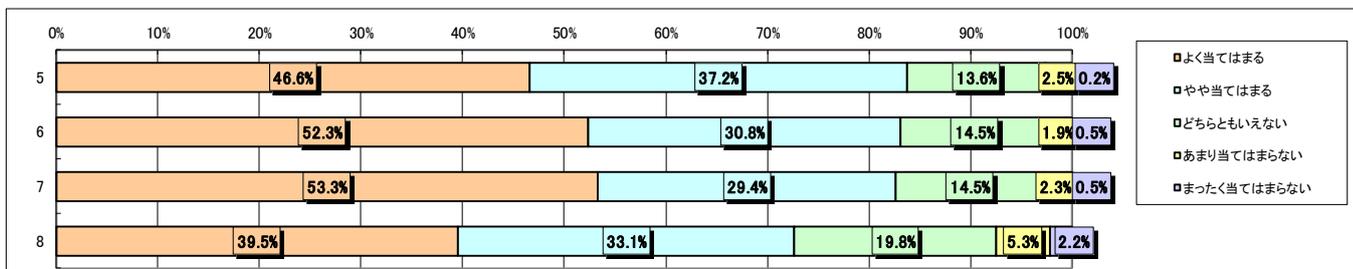
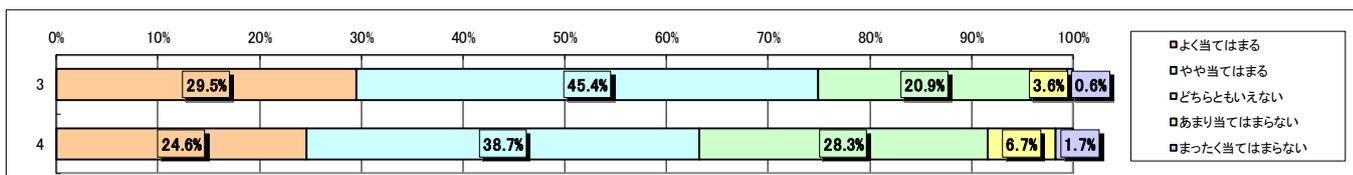
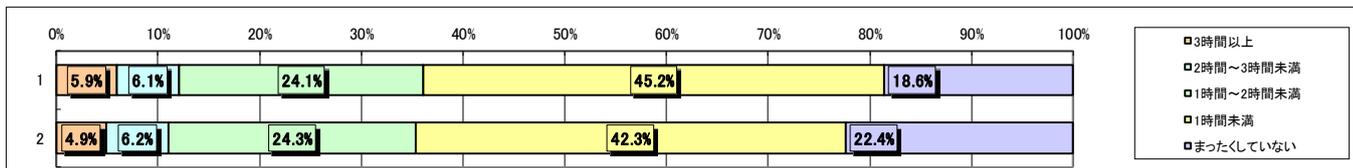
平成27年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 学際科目群

回答数(全体): 641

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.4	2
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.3	7
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	4.0	0
	4 シラバスは受講に役立った。	3.8	2
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.3	1
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.3	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.3	1
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.0	1
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.3	1
	10 基本的知識が得られた。	4.4	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.1	1
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	1
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.1	2
	14 学問的興味をかきたてられた。	4.1	2
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.3	1
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.2	1
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.2	2
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	6
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.3	6



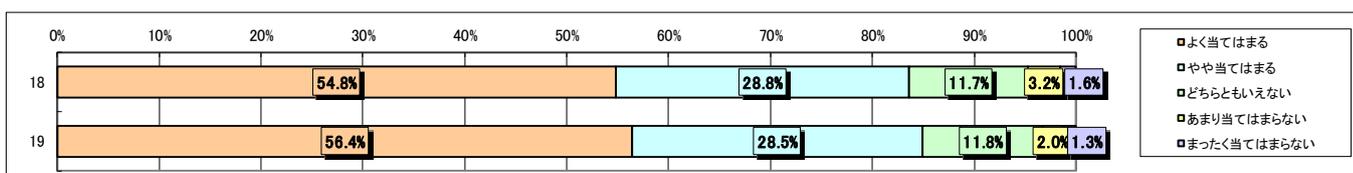
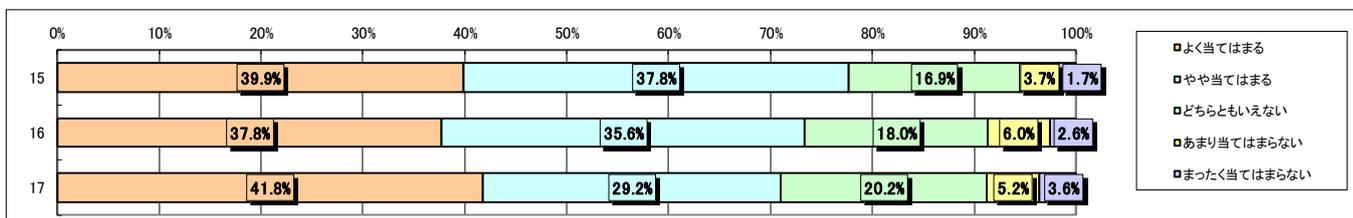
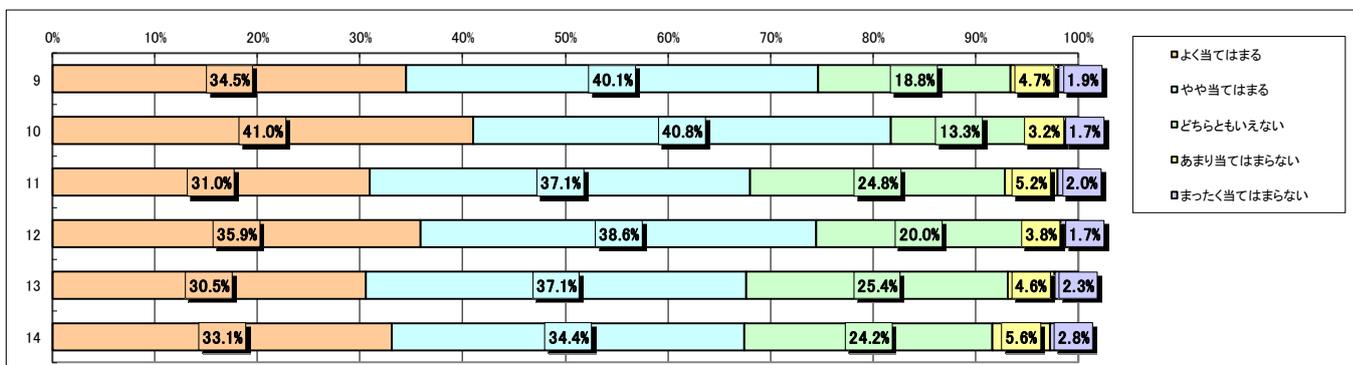
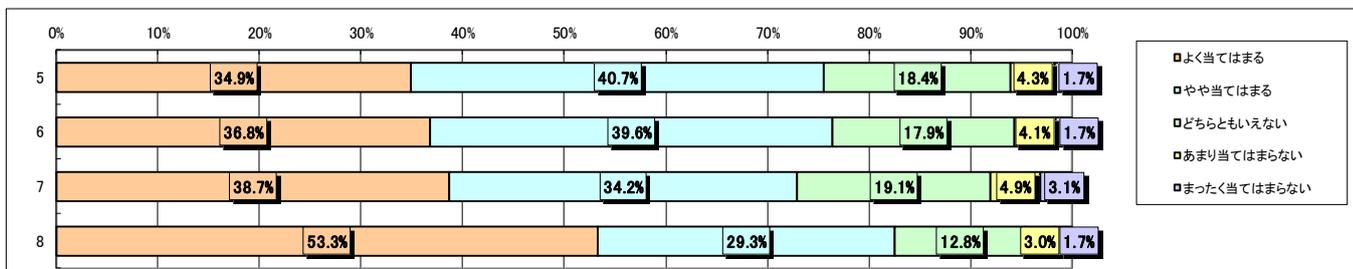
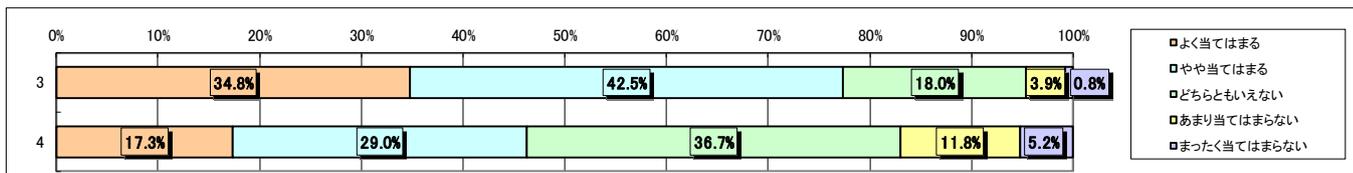
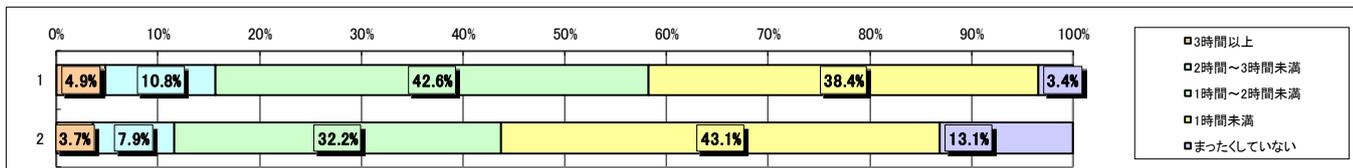
平成27年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 言語表現科目群

回答数(全体): 2640

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.8	4
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.5	14
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	4.1	0
	4 シラバスは受講に役立った。	3.4	8
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	3
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	5
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	2
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.3	4
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	2
	10 基本的知識が得られた。	4.2	3
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	4
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.0	3
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	4
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	3
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	4
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	3
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.0	7
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	5
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.4	4



平成27年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目全体

回答数(全体): 10742

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.0	176

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.9	5
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.5	27
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	

分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	22
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	12
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	18
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	11

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	6
	10 基本的知識が得られた。	4.1	7
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	20
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	21
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	23
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	27

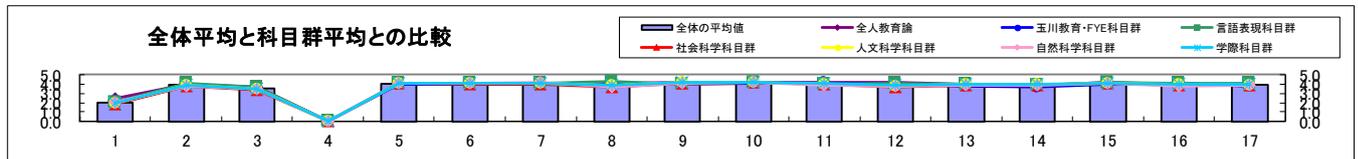
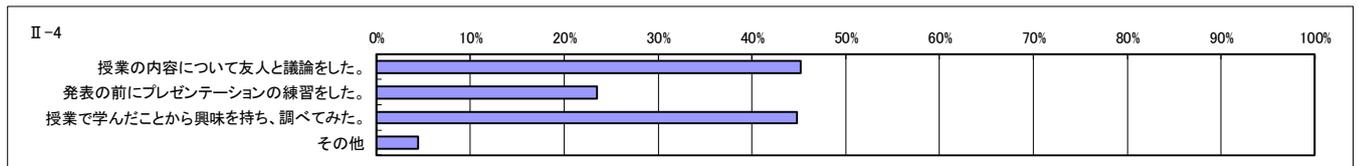
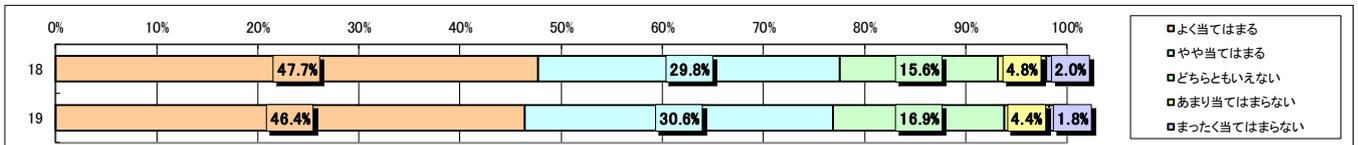
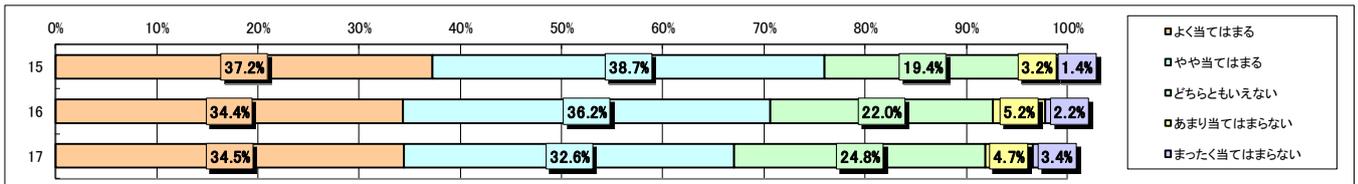
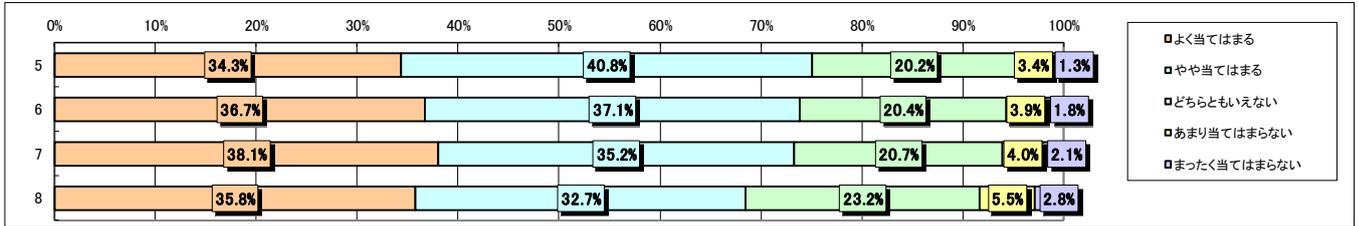
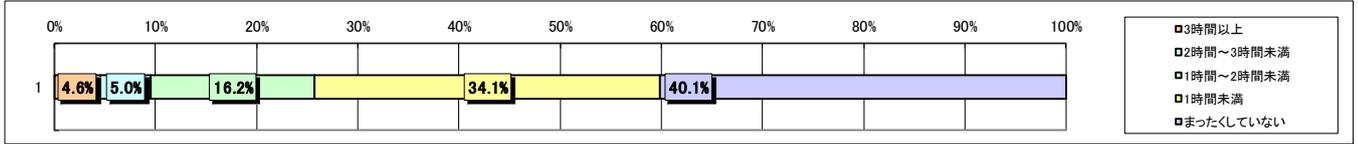
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	13
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	11
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	17

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	34
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.2	32

集計・分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	45.2%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	23.5%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	44.8%
	その他	4.4%

◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値=(「5」回答数×5+「4」回答数×4+「3」回答数×3+「2」回答数×2+「1」回答数×1)/回答数小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数



平成27年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 玉川教育・FYE科目群 一年次ゼミ- 102

回答数(全体): 1570

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	1.9	25

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	4.0	0
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.6	6
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	

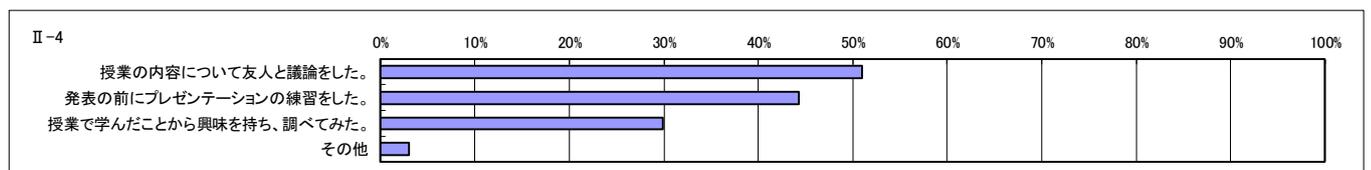
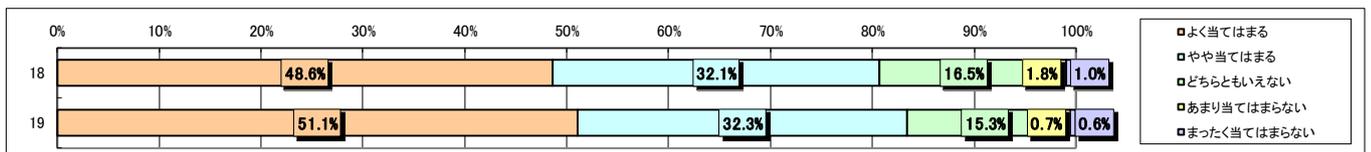
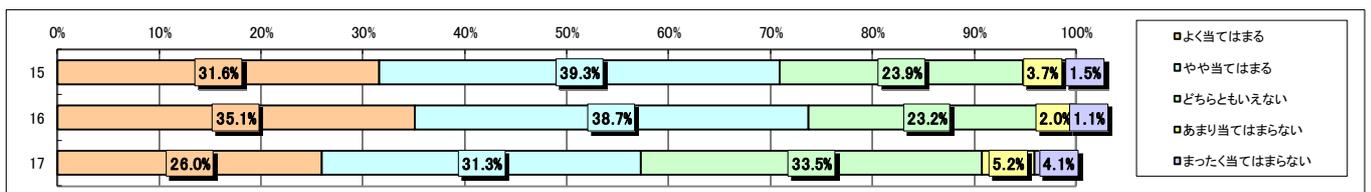
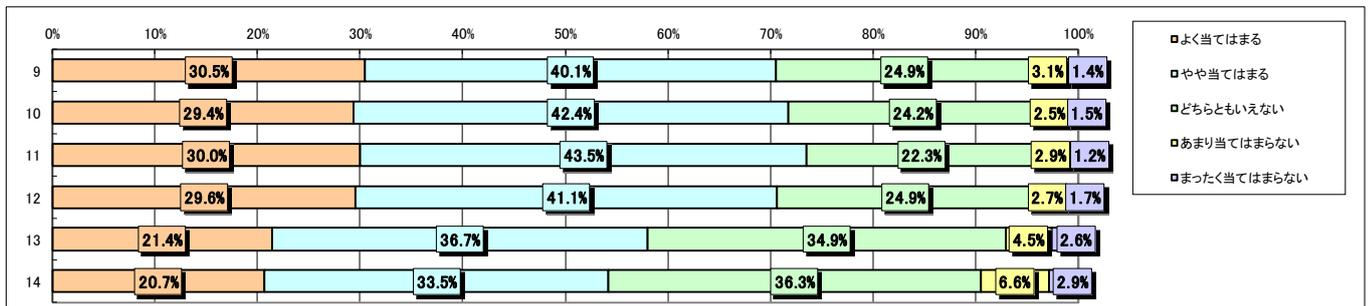
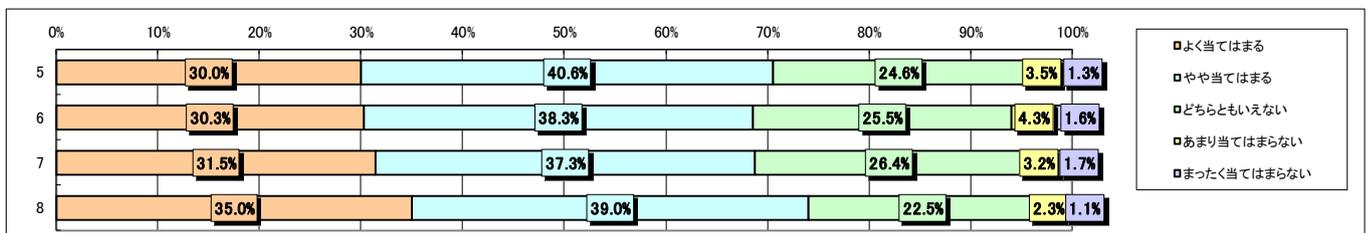
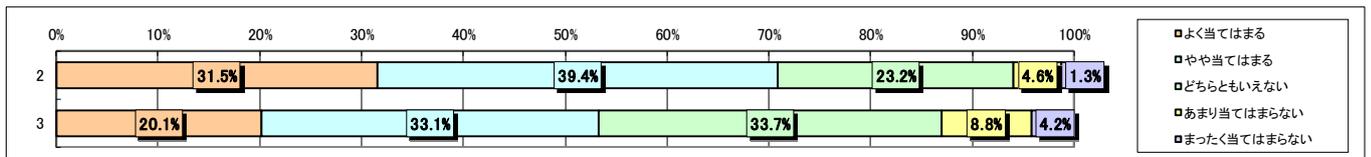
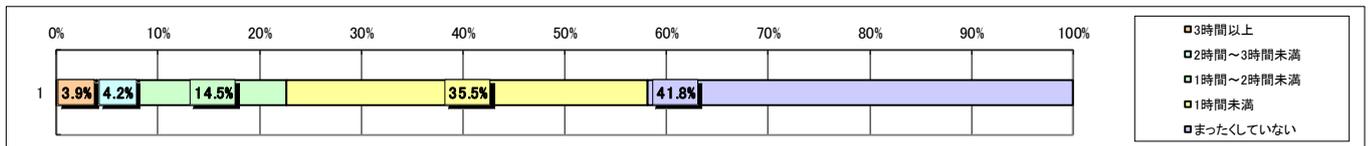
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	3.9	2
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	3.9	0
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.9	0
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.0	0

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	1
	10 基本的知識が得られた。	4.0	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	2
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	2
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.7	4
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.6	4

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	2
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	1
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.7	2

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	4
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.3	4

集計・ 分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	51.0%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	44.3%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	29.9%
	その他	3.0%



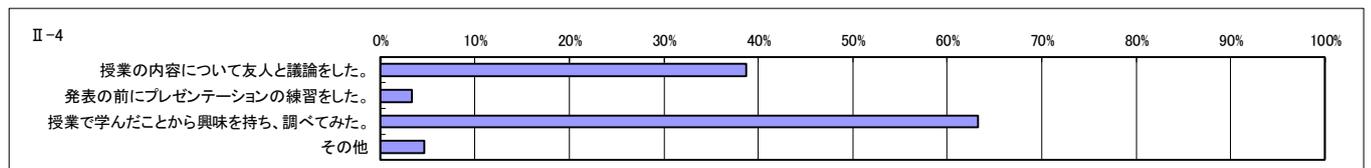
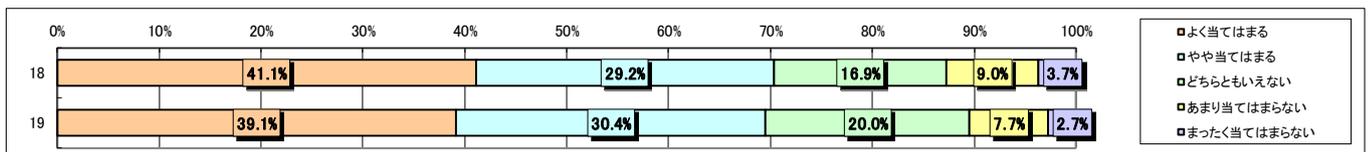
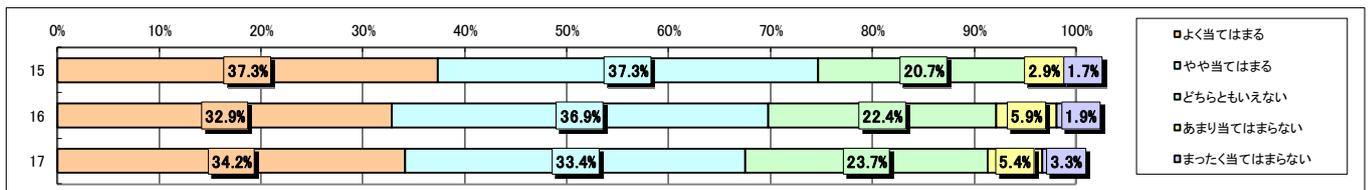
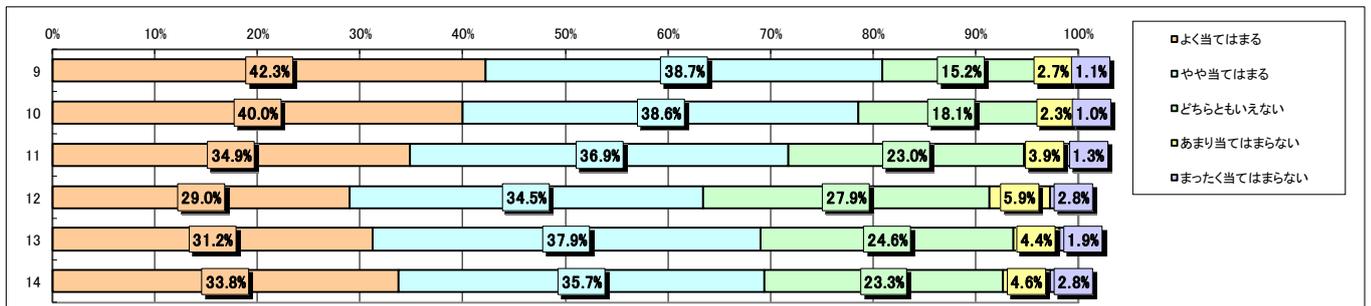
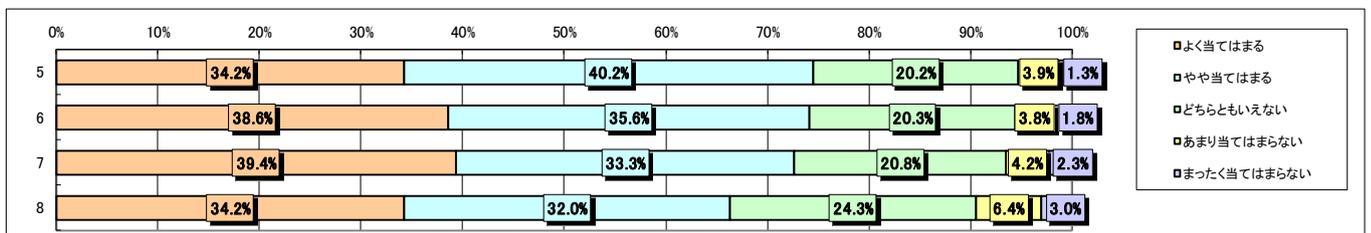
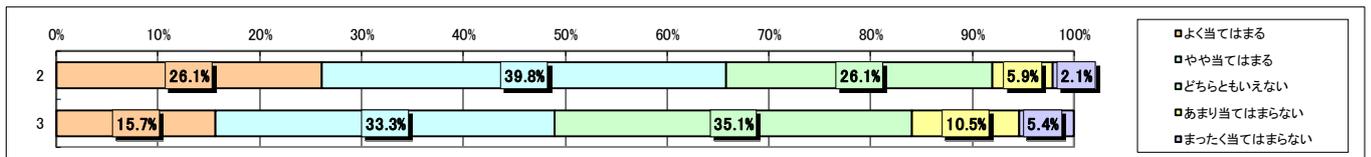
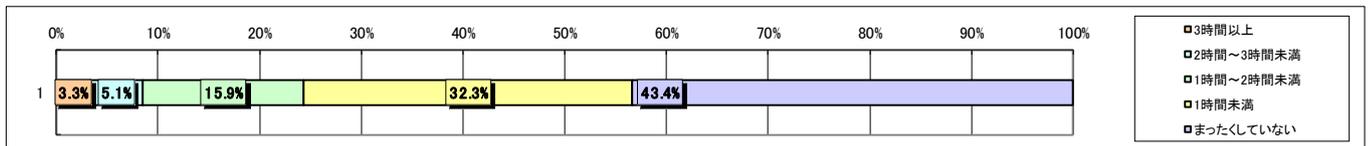
平成27年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 人文科学科目群

回答数(全体): 2312

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	1.9	33
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.8	2
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.4	8
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	5
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	4
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	5
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	5
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.2	3
	10 基本的知識が得られた。	4.1	3
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	7
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	5
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	7
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	7
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	3
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	2
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	4
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	3.9	11
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.0	11
集計・ 分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)		
	授業の内容について友人と議論をした。	38.7%	
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	3.3%	
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	63.3%	
	その他	4.6%	



平成27年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 社会科学科目群

回答数(全体): 1750

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	1.9	42

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.8	0
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.3	6
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	

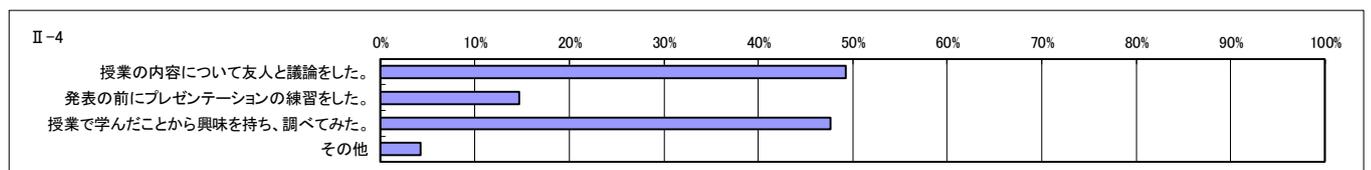
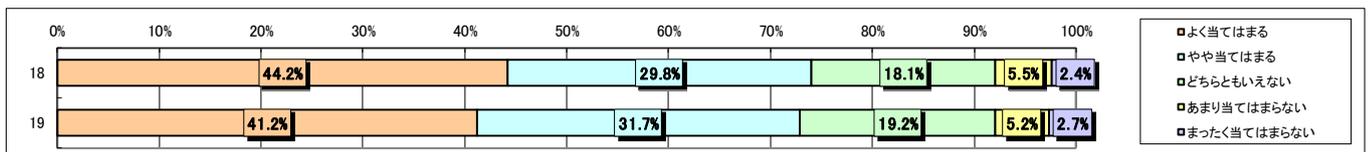
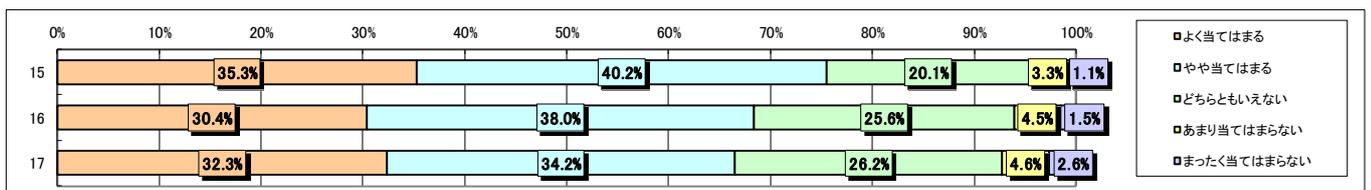
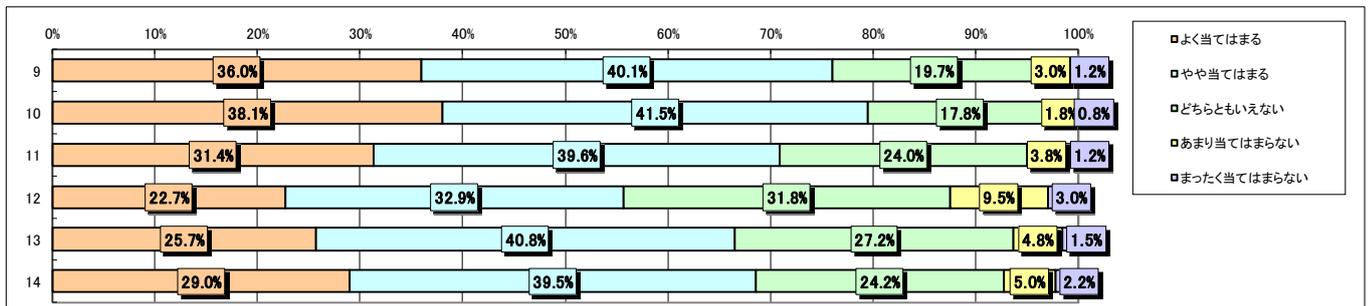
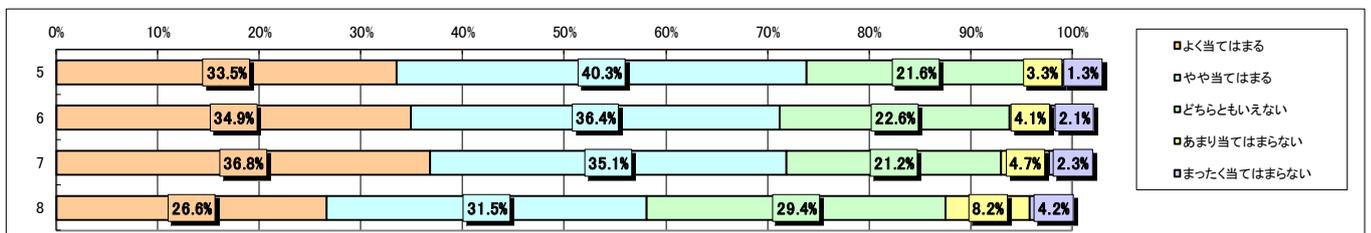
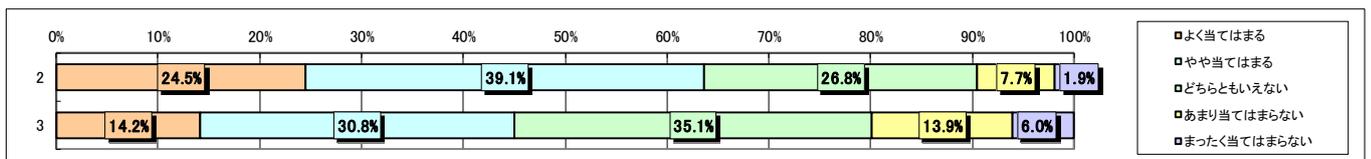
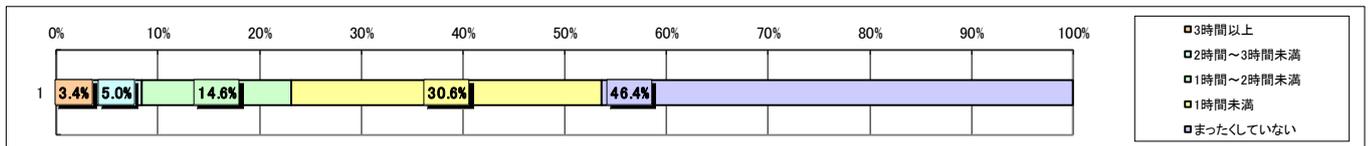
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	1
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	4
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	6
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.7	4

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	1
	10 基本的知識が得られた。	4.1	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	2
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.6	4
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	3
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	5

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	5
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	4
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	2

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	8
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.0	8

集計・ 分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	49.3%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	14.7%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	47.7%
	その他	4.2%



平成27年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 自然科学科目群

回答数(全体): 1512

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.1	31

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.8	3
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.4	1
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	

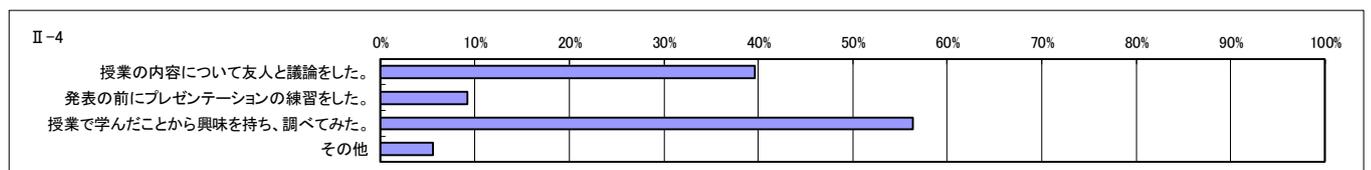
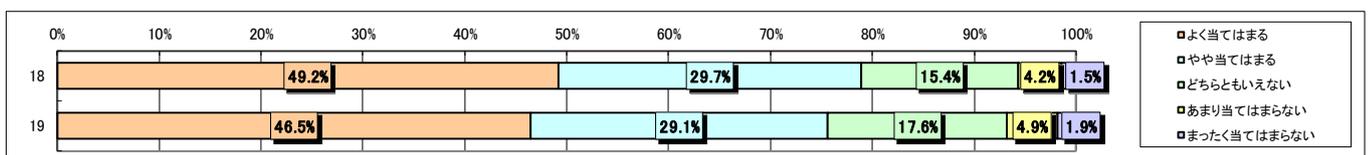
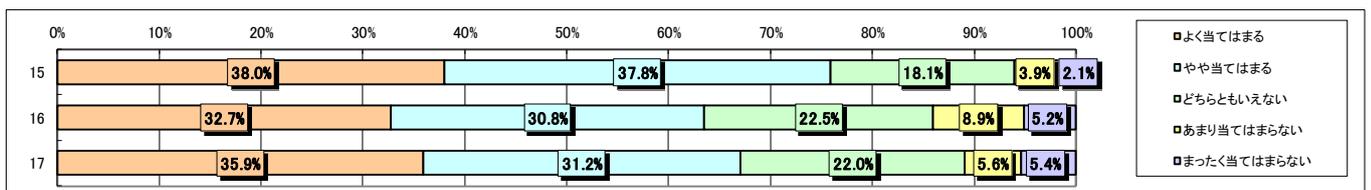
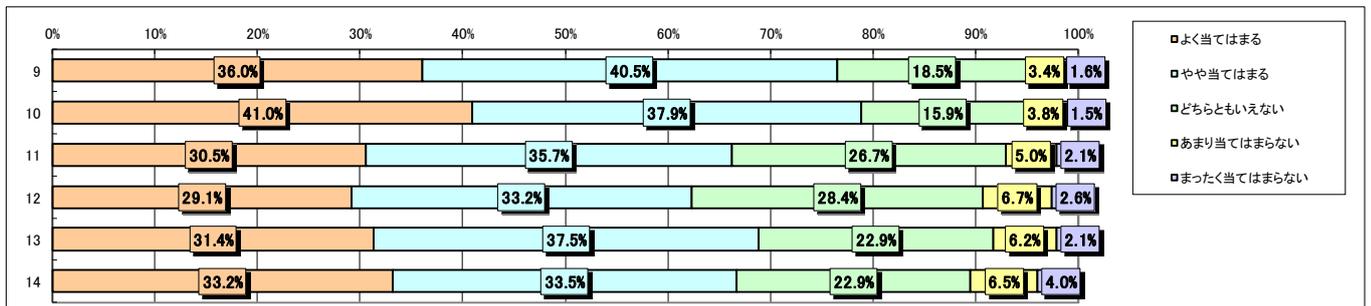
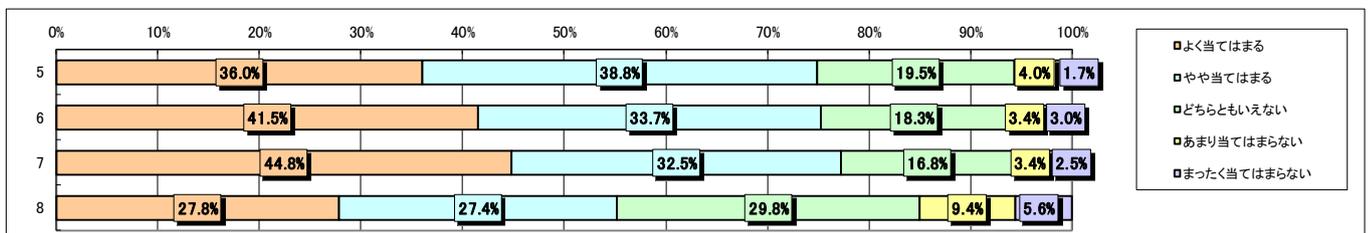
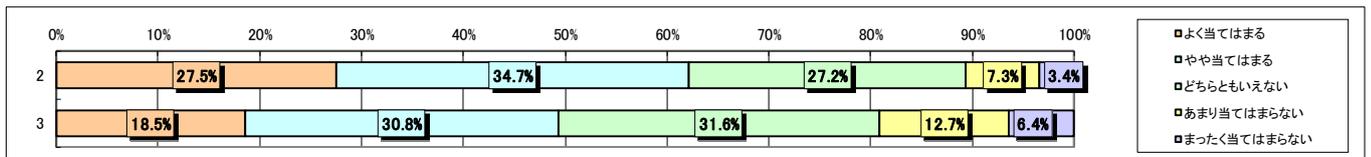
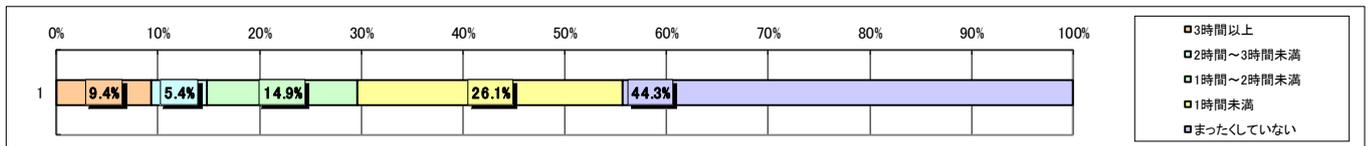
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	1
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	2
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.1	2
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.6	0

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	0
	10 基本的知識が得られた。	4.1	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	2
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	2
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	4
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	3

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	0
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.8	0
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	2

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	5
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.1	4

集計・ 分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	この授業の 平均値	無効 回答数
	授業の内容について友人と議論をした。	39.6%	
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	9.2%	
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	56.3%	
	その他	5.5%	



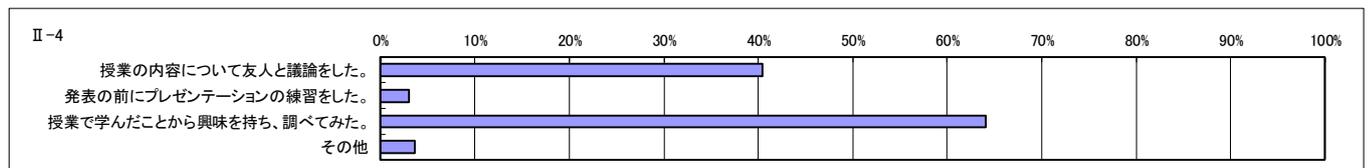
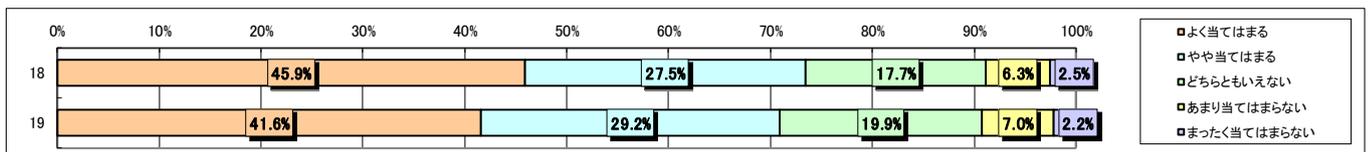
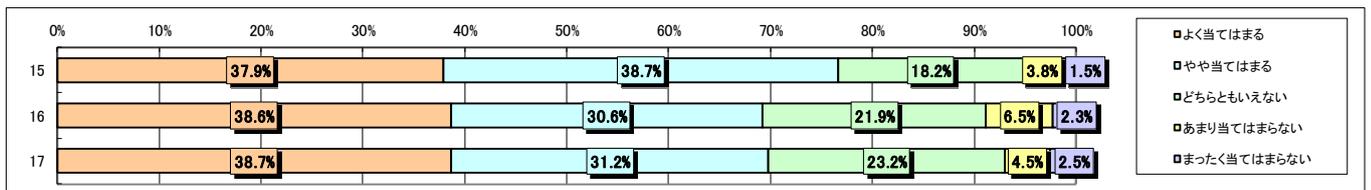
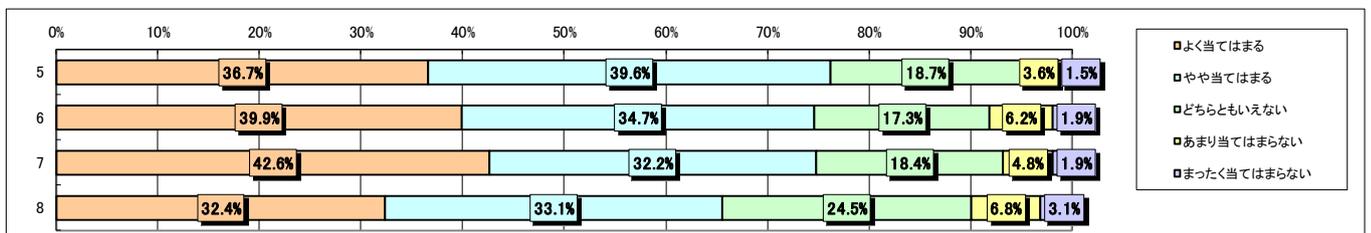
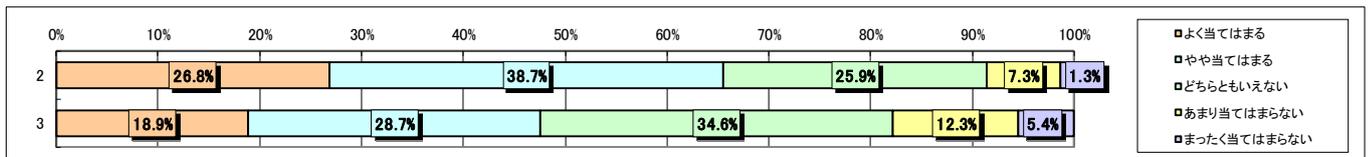
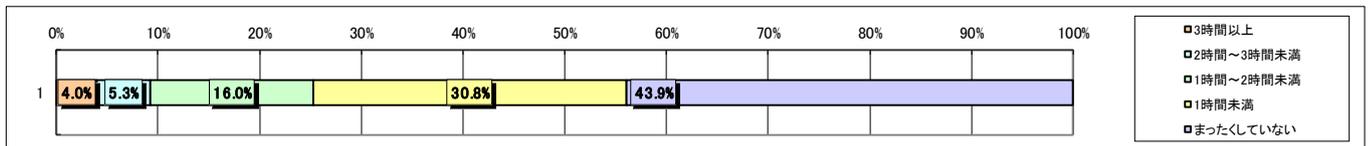
平成27年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 学際科目群

回答数(全体): 827

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	1.9	19
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.8	0
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.4	1
	4 学生の自主的・発展的な学修内容 ※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	3
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	0
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.1	1
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.8	0
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.2	1
	10 基本的知識が得られた。	4.1	2
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.1	4
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	2
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.0	2
	14 学問的興味をかきたてられた。	4.0	1
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	1
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	1
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.0	2
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	3
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.0	3
集計・ 分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)		
	授業の内容について友人と議論をした。	40.5%	
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	3.0%	
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	64.0%	
	その他	3.6%	



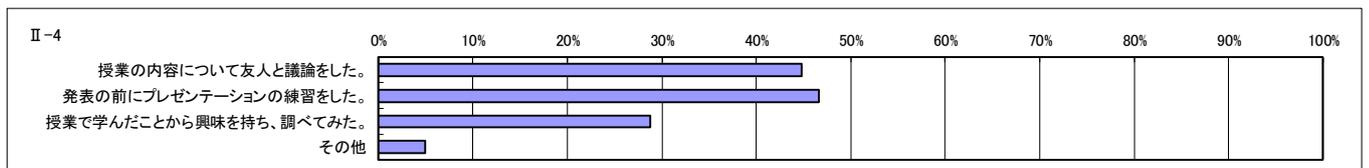
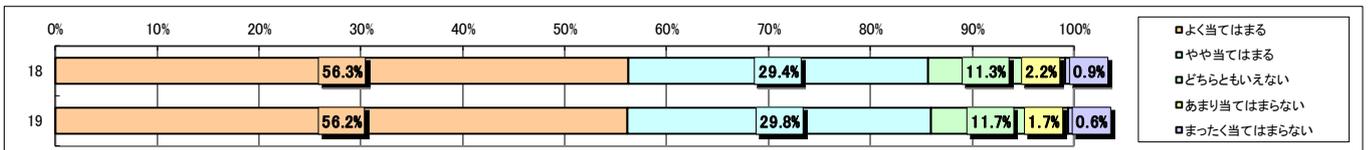
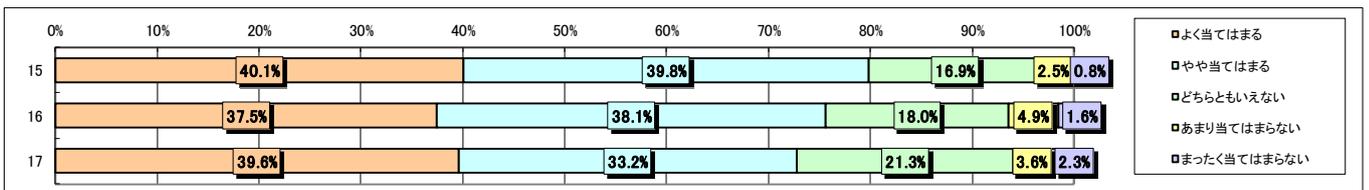
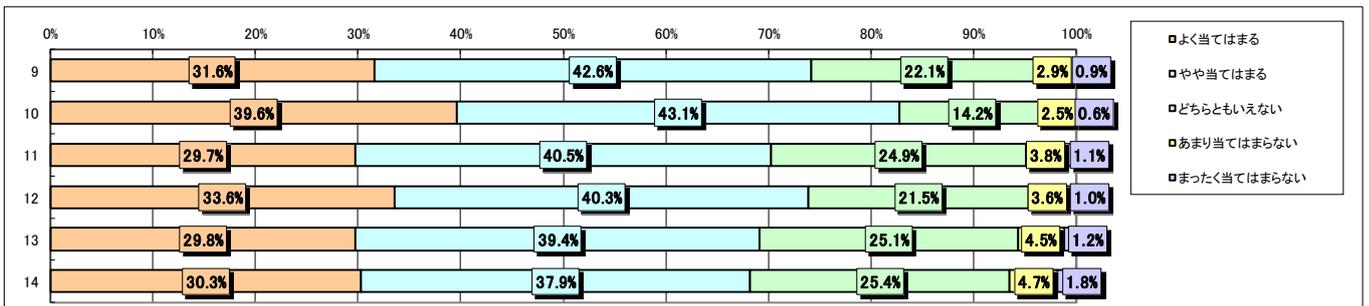
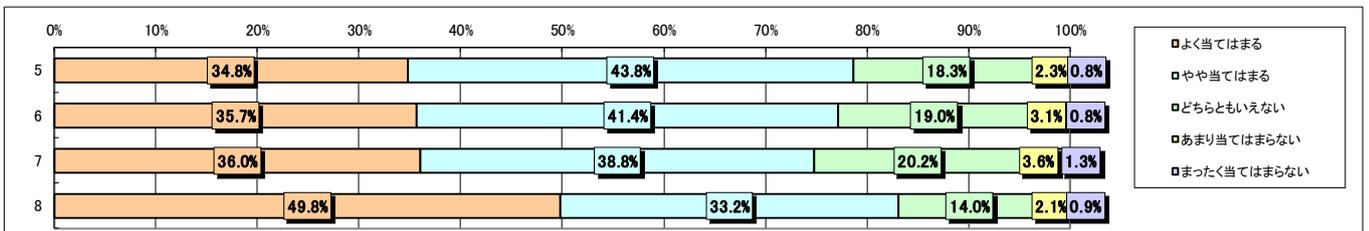
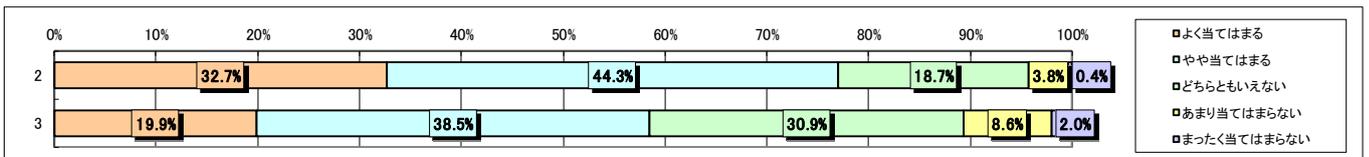
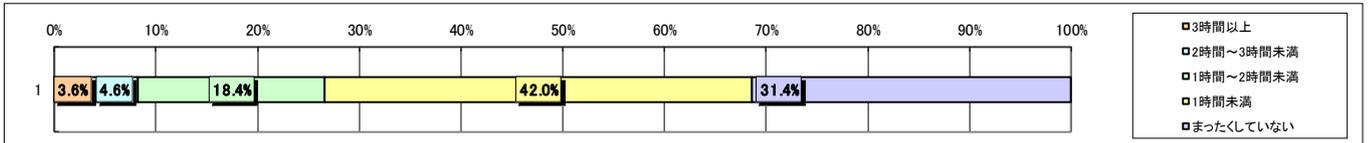
平成27年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 言語表現科目群

回答数(全体): 2348

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.1	24
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	4.0	0
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.7	5
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	8
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	4
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.3	2
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	0
	10 基本的知識が得られた。	4.2	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	3
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.0	5
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	2
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	6
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.2	2
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.1	3
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.0	3
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.4	2
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.4	2
集計・ 分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)		
	授業の内容について友人と議論をした。	44.8%	
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	46.6%	
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	28.7%	
	その他	5.0%	





参 考 资 料

参考資料 1. 大学 FD 委員会の議事内容

第 1 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 平成 27 年 5 月 1 日 (金) 17:30~19:00
- 場 所 : 大学教育棟 2014 793 会議室
- 議 案 : (1) 平成 27 年度 会議日程に関する件
(2) 平成 27 年度 US 科目 学生による授業評価アンケート 実施に関する件
(3) 学生による授業評価アンケートの変更に関する件
- 報 告 : (1) 平成 27 年度 FD 研修会等について
(2) 各学部 今年度 FD 活動計画および授業参観計画の提出について
(3) 「平成 26 年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」の配付方法について
(4) 他大学等提供のシンポジウム等および資料提供について

第 2 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 平成 27 年 7 月 10 日 (金) 17:30~19:00
- 場 所 : 大学教育棟 2014 793 会議室
- 議 案 : (1) 学生による授業評価アンケートの変更に関する件
(2) 今年度 各学部の FD 活動計画に関する件
- 報 告 : (1) 今年度 授業参観計画について
(2) 将来計画委員会 部門別研究会について

第 3 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 平成 27 年 11 月 13 日 (金) 17:30~19:00
- 場 所 : 大学教育棟 2014 793 会議室
- 議 案 : (1) 新任教員研修会に関する件
(2) 学生による授業評価アンケートの Web 化に関する件
- 報 告 : (1) 今年度の FD 研修会等について

第4回大学FD委員会

日時 : 平成28年1月8日(金) 17:30~18:30
場所 : 大学教育棟 2014 793 会議室
議案 : (1) 大学教育力研修会 (FD・SD) に関する件
報告 : (1) 教職課程 FD・SD 研修について

参考資料 2. 「授業評価アンケート」用紙

平成 27 年度春学期

記入日 月 日

回答者学年 ①1年 ②2年 ③3年 ④4年 ⑤その他

授業科目名

開講時限 曜日 限

担当教員名

	5	4	3	2	1
	3 時間以上	2 時間 < 3 時間未満	1 時間 < 2 時間未満	1 時間未満	まったくしていない
1	5	4	3	2	1
2	5	4	3	2	1

I. この授業に対するあなたの学習時間について

	5	4	3	2	1
1	5	4	3	2	1
2	5	4	3	2	1

	5	4	3	2	1
	よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない

II. この授業に対するあなたの取り組みについて

	5	4	3	2	1
3	5	4	3	2	1
4	5	4	3	2	1

III. この授業の進め方について

	5	4	3	2	1
5	5	4	3	2	1
6	5	4	3	2	1
7	5	4	3	2	1
8	5	4	3	2	1

		5	4	3	2	1
		よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない
IV. この授業を受けてみて						
9	新しい考え方・発想に触れた。	5	4	3	2	1
10	基本的知識が得られた。	5	4	3	2	1
11	多角的な視点から見る姿勢が身についた。	5	4	3	2	1
12	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	5	4	3	2	1
13	科目のもつ学問的意義を読み取れた。	5	4	3	2	1
14	学問的興味をかきたてられた。	5	4	3	2	1

V. この授業を総合的に振り返って

15	授業全体の目標・内容が明確であった。	5	4	3	2	1
16	授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	5	4	3	2	1
17	この授業をほかの学生に薦めたい。	5	4	3	2	1

VI. その他

18	この授業の教室の大きさは適切であった。	5	4	3	2	1
19	この授業の受講者数は適切であった。	5	4	3	2	1

その他、意見、感想など自由に書いてください。

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

記入日	月	日	回答者学年	①1年	②2年	③3年	④4年	⑤その他
-----	---	---	-------	-----	-----	-----	-----	------

授業科目名

開講時限	曜日	限
------	----	---

担当教員名

	5	4	3	2	1
	4時間以上	3時間 ～ 4時間未満	2時間 ～ 3時間未満	1時間 ～ 2時間未満	1時間未満
I. この授業に対するあなたの学修時間について					
1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	5	4	3	2	1

	5	4	3	2	1
	よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない

II. この授業に対するあなたの取り組みについて

2	この授業に積極的に参加した。	5	4	3	2	1
3	この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	5	4	3	2	1
4	どのような自主的・発展的な学修をしましたか。 <input type="checkbox"/> 発表の前にプレゼンテーションの練習をした。 <input type="checkbox"/> 授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。 <input type="checkbox"/> その他() <input type="checkbox"/> 授業の内容について友人と議論をした。 <input type="checkbox"/> 授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。					

III. この授業の進め方について

5	各回の授業のねらい・内容は明確であった。	5	4	3	2	1
6	教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	5	4	3	2	1
7	映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	5	4	3	2	1
8	教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	5	4	3	2	1

		5	4	3	2	1
		よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない
IV. この授業を受けてみて						
9	新しい考え方・発想に触れた。	5	4	3	2	1
10	基本的知識が得られた。	5	4	3	2	1
11	多角的な視点から見る姿勢が身についた。	5	4	3	2	1
12	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	5	4	3	2	1
13	科目のもつ学問的意義を読み取れた。	5	4	3	2	1
14	学問的興味をかきたてられた。	5	4	3	2	1

V. この授業を総合的に振り返って

15	授業全体の目標・内容が明確であった。	5	4	3	2	1
16	授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	5	4	3	2	1
17	この授業をほかの学生に薦めたい。	5	4	3	2	1

VI. その他

18	この授業の教室の大きさは適切であった。	5	4	3	2	1
19	この授業の受講者数は適切であった。	5	4	3	2	1

その他、意見、感想など自由に書いてください。

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

参考資料 3. 玉川大学FD委員会規程

(平成 15 年 4 月 1 日 制定)

(平成 21 年 4 月 1 日 改正)

(目的)

第 1 条 玉川大学（以下「本大学」という。）教員の、教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的として、大学FD（ファカルティ・ディベロップメント）（以下「FD」という。）委員会（以下「本委員会」という。）を置く。

(組織)

第 2 条 本委員会は、委員長、委員、事務担当をもって構成する。

- 2 前項の委員長は教学部長とする。
- 3 委員長及び委員等は、毎年度当初、学長がこれを委嘱する。
- 4 委員長が必要と認めたときは副委員長を置くことができる。
- 5 本委員会には学部ごとの部会を設けることができる。
- 6 前項による部会は、各学部ごとに設け、部会のまとめ役及び委員は学部長が選任する。

(任期)

第 3 条 委員の任期は 1 か年とする。ただし、再任を妨げない。

(運営)

第 4 条 本委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。

2 委員長が必要と認めた場合は、委員以外の教職員の出席を求め、意見を聴取することができる。

(審議事項)

第 5 条 本委員会は、次の事項を審議する。

- (1) 教育研究活動改善の方策に関する事項
- (2) 初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項
- (3) 学生による授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項
- (4) FDに関する教員への各種コンサルティングに関する事項
- (5) 教員のFD活動の指針に関する冊子及びFD活動報告書の刊行
- (6) 部会からの報告・審議に関する事項
- (7) その他FDに関連する事項

(部会)

第 6 条 各部会は、本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。

(答申)

第 7 条 委員長は、本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。

(実施事項の決定)

第8条 前条の答申内容の実施については、大学部長会の議を経て学長が決定する。

(実施事項の運用)

第9条 前条により決定した実施事項に関する実際の運用に関しては、教務委員会及び教育研究活動等点検調査委員会との調整を図りながら検討、実施するものとする。

(事務主管)

第10条 本委員会に係る事務主管は、教学部教育学修支援課とする。

附 則

この規程は、平成15年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成21年4月1日から施行する。

平成 28 年 5 月発行

発行 玉川大学 FD 委員会

〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1

tel : 042-739-8866 (教学部教育学修支援課)